
Miraculous Days

夕氷嘩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Miraculous Days

【Nコード】

N9481B

【作者名】

夕氷嘩

【あらすじ】

地味でどこかズレている少女、葵衣。そんなある時、図書室ですごい美少年と出会って　！？葵衣の日常がとんでもないものに変わっていくスクール・ラブコメディ！。王道一直線&少女マンガ風味なので、読む際にはご注意ください。苦手な方は避けた方が安全です（笑）　現在改訂中なので文の繋がりが変な箇所があるかもしれません。ごめんなさい

第1話「昼休み」

「ねえねえ、この学年で一番かっこいいのって誰だと思う？」

「うーん……… やっぱ早坂君じゃない？彼、まだ入学式から一ヶ月も経ってないのに上級生も含めてすごい人気だって聞いたわよ」

「あー……… 確かに。早坂君の人気っぷりはもはや異常だよ、異常！確かにあのクールな感じとかすごくかっこいいけどさ」

「分かる分かる……… って葵衣！聞いてるの？」

「へ？」

いきなり話しかけられて驚いた私は何とも間の抜けた返事をしてしまった。

慌てて視線をお弁当箱から上げると、三人ともなんだか凄い目つきで私を睨んでいる。

ちよ、ちよつと怖いかも………

机を挟んで私の前に座っているのは、ミヤカワエリ宮川恵理。長くて黒い綺麗な髪を下ろした綺麗な顔立ちをした女の子で、色々と世話を焼いてくれる大人っぽい子だ。

私の右隣に座っている茶色いふわつとした髪をしている可愛い感じの女の子は、サカイユリカ酒井由里香。彼女は結構ミィーハーらしく、色々なところでかっこいい男の子を見てはよく騒いでいる。

そして左隣のボーイッシュな感じのかっこいい女の子がセガワレイ瀬川玲。身長は170以上あるらしく私よりもはるかに高い。由里香によると、女の子にもファンがすでにたくさんいるとか。

三人とも高校に入ってからからの友達である。

そんな目立つ三人と比べて私は長いばさばさの髪をおさげにしてしまかしてるし、眼鏡をかけてて地味だし……………顔立ちだってぱっとしない。

教室の日陰を住処としてひっそりと暮らしている……………そんな人間だ。

「アンタね、昼ご飯食べるのに集中するのもいいけど、話ぐらい聞いてなさいよね！」

「ご、ごめん……………。え、で、三人とも何の話をしてたの？」

「だ、か、らあ、うちの学年の男子の中で誰が一番イケてるかって話よ！葵衣は誰だと思っの？」

由里香がじれったそうに聞いてくる。

か、かつこいいい男の子……………？

まだ入学式から一ヶ月経つか経たないかという時期なのだ。

学年はもちろんの事、クラスメイトの名前さえ全員を把握出来るかも危ういところなのに……………

「まあ、そんなこと言ってもどーせ葵衣のことだから興味なさそうだし、分かんないんじゃない？」
と玲ちゃん。

「てかアンタ、もしかしてこの学年で男子の名前三人も言えないんじゃないの？」

ちよつと待って！

いくら私でもさすがに三人は言えますっつて！！

「い、言えるよっ…！」

「ふーん、じゃあ言ってみなさいよ」

と恵理が意地悪く口元を上げて聞いてくる。
その挑発するような笑みに力チンときた私は、意地になって必死に頭をフル回転させた。
クラスにいる男子の顔を必死に脳内に呼び起こす。

え〜と〜……

「山下君でしょ……………それと相川君に……………ん〜と……………
あっ！波田野君！！」

無事に名前を思い出せたことに、得意な気持ちで3人の方に顔を向けると、なぜかみんな呆れた表情を浮かべていた。

え、え…？

ま、間違っていないよね？

3人の表情に急に自信がなくなってきた、あたふたしていると、傍から次々に聞こえてくるのは疲れを滲ませたため息。

「よりによって覚えてるのがうちのクラスの地味ーズかよ……………」

「アンタに聞くのは間違ってたわね……………じゃあ質問を変えるわ。早坂君って分かる？隣のBクラスの」

「はやさかくん……………？」

「……………その様子だと知らないみたいね。はあ……………ホント葵衣って貴重な人種かも」

駄目だこりゃ、と呟いて恵理が手を額に当てた。

「はあ……………！！！！？早坂君を知らないのっ！！！！？どう生き

てきたらそんな事がありえるわけ！？早坂君を知らないなんて信じられないっつ！っ！うちの学校、みんな知ってるわよ！！！」

由里香がそういきなり絶叫するのを聞いて、クラスメイト達は驚いて何事かと振り返っている。

あまりの大声に、きーんと耳鳴りがした。

玲ちゃんが苦笑しながら付け加える。

「ほら、新入生代表だった背が高い男の子だよ。覚えてない？それで女の子達の歓声がすごくて一時騒然となったんだけど……」

入学式………？

その時は確か読んでた本の事で頭がいつぱいになってたから、正直言ってあまり覚えてなかつたりする。

言われてみれば、騒がしかった気もするけど………

入学式の日のことを思い出そうとして頭を捻る。…だけど思い出せるのはやっぱり本のことだけで。責めるような視線を浴びながら、どンドン居心地の悪さが募っていく。

なんだか自分の注意力と記憶力の無さを呪いたくなってきた。

とその時、救いと言うべきなのか予鈴のチャイムが鳴った。

その音に弾かれたように由里香が慌てて立ち上がる。

「あああああ………！！次、深見沢の英語じゃん！！私まだ宿題してないんだっ！もうっ！チャイム鳴っちゃったけど、今度葵衣に早坂君のこと徹底的に教え込むからね！ほんとうに信じられないんだからあ…覚悟してなさいよ！」

私を鋭くねめつけたあと、ブツブツ言いながら由里香は自分の席へ

と戻っていった。

玲ちゃんも「由里香から質問責めされる前にとりあえずチャイムが鳴って良かったね」と私に小さく耳打ちして笑うと、お弁当箱を片づけ始める。

お弁当箱に残されている食べかけのおかずを私は虚しい気持ちでじっと見つめた。

はあ……

なんだか今の昼休みすごい疲れた気がするのは気のせい……？

第2話「放課後の図書室で（1）」

終礼が終わると、教室内は解放されたようにざわめき始めた。せつせと教科書を鞆につめてしていると、恵理が話しかけてくる。

「今日みんなで例の駅前のカフェに行かないかって話なんだけど、葵衣は行ける？」

「ごめん……今日から図書委員で放課後残らなきゃいけないくて。だから三人で行ってきて？すぐく残念だけど………」

前からみんなの中で話題だったカフェ。

雑誌でもとりあげられた店らしく、恵理の話を聞いてからちよっぴり気になっていたりした。

申し訳ない気持ちで謝ると、恵理は少し残念そうに笑った。

「そう……じゃあまた今度の機会に一緒に行こうね。まあ、今回は由里香が葵衣に早坂君の事を教えるって張り切ってたし……来なくて逆に正解かも」

うっ……ホント行かなくて正解かも。

由里香に一度捕まったら永遠にそこから抜け出せない気が……

由里香が「早坂君」のことを熱弁する姿を思い浮かべて、私は思わず苦笑してしまった。

きつと放っておいたら、由里香は何の苦もなく軽く3時間は喋り続けているのではないだろうか。

「それに本の虫である葵衣にとって図書委員ほど絶好な機会はないものね」

どこか面白そうな表情を浮かべながら、恵理がくすくすと笑った。

ええっ！？ほ、本の虫……？

確かに本を読むのは好きだけど、虫って響きは…なんだかちょっと

……

私がつくりとうなだれていると、恵理は可笑しそうに肩を震わせながら、

「うそよ嘘。ちょっとした冗談なんだからそんなに真に受けしないでホントに葵衣つてからかうと面白いわよね」

と私の肩をぽんと軽く叩いて「じゃ、また明日ね。図書委員がんばって」と言い教室のドアへと向かっていった。

からかわれたのか……

シヨックなようなホツとしたような、そんな曖昧な気分で引きつった笑顔を浮かべながら彼女を見送った。

*** ** *

私の学校の校舎はA棟とB棟に分かれている。

A棟には主に各学年の教室や教員室があり、B棟にはその他の教室つまり選択教室や資料室、図書室が配置している。

A棟とB棟は結構距離が離れているため、私は早足で図書室へと向かわなければならなかった。

あと3分しかない……

このままじゃ先生との約束の時間に遅れてちゃう……！

約束というのは……妊娠して産休に入っている史書のひとの代わりに図書室の管理を任されている美智子先生との約束のこと。

今日の朝偶然廊下ですれ違った時に、美智子先生に放課後に会議があるから早めに図書室に来て欲しいと言われたばかりだった。

大好きな図書室の委員をやるということで喜びに舞い上がっていた私は「任せてください」なんて大口まで叩いちゃったし……なのに遅刻してしまうなんてありえない話なわけで……

慌てて図書室に駆け込むと、案の定というべきなのか、美智子先生が笑顔で出迎えてくれた。

背後で揺らめいている凄まじく黒い影に、ひっと悲鳴が喉まで出かかりそうになる。

ひよえ、こっ、こわい……！！

せ、先生、いつもの美しい顔が台無しですよ……？

まさかそんな事を面と向かって言えるわけもない私は、へらっと笑ってごまかしてみるが敢えなく失敗した。

「しらすきあおいさあくん？私今日は4時から職員会議があるって言わなかったかしらあ？早く来てほしいって今朝お願いしたわよね？」

は、はい……

確かにしっかりと聞きました……

「今、何時だか知ってるかしらねえ?？」

4時5分です。ハイ……

先生、その仮面のようにはりついた笑顔が怖いです……

「てなわけで、罰として貸し出しの記録をまとめておいてね〜」

そう美智子先生は言い残すと、仕事を代わりにやってもらえるなんてラッキーと言わんばかりに、嬉しそうにスキップで駆けていった。その素晴らしく浮かれている後ろ姿を見て、小さくため息をつく。

はあ…、自業自得……だよな。

結局約束の時間に合わなかったのだから、罰を受けても当然のことなのだ。

なのに罰といっても貸し出しのまとめの記録ぐらいで済んだから、まだ良かったのだろう。

カウンターの席につくと、私は貸し出しの記録のノートを探し始めた。

第3話「放課後の図書室で(2)」

放課後の図書室には意外にも人がいない。

今日もこの広い空間にはちらほらとしか人の影がなかった。

まあ、その方が都合が良かったりするんだけど……

私は一通り貸し出しの記録をまとめ終わると、読みかけの本を鞆から取り出した。

人が少ない方がゆつたりと静かな雰囲気を読むことが出来るのだ。

私が今読んでいるのは天音夜椰さんの『アマネヨヤ星屑』ホシクスというシリーズの本の三巻目。

意地っ張りだけど根は優しい主人公の少年が、冒険をしながら少しずつ成長していく話だ。

恋愛要素も含まれていたりしている。

ありきたりな話だけど、読み始めたら止まらない。

今まで結構本を読んできたけれど、この本は中でもお気に入りの一作となっている。

確か全八巻だったと思うけれど、残念な事に学校の図書室には三巻までしかなかった。

今度本屋さん行ってこのシリーズの続きを探さなきゃなあ……

そんな事をぼんやりと考えながらも、私はいつのまにか本の世界へとめり込んでいった。

ふと気がつくのと辺りは暗くなり始めていた。
暗い図書室に赤い夕陽が細くなつて、窓から幾筋も差し込んでいる。
先ほどまでいた生徒達の姿もいつのまにか見えなくなってしまつて
いた。

図書委員の活動時間は一応、4時から6時までということになって
いる。

今は5時45分。

そろそろ職員会議も終わる時間のはずだ。

美智子先生ももうすぐ図書室に戻ってくるだろうか？

開いていた本を閉じて鞆の中にする。

本の整理を始めようとカウンターの席から立ち上がるとしたその
時 ……

《ガラッ》

図書室のドアが勢いよく開けられる音に、私は振り返った。

「美智子先生？貸し出し記録って」

私は口を開きかけながらそのまま停止してしまった。

こんな時間に生徒…？

図書室に入ってきたのは美智子先生ではなく、背の高い男子生徒だ
った。

顔を俯けているためか、表情がよく見えない。

訝しげに思いながら私ははっと我に返ると、慌てて男子生徒に尋ねた。

「えっと……返却ですか？」

顔を上げた少年と目が合う。

その途端、私はまたもやフリーズしてしまった。

黒い無造作な髪にシャープで鋭い目元。

鼻筋も綺麗に通っていてなんと精巧な顔立ちをしていた。

すっ、すっい……！

きれい……男の美人ってこういう人の事言っただろうなあ……

思わず少しの間見惚れてしまった。

すると私の声を見無視しているのか単に聞こえなかったのか、美少年は無言のまま本棚へと向かっていった。

その様子に顔をしかめる。

……なんだか感じ悪いな、この人。

先輩かな？大人びている顔してるしちょっと偉そうだし……

私は改めて本棚に目を走らせている美少年をまじまじと見つめてみた。

ん……と、どっかで見た感じの顔なんだよね。

なかなか思い出せないんだけど……

ちらちらと頭の中を掠めていくものを必死に掴みとろうと頭の中で格闘していると、いきなり目の前が影で暗くなった。

顔をあげると、美少年が本を私に向かって突き出していた。

「早くしろよ。お前、図書委員なんだろ」

目の前の顔を見た瞬間、頭の中でピントが一致した。

一気にぶわーっと視界が開けるような感覚が広がっていく。

ああっつ！

お、思い出した…！！

第4話「星屑少年」

意地っ張りで透き通るような黒髪をもつ少年……………

「星屑少年っ！！」

そっだ！

このひと、私が思い描いてた『星屑』の主人公の少年とイメージと
ぴったりなんだ！

あゝすつきりしたあ……………

美少年はなぜか眉をしかめた後、驚いた表情でこちらを見ている。

あっ……………またやってしまった……………

私ってすぐ思ったこと何でか口に出しちゃうんだよね。

「す、すみません。えーっと…貸し出しですね」

うわぁー…これじゃあ私本当に変人じゃないか。

急に叫んだりした自分が恥ずかしくなって、慌てて記録に目を落とす。

「じゃあ、学年とクラスと名前を言ってもらえますか？」

「…は？」

「え？」

美少年の怪訝そうな声に思わず反応してしまった。

私、またもしかして気付かないうちに何かしちゃった……………？

「えつと………?」

「お前、俺のこと知らないのか?」

美少年はいきなりそう尋ねてくる。

私は躊躇いがちにも小さく頷いた。

だってこんな美少年、一度見たらなかなか忘れる事なんて出来るわけがない。

するとなぜか美少年はぶつと小さく吹き出した。

「ふーん、めずらしい奴もいるもんだな」

はい………?」

「お前、名前は?」

いや、美少年さんよ。

さつきから私が君に名前を聞いているのだが?

そうは思いながらも、妙な威圧感におされ気味になり強く前にでれないまま、私はしぶしぶと名前を口に出した。

「一年の白崎葵衣です。というかあの………学年とクラスと名前を…

……」

「一年Bクラス早坂健人」
ハヤサカケント

ええっ!?

この人一年生なの………!?

うわぁ、ぜつたい詐欺だぁ………

一年の癖にこんな態度が大きかったの?

……ってアレ？

「……はやさか……？」

つい最近、いや、ついさっきこの名前をイヤというほど耳にしたぞ？

「あのさ」

「えっ!？」

「早く借りたいんだけど、さっさとしてくんない？」

「は、はいっ!！」

私は鉛筆を持つと慌てて貸し出しの記録の欄に記入し始めた。

「お前さ、その本好きなの？」

「本？」

動かしていた手をとめて見てみると、美少年、もとい早坂君は私のあけっぱなしの鞆に入っている本を見ていた。

「本ってその『星屑』のこと??う、うん。そのシリーズはすごい好きだよ」

「ふーん…。さっきの星屑少年って何？」

うわあ~~~~!!

は、恥ずかしい……

やっぱり、さっきの発言ばっちり聞かれてたのか……

「う、ごめんなさい……えっと、この本に出てくる主人公のイメージがあまりにも早坂君にぴったりだったから……つい、そのお……

……」

恥ずかしすぎて顔を俯けていたが、早坂君からは何も反応が返ってこない。

やっぱり変な子だと思われたよね……

そろそろ顔をあげてみると、驚くことに早坂君は私の顔をじーっと見つめていた。

うわぁ……美少年に見つめられるってすごいプレッシャーだ……

私は恥ずかしさを隠すように、慌てて止まっていた手を動かし記入し終わると、顔も見ずに早坂君に本を手渡した。

ぜったい今顔真っ赤になってる気がする……

すると早坂君がいきなり堪えるように体を震わせ始めた。

「くくっ………すげえ顔真っ赤。どうやったらそうなんだ」

そ、そんなに笑わなくてもいいのに………！

「お前葵衣っていったっけ？今週はずっとここに居るのか？」

「えっ？う、うん」

「どうせここにはそのシリーズ三巻までしかないだろ？続き持つてるから貸してやるよ」

「えっ！？うそっ！？いいの！？」

思ってもみない話に驚いて目を見開く。

「ああ。そのかわり、俺が放課後図書室にいることは絶対誰にも言うなよ」

「は、はい……」

早坂君はそう言って本を受け取ると、鞆を手にして図書室から出ていった。

私はなぜだか早坂君の笑顔が頭から離れないまま、しばらくドキドキしてその場から動けないでいた。

第5話「上機嫌な朝」

早坂君という人物に出会った翌日 ……

靴を履き替えていると、恵理とちょうど靴箱で会った。恵理は眠そうに欠伸をかみ殺している。

「おはよー…」

「おはよー。あれ、玲ちゃんは？」

いつも恵理と玲ちゃんは一緒に学校に来ている。なんでも最寄り駅が同じらしい。

「あー、玲はねえ… バスケ部に入ったらしくて今日から朝練が始まるって。だからこれから時間はバラバラになるかしらね」

「…へ？バスケ？」

バスケかあゝなんだかすごく玲ちゃんらしい。女の子にも更にモテちゃいそうだなあ。

バスケ部ということに何の違和感もなく、うんうんと納得がいった。

「あれ？そういうえば部活ってもう入部する時期だっけ？」

「なに言ってるのよ、入部届け四月中に出さなきゃいけないのよ？あと残り数日しかないじゃない」

す、すっかり忘れてた…

「恵理はどこに入るの？」
「私？私は新聞部よ。」

恵理がしれっと答えた。

恵理まですでに部活を決めてしまっていたとは……

「アンタはどうするの？大体もう目星はついているわけ？」

「ううん、全然……」

「はあ……相変わらず呑気ね。仮入するなりして早く部活決めちゃいなさいよ」

「はい……」

教室に入って席に着くと、隣の席にいた由里香が話しかけてきた。

「葵衣、部活きまつた？」

「ううん、まだ……玲ちゃん、バスケット部に入ったんだってね」

「えっ、うそ、まじで！？初耳だよおそんなことー玲ったら言うてよねえ、つたくアイツはあ」

「由里香は？」

「あっ、そうだった。葵衣さあ、もし入りたいところが特にないんなら私と一緒に映画研究会に入らない？葵衣って確か本だけじゃなくて映画も好きだったよねえ？」

「え、映画研究会？」

「ねっ、一緒に入らない？」

確かに映画鑑賞も実は結構好きだったりする。

この前の日曜日も『パイーツオブカリビアン』見ちゃったぐらいだ。

まあ、映画はひとりで見る方が好きなタイプだったりするのだけど

……

この学校にまさか本の研究会なんてあるわけないしなあ……

「うん、じゃあ一緒に入るっか」

「やったあ　　！！さっすが葵衣　　じゃあ早速入部届け昼に出しに行こお」

「でも、私、由里香が映画好きだなんて知らなかったよ」

「ふふっ、実は理由はそれじゃないんだなあ」

「は？」

どういふこと???

「まあそれは後でのお楽しみって事で」

由里香はニヤニヤしながらそう言つと、上機嫌で退散していった。

あっ………そういえば早坂君について聞こうと思ってたんだけど……

まあ、また今度でいいよね。

昨日会つた早坂君は十中八九、由里香が言つてた『はやさかくんなのだらう。』

昨日のことを思い出し、なぜだか嬉しくなった。

これで買わずとも『星屑』の続きが読めるのだ。

このとき、葵衣は由里香と同じく自分も上機嫌になってしまった本当の理由などまだ知る由もなかったのは言うまでもない。

第6話「視線」

頬杖をついてぼんやりと教室の窓の外を眺めた。
いつのまにか小降りだがしとしと雨が降り始めている。

あちゃー……私今日かさ持っていないんだけどなあ……

そんなぼうつとした思考も、教室に駆け込んできた女子のクラスメイトの突然の大声で途切れた。

「女子のみんなあ！朗報だよ、朗報！！次の体育、雨だから隣のBクラスと合同だってー！！」

教室にいた女子達から「うそーっ」とか

「やったー」などといった凄まじい歓声が沸き上がる。

男子達は反対に肩をがっくりと落とし、一気にテンションが落ちて
いる。

な、なにゆえ……？

「な、なんで皆こんなに喜んでるの？」

玲ちゃんが隣で苦笑した。

「ははっ、やっぱり葵衣ってなんかズレてんだよね。あのね、それは
例の彼が隣のクラスにいるからだよ」

れ、例の彼……？

「ほら、昨日話してた早坂君の事だよ。せつかくのチャンスなんだし、この機会によく奴の姿を睨に焼き付けておきなよ。まあ、一度見れば忘れないだろうけど」

はっ、はやさか君!?

いきなり飛び出してきた名前に、なぜか一気に顔に熱が集中する。

玲はそんな葵衣の様子を見て、眉をしかめた。

「葵衣……?」

「うっん、なんでもない……早く更衣室に行こ!」

私は慌てて玲ちゃんの腕を引っ張って、教室の外へ出た。

今日の体育は女子はバレー、男子はバスケットだ。

体育館は二クラス合同のため生徒の数も多く、熱気に包まれている。当分じぶんたちの順番がまわってくることもないので、ほとんどの生徒達は壁の端に座って雑談を繰り広げることになった。

由里香は待つてましたと言わんばかりに、私たちを男子側の壁へと引き連れていく。

「あーっ!!もう試合が始まっちゃってるよお」

なるほど。

周りを見ると、どうやら他の女子生徒も同じ事を考えているらしく皆集まってきているようだ。

あちこちで「早坂くん」と呼んだりする声や「きゃー」とかいう悲鳴が聞こえてくる。

コート内でボールを奪い合う男子達に目を走らせると、中でも一際目立つ男子の姿が目に入った。

あっ……………！

「うーん、やっぱり早坂君って今更だけどすごい人気ね。驚いたわ」「スポーツも出来るなんて、こりゃ反則だよな。あー、うちもバスケやりたいなあ」

由里香はというとクラスでも目立つ派手な女の子達に負けじと応援しに前に出ていったようだ。

「葵衣、早坂君どれかわかった？」

私はこくこくと頷いた。

やはり彼はあの早坂君だったのだ。

遠目ではあったけれど男子の中で早坂君はやはりダントツにうまいのが分かる。

知らず知らずのうちに目で彼の姿を追ってしまうのだ。

「あーでも、あの人も結構かっこいいわね」

そう恵理が言っつて突き出した指のさきには、少しパーマがかかった髪を茶色く染めた男子生徒がいた。

「あれって確か早坂君と仲がいい、ヨシザワ芳沢君だよな。そういえばあの
人、一見早坂君がいるから目立たないだけで性格も明るいし、それ

なりに人気あるって聞いたな」

試合終了のホイッスルが鳴ると、芳沢君とかいう人は何だか楽しそうな表情を浮かべて早坂君と喋っていた。

仲がいいというのも玲ちゃんが言うようにあながち嘘ではないらしい。

じっとそんな様子をふたりに並んで見ていると、ふと早坂君と目があつたような気がした。

えっ……？

き、気のせいだよね………？

こんなに人がたくさんいるし、早坂君が私に気付くわけがないじゃない……

「あおいっ！！次うちらの番だっ……っ！！」

チームメイトの子の呼ぶ声がした。

私は早坂君の方から目をそらすと、動揺を隠しながら、じぶん達のコートへ向かった。

それでも、まだ早坂君が私をずっと見ていたなんて気付くはずもなかった。

第7話「嵐の告白現場の後に」

昼休みになつて由里香と二人で映画研究会の入部届けを貰いに、二年生の教室へと向かった。

教室から顔を出した映画研究会の部長さんらしき人は、細い顔に黒いフレームの眼鏡をかけていて、髪は黒くて短髪。すごい優しそうな先輩だった。

そんな先輩の顔を見つめながら、悲しい気持ちになつた。

…同じ眼鏡なのに人とはここまで違うものなのだろうか？

「はじめまして、映画研究会の部長をやっている板倉栄司イタクラエイジです。二人とも入部希望かな？」

私たちが頷くのを確認すると板倉先輩は入部届けを渡してくれた。

「二年生は合わせて八人しかいないから、今年入つてくれるとすごく俺たちも助かるんだよね」

と言い板倉先輩は人の良さそうな笑顔を浮かべる。

「来週の月曜に一年と二年の顔合わせもかねて、ざつとした映画研究会の活動内容の説明と一年生の歓迎会をやる予定なんだ。だから放課後は空けておいてくれるかな？」

『はいっ』

放課後の図書委員は今週いっぱいだったからちょうど良いのかもしれない。

珍しく（先輩を前にしているからなのか）しおらしくった由里香が口を開いた。

「あいつ、今年の一年って今のところ何人もう入部済みなんですか？」

「入部済みの一年？ああ、確か君たちを含めて今のところ十人かな。そろそろ入部届けも期限切れになるし、たぶんこれ以上は入っていないと思うけどね」

「そうなんですかあ……」

由里香はその言葉になぜか嬉しそうに顔を輝かせた。

今の言葉のどこに一体そんなに喜んでいるのだ…？

私たちは板倉先輩にお礼を言うと、自分達の教室に戻るため廊下を歩いていった。

由里香は隣でむふふとニヤニヤしている顔を隠せないでいるし……ぶ、不気味なんですけど、由里香さん……

「やっぱり私が入れた情報はトップシークレットだったみたいねえ。もし知れ渡ってたらあんな人数なわけないもんねえ」

トップシークレット？

由里香は何のことを言っているのだ？

まあ、由里香の思考回路が一般人と多少ちがっていることは今に始まったことではないのだ。

追求する気もおきない私は、ふと前方に目をやった。

今歩いているこの場所はちょうど階段の踊り場の手前。

踊り場に誰か人がいるらしく、話し声がする。

その事に同じく気付いたらしい由里香は、ちょうど壁のくぼみで死角になっているところへ私の腕を引いた。

気がないので、話し声に耳を傾ければ十分に聞くことが出来る位置だった。

「……………だって言ってるのに！なんで付き合えないわけ！？好きな人だって今はいないんでしょう！？」

こ、これは噂に聞く告白現場……………！？

う、うわあ……………、初めて生で聞くかも……………

でもこないつ誰が通ってもおかしくない場所でわざわざ告白なんてしなくてもいいのに……………

どうせ今出て行っても鉢合わせになって気まずくなるだけだし……………はあ。

「…ホントにしつこいな。さっさと失せてくれないか？まじで邪魔なんだけど」

「でもっ……………！」

「失せる」

鋭い重低音の声が静かに響いた。

その途端、空気が凍りついたのは明らかだった。

私も由里香もその場で固まってしまっ。

「たとえ好きな奴がいなくても、お前と付き合っことは絶対にありえない」

この……声……は……もしかなくても……

相手の女子生徒がそのまま駆けだしていく音がだんだん遠ざかっていった。

私たちは嵐のような告白現場が過ぎ去ってもしばらく動き出せずにいた。

息を殺したまま、足が震えてきそうになる。

やがて踊り場から何の音もしなくなると、由里香はほっと息を緩めた。

「さすが早坂君……あの冷たさを浴びたら相手の女の子も堪ったもんじゃないわね。まあ、どっちにしるあのクールさがまたカッコいいんだけどさあ〜」

そう呟きながら由里香は何故か隣で怪しげな笑みを浮かべている。だけど私は言葉が返せなかった。

頭に残っている冷たい響き……思い出してぶるつと身震いする。

とんでもない現場に居合わせてしまった……

放課後に彼と会ったとき一体どんな反応をすればいいんだろう？

なんだか急に泣きたくなってきた。

第8話「意外な一面」

放課後、私は重い足取りで図書室へむかった。さっきまであんなに放課後が楽しみだったのに……正直今はあまり早坂君と顔を合わせたくない。

そおつと図書室の中を覗くとまだ彼の姿は見えていないようだ。私はほつとして一息つくつと、カウンターへ向かった。

もしかしたら今日は来ないのかもしれない。

それだったらそれで都合はよいのだ。

本の続きは気になっていたがこの際しようがない。

席につこうとした瞬間、

「おい」

背後からの聞き慣れた低い声に思わずぎょつとして背筋をはる。

ぱつと後ろを振り向くと、カウンターの後ろにカウンターを背にして床に腰かける彼の姿を発見した。

「は、はやさかくんっ!？」

なんでこんなところにいるの!？

そう聞きたかったが、うまく言葉が続かない。

「ばーか、この時間に普通に図書室にいたらアイツらに見つかるだろ」

あ、あいつら……？

一体だれの事をさしているのだ……？

「あの………」

「それよりお前、なんで今日目をそらした？」

「え？」

なんのこと？

「そらしただろ」

暫くしてようやく合点がいった。彼が言っているのはおそろく今日の体育の時間の話だ。

私がまごついていると、

「葵衣」

という鋭い制止するような口調で早坂君が私の名前を呼んだ。

男子に名前を呼ばれることすら滅多にないのだ。

ましてやこんな美しい少年に自分の名前をいきなり呼ばれることに驚かないわけもなく、私はひどく狼狽してしまった。

「そ、そ、そらしてなんかないですっ……！！」

緊張で自然と声がつわずり、大声になってしまった。

し、しまった……！！

当然の結果ながら、自分に集中する視線に気付くと図書室にいる生徒達が私を不審そうに見ていた。

向こうからすると一見私はひとりで喋っているように見えるのだ。

は、恥ずかしい……………

なぜこんな目に私があわなければならないのだろう。

視線を右に下ろすと、案の定、早坂君は声を殺して笑っていた。

「動揺しすぎだろ」

「し、してなんかいいですっ……………!!」

「声がでかい」

な、なんで!?

早坂君ってこんな人だったの!?

噂のクールで冷血男と呼ばれる彼はいったいどこに行ってしまったのだ?

目の前にいる彼は鬼畜といわんばかりのデカい態度と口をしている。

落ち着けわたし……………!!

こんな反応をしていては相手の思う壺なのだ。

かといってすぐに冷静さを取り戻せるわけもなく、私は上気した顔をぶいとそむけた。

隣で彼がまた小さく吹き出したのが分かったが、ここは無視だ、ムシっ!

「からかって悪かったな。ほら、これ」

そう言つて、早坂君が鞆からごそごそと取り出したのは例の『星屑』の続きだった。
先程までのもやもやとした思いも一気に吹き飛び、私は夢中で本に飛びついた。

「ありがとう、早坂君！」

やっと続きが読めるんだ。

私が満面の笑顔を浮かべたのを見て、早坂君は呆れた表情をして言った。

「怒つてたんじゃないのか？ゲンキな奴」

彼に何を言つてももはや言い負かすことなど不可能だろう。

「そういえば、早坂君はなんでこのシリーズを全部持つてるの？やっぱり好きだから？それとも夜椰さんのファンだったりする？」

「いや……、……別に大したことじゃない」

どういう意味なんだろう？

問いつめてみたい気もしたが、早坂君が自分の本を読み始めるのを見て、私は諦めて続きを読むのに没頭することにした。

お互い終始無言ではあったが、どこか心地よい穏やかな空気がふたりの間に流れはじめていた。

第9話「雨と笑顔」

下校時刻の六時になって図書室の鍵を閉めると教員室に鍵を返し、早坂君と一緒に下駄箱へと向かった。

もうほとんど校舎内には生徒は残ってないのか、しんとした空気が漂っている。

外へ出ると、さきほど窓から様子をつかがった時よりもさらに雨足が強くなってるように思えた。

地面に降り注ぐ雨を見つめながら、ふと思い出す。

そういえば、わたし、傘持っていないんだっただ……

「お前、傘は？」

早坂君は折り畳みの傘をしっかりと手にしている。

私は小さく首を振って、

「持ってないです」

と答えた。

私はごそごそと鞆からハンドタオルを取り出すと、頭にかぶせた。

駅までそんなにかからないから、走ればそこまで濡れずにすむかもしれない。

「それじゃあ、早坂君また明日ね。本はなるべく早く返せるようにするね」

私は軽く手を振って、そのまま校舎の外へ駆け出そうとすると、い

きなり腕をつかまれぐいつと引つ張られた。

「お前、ホントに馬鹿？普通に駅まで傘に入れてやるって」

「えっ、いいの？」

驚いて早坂君の顔を見ると、早坂君は顔をしかめた。

「お前、一体俺のことなんだと思ってる？」

「えっ……と……」

クールな美少年かと思いきや、ただの悪魔のような鬼畜男でした。

……なんて言えるわけないし。

そんな事を言った日には……と想像しただけでぶるっと思いが走る。

そっだ、それに早坂君って……

「お、女の子嫌いなんですよ？」

「は？」

「だってそうじゃなかったらあんな冷たい態度、女の子にとらないかな、と思って……」

射抜くような視線に、声が尻^{ツボ}窄みになっていく。

さっきまで忘れていたのに、頭に告白現場がよみがえってきた。

相手の女の子を斬り捨てるような態度とあまりにも冷たすぎる口調。

嫌いじゃないというなら、一体あれはなんだというのだ？

早坂君ははあとため息をつく、私の額にいきなりデコピンをかました。

いつ、いつたあ〜！！

とつぜん額にきた衝撃にわずかにバランスを崩す。

な、な、なんでいきなり……………？

私はわざわざデコピンをくらわなければならぬ理由が分からず、
じんじんと痛む額を手で押さえながら、無駄な抵抗だと分かりつつ
も早坂君の顔をせいっぱい睨みつけた。

「あのさ、お前が言ってるのがどの事か分からないけど…………別に女
が嫌いな訳じゃない。ただ女は大抵俺の外面しか興味ないようなヤ
ツしかいないから、確かに苦手ではあるけどな」

私は何も言えず、黙り込んだ。

あとさき考えずに軽い気持ちで口に出してしまった自分が急に情け
なくなつた。

「美人が幸せとは限らない」

確かにそうなのかもしれない。

おそらく目の前にいるこの美しい少年も、きっと色々な思いを抱え
てきたのだろう。

モテすぎるっていうのも問題なんだなあ…………

「そんな思い詰めた顔をするなよ。別に気にしてないし…ほら、行
くぞ」

早坂君は苦笑してそう言うと、私を傘の中に引き寄せた。
全身を溶かしてしまいそうなくらいの優しそうな笑顔が一瞬見えた。

うわっ……………！

ダイレクトにその笑顔を直視してしまった私は平常心を保てるはずもなく、おもわず赤面してしまった顔を必死に冷まそうとした。
心臓のばくばくと高鳴る音が、耳にまでとどいてくる。

な、なんでこんなに熱くなるの！？

ただ笑った顔を、しかもほんの一瞬見ただけなのに……………！！

幸い、そんな自分に彼は気付いていないようだ。

私は一人ぎくしゃくしたまま、早坂君にならんで歩き始めた。

第10話「泣きつ面に蜂!？」

早坂君と放課後に図書室で一緒に過ごすようになって3日が経った。

相変わらず図書室での会話はあまりなかったけど、早坂君のことを少しずつだがだんだんと分かってきた気がする。

まず、本を読むことがすごく好きだということ。

先日、途中まで一緒に帰ったあの雨の日に会話の流れでそういう話になった。

「早坂君って前から放課後に図書室にきてたの？」

「……ああ。そうだけど」

「そうなんだ。体育のときすごかったからてつきりスポーツ少年な
のかなって思ってたんだけど、図書室に通いつめてるなんて文学少
年でもあつたんだね」

「まあ、確かにジャンル問わず本を読むのは割と好きかもな。面白
いもんはフツーに面白いし。図書室に来てる理由は一概にそうとは
言い切れないけど……」

そう言つて早坂君は何故か苦笑した。

「どづいこと?」

図書室に来る他の理由があるの？

「別にたいした事じゃない……それよりお前つて天音夜椰の本が好
きなのか?」

「うん、って言ってもまだ『星屑』しか読んでことがないから、読み終わったら他也読んでみるつもりだけだ」

「ふーん……じゃあ今度うちに来れば？天音夜椰のだったら他のも揃ってると思うけど」

「えっ、ぜ、ぜんぶっ！……!?」

「ああ、多分な」

「ほ、ホント？じゃあ、星屑が読み終わったら他のも借りてもいいの？」

やっぱり早坂君も天音夜椰さんのファンだったんだあ……

早く言ってくれればいいのに……

もしかしてファンって知られるのが恥ずかしかったのかな？

私がかくすくすと笑うのを見て、早坂君が眉間にしわを寄せた。

「はあ……絶対お前のことだからありえない勘違いとかしてるんだろうな。………」

「わ、分かった。ありがとう早坂君！」

今、思えば話を上手くはぐらかされただけな気もするけど……

にしても不思議だなあ。

三日前まで全く知らなかった、しかも自分とはいかにも縁がなさそうな人だったのに……

そう。

早坂君は客観的に見てもやっぱりカッコいいひとだった。

今まで全然そうだった事に興味がなかったし、まして自分からそんな話をするなんてありえなかったのだけ……

早坂君はスポーツも勉強も出来る、ホントに少女マンガの王子様を
絵に描いたような人だ。

私とはまったく違う世界に生きてるような人。

図書室で偶然会わなきゃ、これからも何の接触もないままだっただ
ろうし、もちろんあんな会話もなかったわけで。

最初会ったときは傲慢な態度に腹が立ったりもした。でも、ふとし
た瞬間にすごく優しくなったりして。

私が図書委員のこの期間が終わったら、あんなふうに放課後、過ご
せなくなるのかと思ったら少し悲しくなったりもした。

だって普段はまったくの「他人」と言っていい。たまに廊下ですれ
違っても目を合わせるだけで会話もないのだ。

まあ、それはそれで当たり前なのかもしれない。あんな会話が早坂
君と出来ることだけでも、もはや奇跡に等しい。

第一、こんな地味で根暗なメガネ女と話してて楽しいわけがない…
よね。

ううう…………………………………………………………
まう。

「葵衣？お〜い、あおいちゃん？すっごい暗いよ。大丈夫？」

はっとして現実に意識をひき戻すと、玲ちゃんが心配そうな表情で
私を見ていた。

「えっ？ああ、うん。平気へーき！」

私は慌てて手をぶんぶん振った。

「そう？ならいいけど……」

玲ちゃんがほつとした表情を浮かべた。

玲ちゃんの優しさにじーんとした。

なんていい人なのだろう……

「葵衣、アンタ悩みがあるんじゃないの？最近なんだか浮き沈みが激しいじゃない。アンタはため込むタイプなんだから。」

恵理の指摘にぐつと言葉に詰まる。

まさにその通りなので、何も言えなかった。

だけどいくら恵理たちでも話すことが出来ないのだ……

「そんなことないよ。き、気のせい気のせい。ちよつとお腹が空いちちゃったみたいで、お昼のこと考えてぼーとしちゃっただけだよ」

私はそう言っつてにつこり笑った。

良心がちくちくと痛む。

ごめんね、ふたりとも……

「あれっ、由里香は？」

きよろきよろと教室内を見回すが、姿が見あたらぬ。

国語の先生は今日は風邪で休んでしまっているため、今はちよつど

自習の時間だった。

「由里香は担任にかりだされて、自習時間にやる課題を取りに行きたよ」

ちよつど担任と一緒に重そうにプリントを抱えながら由里香が教室に入ってくる。

「ふう〜っ、死ぬかとおもったあ！ったくさとちゃんってホントひとつかいが荒いつ」

さとちゃん、というのはうちのクラスの担任のこと。

四十すぎたおじさんだけど、なかなかダンディな面白い先生だ。

「ははっ、さんきゅーな酒井。お前若いんだからババ臭いこと言つなよな。おーい、俺もう消えるけど、お前からこの時間ちゃんと課題やっつけよー！」

そう言い残して、さとちゃんは教室をさっさと立ち去っていった。由里香がどさつと隣の席に腰かける。

「はあああ〜〜疲れたあ……腕がしびれてるよお」

「おつかねー」

すると急になにかを思い出したかのように由里香がこっちに振り向いた。

「そういえばさっきさ、小耳に挟んだんだけど早坂君にファンクラブがあるって知ってた!？」

「ぶ、ふあんくらぶっ!？」

思わず声が裏がえってしまった。

恵理はいきなり目を輝かせて聞く体制に入ってるし、玲ちゃんは「へー、さすがだね」と感心したような声を上げている。

「そおっ！噂によると、おもに上級生のお姉さま方で構成されて、早坂君に近づく女を片っ端から裏で呼び出してシメあげて排除してくんだって！！まさにリンチよ、リンチ！！ファンクラブにはいると、それなりにルールとかはあるらしーんだけど、フツーに話しかけたりするのは許されてるって……………。くっそおおくく！！ぜえったいファンクラブなんかに見つからずに早坂君と仲良くなってみせるんだからあゝゝゝ！！！！！！」

もはや、由里香の叫びはわたしの耳に届いていなかった。

排除にリンチ……………？

図書室に放課後は早坂君と二人でいて、
帰りには傘にいられてもらい、
そのうえ、今度家におじやまする約束してしまった。

……………もしかしてこの事がバレたらとんでもなくまずいのでは……………
……………？

排除にリンチ？

そんなんじゃ済まないのは明らかだ。

重い鋼鉄のハンマーで脳天を突かれたような衝撃。

私はこれ以上ないくらい真っ青になった。

第11話「不用意な発言」

はあああゝ、やっと読み終わった！

本をずっと同じ姿勢で読んでいたためにすっかり凝ってしまった体をおもいつきり伸ばす。

今まで味わったことのないような満足感で胸がいつぱいになった。

やっぱり天音夜椰さんってすごい。

当たり前だけど文章や情景描写などの表現もすごく上手で、思いがけないストーリーの展開にはずっと胸がどきどきしっぱなしだった。

でもまさかあんな終わりだったとはなあゝ

なんだか読み終わっても、本の世界からいまいち抜け出せきれない。

その余韻にぼーっと浸っていると、

「読み終わったのか？」

といきなり声がかかった。

驚いて横を見ると、カウンターに寄りかかり床に座って本を読んでいた早坂君がこちらを見上げていた。

「うん、すごく面白かったよ。私ますます夜椰さんのファンになっちゃったみたい」

「だろうな。途中あんな面白い顔で泣いてたぐらいだし」

早坂君がニヤリと笑う。

えっ……！？

まさかあの姿を見られてたの……！？

私が見開いて口をぱくぱくしているのを早坂君はなんとも意地の悪そうな顔で見ている。

あまりの恥ずかしさに、顔から火が吹き出そうになった。

こっちを見てるなんて素振りまったく見せなかったくせに……
よりによって泣いてる顔を見られるなんて最悪以外のなんでもない。

あゝあ、絶対変な顔してたんだろうなあ。

それにしても、なんでこの人はこんな意地悪な事ばかり言うんだろう。

「…早坂君なんて嫌い」

悔しくなってちょっとした反抗のつもりで小さくそう呟いてみたはずが、早坂君はぴくっとこめかみを動かし鋭く聞き咎めた。

「なんか言ったか？」

これ以上ないぐらいの普通だったら卒倒してしまいそうなほど、綺麗な笑顔をはりつかせて早坂君はそう言った。

ただし目は笑ってはいなかった。

「ひっ」と思わず悲鳴が漏れる。

こっ、こわすぎる……！！

早坂君のうしろに何だか黒いものが渦巻いているように見えた気が

した。
み、見間違いか？

私が目を泳がせていると、

「ふーん……」

と早坂君の声が一オクターブ下がった。
この声はまずい、と頭の中で警鐘が鳴り響く。

「もしかして俺に言えないような事でも言ったのか？」

ほ、本当はしつかり聞こえていたくせに……！

絶対にわざとそう言っているに違いない。

というか、この能面を張り付けたような顔。間違いない。

「は、早坂君はかつこいいなあ……って」

私が顔をひきつらせながら苦し紛れにそう言つと、早坂君はいきなりわたしの頬を引っ張りつねった。

「いつ、いはいつ！いはいよ、はやはかくんっ！はなひてえ〜」
「っ」

これは冗談じゃなく、まじで痛いっ！

「そんな嘘ばつかり言う口は必要ないだろ？」

「うほなんはじゃっ……！（嘘なんかじゃっ……！（）」

「へえ……この期に及んでまだそんなこと言う気が」

「ら、らって、はやはかくんが……！！」

「俺が何だ」

意地悪ばかりするから、こんなことになっちゃうんじゃないっ！

「とにかくはなひてえ〜!!」

あまりの痛さに涙が出てきた。

なんで、こつこつという時に限って図書室に誰もいないのだろう。

美智子先生も月曜日以来、私にまかせつきりで、すっかり姿を見せなくなってしまうたし……

「謝れよ」

「へ？」

やっと解放され、じんじんと痛みが残るほつぺたをさする。

「俺を傷つけた罰だ。謝れって言ってんだよ、俺に」

な、なんで私が早坂君に謝らなくちゃいけないの？

基はといえば、ぜんぶ早坂君のせいなのに!!

理不尽すぎる要求に、うんと素直に言えるはずもなく

……

両者の意地の張り合いは、下校時間が過ぎても続いたのだった。

第12話「甘いマスク、甘い声」

結局あのと、見回りの警備員さんがくるまでずっと私たちは口論をし続けるはめになった。

現時刻は7時半過ぎぐらい。

つまり2時間近く争っていたわけで。

当然の事ながら、帰途につく頃にはお互い疲れきっていた。

勝負の行方かというと、私が根負けして早坂君に（なぜか）謝ることになったけど……

「おい」

「……は、はい……なんでしょう」

「お前の家って門限とかあんの？」

私の両親は共働きた。

そのため二人とも自宅に着く時間が遅いことは頻繁にあった。たとえ遅く帰ってもバレることはまずないだろう。

「ううん、ないよ」

「じゃあ今からうちに来い」

「は？」

今から？何を言ってるの、この人は。

「は？じゃねーよ。もう忘れたのか？読み終わったら他のも貸すって約束だろ」

「でもこんな時間だし、おうちの方にも迷惑がかかるんじゃない……」

「こんな時間って……まだ8時前だぞ。そんなの気にする事じゃないだろ」

まだ？まだ、だというのか？

八時って他のところならまだしも、人様の家に上がり込むとしては遅すぎるよね？

彼との間で時間認識に大きな違いがあるようだった。

「でっ、でもっ」

「うだうだ言っでないでいいから来い！」

有無を言わず、という感じで早坂君は私を鋭く叱咤すると、そのまま私の腕をつかんでさっさと歩き始めた。

理性ではダメだとは分かっているのだが、先程の疲れでもはや抵抗する気力もおきない。

私は引きずられるまま、早坂君の家に向かうことになった。

*** **

駅から歩き始めて十分……

着いた先には、ごくありふれた一軒家があった。

よ、よかった……

「氷の王子」とか呼ばれているので、てっきり城のような豪邸を想像していたのだが……。

わたしはほつと胸をなで下ろした。

「ただ、そうは言ってもやっぱりこんな時間に家にかかるのはちょっと……なあ。」

「……早坂君に近づく女を片っ端から裏で呼び出してシメあげて排除してくんだって!!まさにはリンチよ、リンチ!!」

ふいに頭の中に由里香の台詞がよみがえった。

「そうだった……」

「もしこの事がバレたとしたら……」

顔からさあつと血の気が引いていくのが分かった。

「は、はやさかくんっ!私今日はやっぱり遠慮するよ!」

「は?何を今更言ってるんだよ」

「や、やっぱりこんな遅くにはよくないと思って……。それに私本の続きは別に今度でいいからまた次の機会に……」

「ここまで来ておいて帰るとか馬鹿だろ。いいから早く入れよ。」

「するっ、」

「なあに、家の前でぎゃあぎゃあ騒いでんだ?」

と前から、突然甘い響くような声がした。

はっとして顔を上げると、目の前に茶色がかった髪に甘いマスクの美青年が立っていた。

「ん?もしかして君が噂の……?」

私は首をかしげた。

………噂ってなんのこと？

早坂君が怪訝そうな声を出す。

「兄貴？なんで今日家にいんだよ。出掛けるからいないって言うってたじゃねーか」

「小百合から面白そうなことを聞いたんでね。出掛けられるわけがないだろ？それとも何？俺が出掛けてないと不都合なことでもあった？」

と早坂君のお兄さんがニヤニヤと面白そうに聞くと、早坂君はぎゅつと顔をしかめた。

わっ………！

早坂君が口で勝てないなんて………
てか早坂君にお兄さんなんていたんだ！

私が驚いているとお兄さんはまた体の向きをくるりと反転させて、

「初めまして。健人の兄の彰アキラです。いつも弟が世話になってるよ」

と端正な顔に笑みを浮かべて言った。

「いえっ………あつ、私は白崎葵衣と言います。私こそいつも、早坂君にはお世話になって………」

「葵衣ちゃんね。これからよろしく」

「はっ、はいっ」

顔が自然と火照ってくるのが分かる。
だってこんな美形に話しかけられて、普通に対応できる方がおかしいに決まっているじゃない……！

でも確かにこの二人が兄弟というのも妙に頷ける。

早坂君が「氷の王子」だとすると、彰さんはいかにも正統派の王子様という感じだ。

甘いマスクに甘い声。

こんな声で囁かれたら、女の人達はひとたまりもなく墜ちてしまいうに違いない。

タイプは異なるが、よくよく見ると顔の作りはやはりどこことなく二人は似ていて、二人並ぶ美しい姿に思わずため息がこぼれる。

はあ………女のわたしって一体………

私は甘い声に勝てるはずもなく彰さんに促されるまま、しぶしぶと玄関に足を踏み入れた。

第13話「衝撃的な事実」

本当にあがってよかったものか……。

私は気後れしながらも、玄関で靴を脱ぎそのままリビングへと通された。

「俺がアイツ呼んできてやるから、お前は葵衣ちゃんにお茶でも出しといてやりなよ」

「ああ」

「あー、とんでもなく喜びそうだなー」

そうクスクス笑って言いながら、彰さんは二階へと上がっていったみたいだ。

「ほら、そんなとこに突っ立ってないでこっちに座れ」

「あ、うん」

私は促されるまま、ソファアの端っこに座る。

なんだかそわそわと落ち着かず、辺りを見回した。

リビングは広い割には、シンプルですっきりとしていて綺麗に片付けられていた。

所々にアンティークな置物が飾られていて、部屋の隅にはいくつか観葉植物が置かれている。

落ち着いた感じの雰囲気、いづらか緊張が和らいだようだった。

「あの……早坂君」
「…なんだ？」

早坂君はポットにお湯を沸かしながら、顔だけこちらに向ける。

「彰さんが言ってた アイツ って……」

「……ああ、すぐ分かるだろ」

早坂君がぶっきらぼうに答えた。

何だか機嫌が悪い……？

さっきまで普通だったのに……また私知らぬ間に何かやらかした？

急にあたりを気まずい空気が包みこみ、私はそのまま黙り込んだ。

時計の秒針のかちかちという音がやけに響く。

い、息苦しい……

すると二階の方から「ボタン」とドアを開ける大きな音がしたかと思つと、バタバタと誰かが階段を駆け下りてきたようだ。

……彰さんかな？

しかしその思惑は外れ、飛び込んできたのはウェーブがかかった長い栗色の髪を後ろにひとくりにした色気のある女性だった。

その女性は、驚きのあまり固まっていた葵衣にぎゅっといきなり抱きついた。

「きゃあああ つー！やっと会えたわね！！私、ずーっとあな

たに会いたくてしょうがなかったのよっ」

嬉しそうに叫びながら、更に葵衣をきつく抱きしめる。

彼女のふくよかな胸にちょうど顔を押しつぶされ息苦しさを感じた。

「……姉貴。放してやれ」

早坂君が呆れたように言った。

「あら、やだ私ったら。思わず興奮しちゃったみたいね」

そう言っつて葵衣をぱつと手放した。

「ごめんなさいね、急に抱きついちゃったりして……。初めまして。健人と彰の姉をやつてます小百合サユリです。あなたの事をコイツから聞いてから、あなたに会えるのが凄く楽しみだったのよ」

小百合さんは大人びた外見とは違って、にっこりと可愛らしい笑みを浮かべて言った。

続けざまに現れた美人に免疫があるわけもなく、目がちかちかするような思いだった。

(早坂家の血つてすごいつ……………!!)

「あつ……………えっと、初めまして、白崎葵衣です」

私が顔を真っ赤にしてしどろもどろになりながらそう言っつと、小百合さんは耐えきれずに何故かまた飛びついてきた。

「やっぱり思っつた通りの子ねっ!!…どうしようっ、可愛すぎるわっ

「!! 健人っ、アンタ葵衣ちゃんに手なんか出してないでしょうね!」
「?」
「出してない」

早坂君がため息をつきながら投げやりに言った。

「あの……………一体?」

脳内にたくさんの疑問符がならぶ。

どうして早坂君のお姉さんが私のことを…………?

私に会いたかったって…………?

早坂君が気まずそうに口を開いた。

「お前に貸してる本……………実は姉貴なので。単刀直入に言うと「天音夜
椰」って姉貴のことなんだ」

……………え?

私はぼかんとして口を開いた。

「つまり姉貴は小説家なんだ。だからファンだっていうお前のこと
聞いて、ずっとお前に会いたいつてすっげー煩くってさ」

「ちよっと健人! 煩いつて何よ!」

小百合さんが早坂君を思いつきり小突く。

「……………って……………何だよ、本当のことたる。毎日毎日…人の迷惑もち
よっとは考えるよな」

「何ですって!!!??」

第14話「想定外の甘さ」

「ふふつ。悪かったわ、驚かせちゃって。急にそんな事言われたら、誰でも驚くわよね」

「いえっ……………！こちらこそいきなり大声を出したりしてすみませんでした！」

まさかまさか、あの天音夜椰さんが早坂君のお姉さんの小百合さんだったなんて……………！！

もう少し年輩の人を想像していたのに、こんな若くて綺麗な人が書いていたとは思いもしなかった。

天音夜椰さんは、マスメディアでもよく彼女の本がとりあげられているし、熱狂的なファンもたくさんいるほどの人気の小説家だ。

かくいう私もテレビで紹介されているのを見て、最初はちょっと惹かれてなんとなく読み始めたただけだった。

そしたら見事にはまってしまったわけだけど。

だから私にとって雲の上のような、すごく憧れていた人が目の前にいるという現実味のない事実に実感がわくはずもなく、脳内は当然の事ながらパニック寸前だった。

「全然いいのよ〜大体このバカが葵衣ちゃんを吃驚させようと、勿体ぶってさっさと言わないからいけないんじゃないの！私は早く葵衣ちゃんに会いたくってしょうがないって言ってたわよ、ずっと！」

小百合さんがそう言って早坂君を一瞥する。

「……だから姉貴を紹介したくなかったんだよ。こんな騒がしいのが身内にいるなんて知られたくないに決まってるだろ」

早坂君も小百合さんに冷たい視線を投げ返す。

小百合さんは綺麗に整えられた眉をぴくつと動かし、「ふくん、そんな事言っちゃっていいのかしら」と呟いて不敵な笑みを浮かべた。

…す、すごいっ、小百合さん……！

あの冷眼に動じないなんて……！！

もしあの視線が自分に向けられていたら………と想像するだけで今でも背筋がぞつと冷えるぐらいなのに……！！

顔立ちが整いすぎているだけに、あの視線の威力は絶大なものを発揮するのだ。

「本当に見ていて可哀相だわあ………こんなにあからさまなのに葵衣ちゃんに全然気付いてもらえてないんだもの………やだ、あまりに不憫すぎて涙が出てきたわ」

「なっ………！？」

早坂君が目を見開く。

わ、わたしが気付かない………？

な、なんのことだろう………？

「ああ？私が気付いていないとでも思ってたの？隠しているつもりだったわけ？こう見えても、小説書いているだけに洞察力と勘は人一倍優れているのよねえ。ふふっ、滅多にアンタは自分のことは話さないから、私のファンの子の事を聞いたときはてっきり男の子

だと思っていたんだけど…。まさかこんな可愛らしい女の子だったとは……ねえ？」

小百合さんがなぜか同意を求めるように、微笑みながら私を見る。

なっ、なんでここで私に話をふるんですかっ!？

思わずそう言いそうになった言葉を呑み込んだ。

間違っても「可愛い」などといった単語が自分に似合わないことは自分でも百も承知だし、小百合さんがお世辞で言ってくれていることも分かってはいるのだが……。

こんな美麗集団の中でそんな聞き慣れない単語を言われても、もはや惨めとしか言いようがない。

「うん、葵衣ちゃんって今もフツーに可愛いと思うけど、磨いたらもっと大変なことになりそうだな」

と彰さんも私を見て言いながら、なぜか加勢してくる。

お、お二人の目は節穴ですか!？

大声で叫びそうになるのをぐっところらせる。

返答の言葉が思いつかず助けを求めようと早坂君を見るが、早坂君はこちらを見ようとはせず仏頂面で黙り込んでいる。

ああ………なんか頭が痛くなってきたような気が………

「彼女、結構鈍感そうだし態度にはつきり示さなきゃ一生気付いてもらえないかもよ？ははっ、にしてもあのお前がねえ……」
「黙れ。兄貴、それ以上なんかつたらぶっ殺すからな」

早坂君が不機嫌そうにぎろつと彰さんを睨みつける。

……というか三人とも何の話をしているのかさっきからさっぱり掴めないんですが。

「おーこわっ、んな睨むなよな」

彰さんはおどけたように言い、腕時計に目を向けると、

「……つと、俺もう仕事に行かなきゃ。姉貴も原稿仕上げなくていいのか？締め切り明日までなんだろ？まーた、担当の荒井さんに怒られてもしらないからな」

「あら、いいのよ。彼女は怒ることが生き甲斐なんだから。彰は今日は同伴じゃないわけ？」

「ああ、だつてこんな面白いことがあるって知ったら行けるわけないだろ？待たせたら先方に悪いしね」

こんな夜遅くから彰さんは仕事？

「同伴」つてなに？

「ふふっ、そうね。葵衣ちゃん、私は二階で原稿を仕上げなきゃいけないから、もしどっかの誰かさんにいかがわしい事でもされそうになったら遠慮なくいつでも助けを求めにきなさい。」

「は、はいっ………つて、え？」

助けてってなんの助け………？

「姉貴！いい加減にしろよ……あの担当の人呼ぶぞ！」
「ええっ！！？ち、ちよつと冗談じゃないわよっ！！じゃあ、そういう訳だから葵衣ちゃんっ！危なくなったらすぐ来なさいね！！」

そう言い残して、小百合さんは慌ててリビングから姿を消した。

「俺も行くな。アフターからは逃げらんないからたぶん帰りは明日になるな。つーわけで、健人。俺、明日朝飯いらないから」

「さつさと女誑 タラ し込みに行けよ、クソ兄貴」

「そうさせて貰うよ。健人、いくら二人きりだからって我慢しろよ？」

「節操なしの兄貴と一緒にするな」

「くすくす……どうだかなあ〜？じゃあ葵衣ちゃん、また今度ね〜！」

そう言つて彰さんも出掛けてしまい、先ほどの騒ぎがまるで嘘だったかのようしんと静まり返ったりリビングに早坂君と二人つきりで残された。

急にまた気まずい空気が押し寄せてくる。

早坂君の様子をバレないようにそつと窺つと、苦虫をかみつぶしたような顔をしていてとても話しかけるような雰囲気ではなかった。

うつうつ、ど、どうしよう……。。

「あ、あの……、早坂君」

それでもいたたまれない雰囲気押しつぶされそうになりながら、なんとかかして意を決して口を開いた。

「彰さんってなんのお仕事をしているの？」

「……………なんで」

「え？」

「なんで兄貴は 彰さん なわけ？」

「えっ！？だって皆 早坂 だからややこしいかな……………って」

「健人」

「へっ？」

「いつまでも俺とは他人行儀でいるくせに初対面の兄貴のことは名前前で呼ぶんだ？俺のことも呼び捨てにしるよ」

「は、はいっ！？無理に決まってるよ、そんなの！！早坂君のことを呼び捨てに出来るわけじゃないじゃないっ」

なにを言っているんだ、この人は！！！！

呼び捨てなんかした日には、確実にファンの子達に殺されるに決まっている。

早坂君はその恐ろしさが分からないからそんなことが言えるに違いないのだろうが……………。

「とっ、とにかく無理なものは無理です！！絶対ムリっつ！！」

「……………へえ……………」

早坂君がすうつと目を細めた。

ぎくりと体が強張り、慌てて目をそらす。

な、なんだかマズい空気……………？

心なしか更に機嫌が悪くなっているような……………。

ふいに目の前に影が差して、不審に思い顔をあげた途端

なにか唇にあたたかく柔らかいものが触れた。

.....え？

一瞬何が起きたか分からず、目を大きく見開くと、なぜか目の前に早坂君の端正な顔があった。

「はっ、はやさか んうっ!？」

それが早坂君の唇だと理解する前に、また唇をふさがれる。

「ちよっ.....んっ、.....っ.....」

ちゅっちゅっと何度も啄むように口付けられ、あまりの甘い口付けにだんだんと意識が朦朧としてきた。

一体今何が起こっているの ？

「今度から名前で呼ばなかったら罰を執行するからな」

唇が離れてその言葉を耳にした直後、私はいつのまにか意識を手放していた。

第15話「悩める子羊」

「あおいつ、葵衣!」

「ふえ?」

隣から由里香に小突かれて顔を上げると、さとちゃんがにっこりと笑って教壇からこちらを見ていた。

「え……?」

「二週間後から試験があるっていうのに、白崎はぼーっとしちゃって余裕だなあ?」

あれ……今、授業中……?

いつのまに休み時間が終わったの?

「俺が説明してたこと全く聞いてなかったな?そんなに俺の授業ってつままない?」

さとちゃんはそう言って両手で顔を覆い、しくしくと泣き真似をする。

ど、どどどどしよじ……

さとちゃんをもしかしなくても傷つけた……?

「そつ、そんなことないです!!ち、ちゃんと聞いてました!先生の授業は全然つまなくなんかないですっ」

私は慌てて必死に弁明した。

さとちゃんの目が怪しく光ったことなど全く気付かずに……
まさに『後悔先に立たず』とはこのことだった。

「そっかー聞いててくれたのかあ……」

「え？」

さ、さとちゃん……？

先程まで纏マドっていた憂いを帯びた空気はどこへ……？
なんでそんなに楽しそうなんですか……？

「じゃあそんな白崎には34ページの4行目から訳して貰おうかな
俺の言っていたこと聞いてたんなら勿論訳せるよな？」

「へ……」

ええっ!?

もしかしてハメられた……!?

「おい、さとちゃんっ！そこは難しいから俺が訳す、ってさとちゃん
がさっき言ってたとこじゃねーか。それじゃいくらなんでも白崎
がかわいそうだってー」

クラスメイトの男子が庇ってくれるが、「あれ？そうだったっけな
あ？」とか言つてさとちゃんは全く聞く耳を持たない。

はあ……しょうがないよね。

聞いてなかった私が悪いんだし……

さとちゃんは普段は面白いし優しいから人気の先生だけど、自分の
授業を聞いていなかった生徒には途端に情け容赦無くいじめの対象
にするのだ。

「さとちゃんのS!! いじめっこ!!」

「Sで結構。なんたつて俺苛めるのは大好きだし? ほらっ、早く訳してよ白崎。4行目から」

「はい.....」

私は観念して教科書に目を移した。

4行目.....?

あつ、ここか.....

Frustrated by the continuing.....

「.....」 『絶え間ない暴力と事態の進展の無さに苛立ち、パレスチナ人の中には新しいリーダーを求める者もいた。1987年、人気のある指導者で反対派勢力のリーダーがハマスという組織をつくった』

「

一瞬空気が静まり返ったが、すぐに「おおーっ」という歓声で教室内が湧き上がる。

さとちゃんは呆然とした表情をしながらも、

「.....」 うん、俺が悪かった。相手が白崎だということをつつかり忘れてたわ。さすが優等生だな..... その訳で完璧だぞ。おい、お前から今の白崎の訳ちゃんと聞いてたか?..... って、そこっ!! 加藤っ!!...! 居眠りするなっ!!...!」

と注意の矛先が他のクラスメイトに向き、私はほっとして席に腰を下ろした。

と、とりあえずピンチ脱出………かな？

ああ………でもやっちゃったな。

いつも授業だけは真面目に聞くようには心掛けていたんだけど………

正直、頭の中は早坂君のことについてはいっぱいだった。

あれは夢だったのだろうか………？

それとも私が勝手に作り出した妄想………？

そう考えてから、顔がさつと青ざめる。

早坂君と私がかき、き、キスしたことが妄想だとしたら、私ってんでもなく変態さんなんじゃあ………？

大体ふと気が付いたときには自分の家にいたし………
どうやって帰ってきたのかも全然記憶にない。

お母さんにも尋ねたけど、お母さんが帰宅したときには私はもう家にいたって言うし………

あーっ、もうっ！…！

頭がこんがらがって訳分かんないよお………
きつともうあれは夢だ！…！

そうに違いない。

それによくよく考えてみれば早坂君が私なんかには手出しするわけないじゃない。

早坂君の周りには綺麗な女の子達が余るほどいるし………

うん、間違ってもないな（キッパリ）

なんか自分で言ってる虚しくなってきたけど……

でも、夢だとしたらどこまでが夢……？ 彰さんや小百合さんのことも全て……？

でも鞆の中に天音夜柳さんの新刊が入ってたし……。どうしよう……やっぱり早坂君に聞きにいけないか？ でもなんて聞けばいいの？

昨日はどこまでが夢でどこまでが現実ですか？ って？ それとも早坂君と私はキスしましたか？ とか？ ？

うわああああああっっっ！！

ぜ、ぜっつたいに無理むり……！！

そんな事聞いたら恥ずかしくて死んじゃうよお……！！ ホントに変態以外の何者でもないって……

あゝもうっ、どうしたらいいの！？

「ちょっと、葵衣！ なに百面相してるの？？ 今日なんか変だよお？」

「……………」

「いつも授業真面目に受けてる葵衣が注意されてるし……なんかあった？ まさか恋煩い？ んなわけないよねえ…… 葵衣に限って……

…葵衣？ ねえ、聞いてるっ？」

「……………ん？」

由里香……………？

「『ん？』 じゃなああい！！ ちょっとマジで大丈夫なわけ！？ 今日日の放課後の歓迎会のことちゃんと覚えてる！？」

「かんげいかい？」

そういえば今日って月曜……………って、あっ!？
すっかり忘れてたけど、図書委員は先週で終わっちゃったから早坂
君と放課後に会うことももうなくなっちゃうの!？

ずきん…

おかしいよ、私……………なんでこんなに胸が痛むの？

ああ、そっか。

もうこれで完全に早坂君とは別世界ってことになるんだ。
どうって事はないよ……………ただまたもとの生活に戻るだけじゃない。

私は今にも自分が泣きそうになっている事も、心配そうに見つめる
親友三人の姿にも気付かずに、小さくため息をついた。

第16話「映研歓迎会（1）」

憂鬱な気分のまま、あつという間に放課後がやってきた。

あの後にあつた授業の古文や化学にもほとんど集中することが出来ず、頭の中はぐるぐると混乱で渦巻いていた。

先生にも二回も注意を受けてしまったせいか、クラスメイト達の驚きの眼差しを嫌という程浴びてしまったし……

やっぱり早坂君に昨日のことを思い切って尋ねてみるべきなのか……でも勘違いだったら恥をかくだけだし、万が一そうだったとしてもどう反応をしたらよいのだ？

冷静に対応し平常心がはたして保てるのか………そんなの無理に決まっている。

自問自答を何度も繰り返したが結局答えは見つかることはなく、もやもやとした思いを拭い^{ヌグ}さることは出来ないまま放課後を迎えることになってしまったのだった。

ああ、もうっ！！

折角の歓迎会なんだし、先日のことはさっぱり忘れて今日は楽しむべきだよな？

こんなにあるかないかの事を悩んでうじうじしててもしょうがない。よしっ！！忘れよう！！

映研（“映画研究会”の略）の新人部員歓迎会はB棟にある映研の部室で行われるという連絡を受けていたので、私は由里香と一緒に部室へ向かった。

「JJJ……？」

『映画研究会部室』と書かれたプレートを見てドアの前に立ち止まる。

「うん、そうみたいだね……あーっ、なんか入るのすごく緊張するっ！！心臓がバクバクしてきたあ！！」

「え？由里香、緊張してるの？」

そんなに今日のことを楽しみだっただのかな？

由里香のはしゃいでいる姿を見て、思わず微笑んでしまう。

「そうよ！決まってるじゃない！！だって　　って、おっと。まだ秘密だったっけ」

「秘密？」

「ふふっ、気にしない気にしない　突っ立ってないで早く中に入るお　！！」

いや、立ち止まらせたのは由里香なんだけど…

けど、本人を前に反論する勇氣は勿論あるわけがなく…：心の中で呟くだけに留めておく。
勢い良く部室の中へ入っていった由里香を追うようにして、私は慌ててドアに手をかけた。

部室は割合広く、一つの机に十五人ぐらい腰掛けられそうな白くて長い机が三列に縦に並んでいた。

真つ正面には大きなスクリーンが下ろされている。

脇にはロッカーが整然と並んでいて、白い棚の中にはDVDと思われる大量のディスクが置かれていた。

部室にいるのは、端の方の席に着いている新入生と思われる5人と真ん中で盛り上がっている先輩と思われる6人の計11人。新入生達はどこか肩身狭そうにしているのが伺えた。

「思ってたより少ないね。まだ、これから来るのかな？」

由里香はきよろきよろと動かしていた目をこちらに向けると、

「多くても大いに困るんだよねえー……」

と、ぼそりと呟いた。

「え？」

「いや、こつちの話。てかまだ来てないのかなあ？」

「え、誰か探してるの？」

「うん、目立つからすぐ分かるはずなんだけどお……もしかや私騙された!？」

由里香はそうブツブツ言ってまた辺りを見回している。

さっぱり分からない……

私が首を傾げていると、中央の席で騒いでいた先輩らしきひとのうち一人の女の人が何かに気付いたかのようにこちらを見上げた。

「あれっ、新入生の子達がまた来てるじゃない！いらっしやい〜まだ全員揃ってないから好きなどころに適当に座ってていいよ………
…っつて由里香じゃん！」

「あっ、香帆姉！？ちよつとお、全然来る気配がないんだけどこの前言つてたことは本当なわけえ！！？」

「来るわよ！アンタ私のこと全然信用してないわね？」

「じゃあなんでまだ来てないの！？」

「そんなの知らないわよ。でも確かに前に栄司エイジから見せて貰ったときにはいたわよ。もしかしたらやつぱりやめてるかもしれないけどねえ？」

「ええ　　っつ！！！！？」

由里香の鼓膜が破れそうなほどの大声が部室内に響く。

誰だろう？

由里香の知りあいみただけど……

黒髪の肩までかかっているストレートの髪を耳にかけていて、これはまた吃驚するほどの正統派の美人だった。

由里香はがっくりと肩を下ろして何やら落ち込んでいて聞けるような雰囲気ではなかったので、『香帆姉』と呼ばれていた人を見てみると、私が疑問に思っていることを察してくれたのか微笑んで答えてくれた。

「初めまして。二年の神谷香帆シントニカホです。いきなり騒がしくしてごめんね？由里香と私は従姉妹だったりするのよねー、ふふ。めがねちゃんは？なんて名前？」

えええええっ！？いとこっ！？

そんな話、由里香から一言も聞いてないよー…
由里香の従姉妹がこの学校にいたという事実にも、思わず呆然として言葉を失う。

「…あ、えっと、し、白崎葵衣です。よろしくお願いします」
「うん、よろしくねーめがねちゃん」

……めがねちゃんであだ名決定！？
今、自分の名前を言ったのは果たして意味があったのか！？と思わずにはいられなかった。

第17話「映研歓迎会(2)」

香帆先輩にとりあえず座るようにと促され、私たちは自分達と同じ、新入生の子達が集まっている場所へと向かった。

「おつ、また新しいメンバーが来た来た こっちに座りなよ」

一番手前に座っていた、目がくりくりとして可愛い男の子が軽く手を挙げて隣の空いている席を指さした。
頭を下げ、お言葉に甘えて席に着く。

「あ、ありがとうございます」

「いえー！」

そこらへんにいる女の子なんか比にならないぐらい、可愛い満面の笑顔で迎えてくれる。

なんだか可愛いなあ。

でも男の子に可愛いなんて言ったら変なのかな？

隣にいる由里香は先程の香帆先輩の言葉を相当ひききっているらしく、気の乗らない様子で「よろしくー…」と適当に挨拶をしている姿に私は苦笑してしまった。

事情はよく分からないが、余程ショックだったらしい。

「ねえねえ、まだ来てない人もいるけどさ、うちら高一だけで自己紹介しちゃわない？」

そう提案を持ちかけてきたのは確か同じクラスの渡邊聡子さん。

ワタナベサトコ

渡邊さんも映研だったのかあ。

今までクラスでいつも挨拶程度でそんなに話したことがなかったから知らなかった。

「いいよー」とそう言おうとした瞬間

突然、音を立てて勢いよく開かれた扉に皆びっくりして振り返った。

……え？

目に映し出された姿に唾然として声を出すことが出来ない。

「あー良かった良かった！ギリギリ間に合ったじゃん。俺って天才？」

「うるせーな……もともとお前が日誌出すの忘れたりしなきゃ、もっと早く来れただろ」

「まあまあーいいじゃん？結果オーライってことで」

夢？これは夢だよな？

よりによって今一番見たくなかった人がこんなところに来るわけないじゃない。

『早坂君つつつ！！！？なんでここにつ……芳沢君も……どうしてえ！？』

席に座っていた女の子達が悲鳴をあげる。

うん……今聞こえたような気がした名前も全部私の幻聴だよな？
うーん、やっぱり昨日の寝不足が原因かなあ？はは……

「どうしてって……映研部員だから？」

芳沢君と呼ばれた男の子が、面白そうに言う。

「ええ　　っつ！！？」

わっ……！！

こちらをいきなり向いた早坂君と目が合う。

早坂君の目が僅かに見開かれるのが分かった。

ゆ、夢なんかじゃない……！！

目をそらしたい衝動にかられるが、射抜くような視線に何故だかそらすことが出来ない。

彼の口が何かを呟いたようだったが、女の子達の騒ぐ声で聞き取ることが出来ない。

なんだろう……今何か言おうとした？

「きゃーっ、あおいっ！！やっぱり香帆姉の情報は嘘じゃなかったあ！！やっぱり映研に入って正解だったね！！」

由里香が興奮したように私に抱きついてきた。

まさか由里香さん、アナタ……

早坂君がいるから映研に入ったとか……？

「……ってあの女誰よっ！？なんであんなに早坂君達に近づいてるわけえ！？」

いきなり豹変した由里香の表情に驚いたが、言われるままに視線を戻してみると目を離していた隙にいつのまにか一人の女子生徒が早坂君に張り付いていた。

「やだあ、早坂君も映研だったの？？私、Dクラスの城乃内美優ジョウノウチミユつて言います すっごい早坂君のファンだったんで、まさか一緒の部活だなんてすっごく嬉しすぎて涙が……」

わあ………すごい演技派だなあ………

数々のオーバーなぐらいの彼女のリアクションに目が思わず釘付けになってしまった。

「ちよつと 안타つ！！なに可愛い子ぶってんのよ！！図々しいにも程があるんだからっ」

………ん？

隣にいたはずの由里香もいつのまにか凄まじいオーラを放ちながら早坂君達のところに近づいている。

「なあに？ヤキモチ？私が余りに可愛いからってひがまないで欲しいなあ？」

「な、に、をおくく！？はんつ、バツカじゃないの！？ 안타のどこにヤキモチを焼けるのか私が聞きたいぐらいよ！！早坂君が 안타のブリブリした態度に気持ち悪がってるの全然気が付かないわけ？」

「なっ！？なんで見ず知らずのあなたにそんな事言われなくちゃならないのお！？」

「酒井由里香ですう、以後お見知り置きを」

「誰があなたなんかと！」

うわあああ〜……………
なんだかすごい火花が散っちゃってるけど……………でもそんな事よりっ
！！

ちらりと早坂君の表情をうかがうと…

ひいひいっ……………！！こっ、怖すぎる……………！！

心の中で悲鳴を上げる。表情はとんでもなく無表情だけど、早坂君に纏わりついている冷たい何かはもはやブリザード並の勢力がある。そんな様子にもまったく気付かず、二人の言い争いはどんどんエスカレートしていつてるし、先輩も含め周囲の人たちも呆然として見ているし……………

このままじゃ不味いのでは…

冷や汗が背中に伝っていくのが分かる。

すると、

「おっと、もう皆集まってるみたいだな」

とドアが開かれて二人の長身の男子生徒が現れた。

い、板倉先輩っ……………！！ナイスタイミングです！！

ああ、あの優しい笑顔が今なら神の微笑みにさえ見えますっ！！

「じゃあそこにいる一年生も全員着席してくれるかな？」

早坂君がさつさと歩いて席に着き、その隣に何故か芳沢君が苦笑しながら腰を下ろした。

うっ………だからなんで敢えて私の目の前に座るの？

また心臓が高鳴り始める。

我に返つたらしい由里香と城乃内さんも慌てて着席した。

「おい、栄司。一年の雪平ってヤツが病気で休みだつてさ」

板倉先輩と一緒に入ってきた金髪に染めた人が手元のメモみたいなものを見ながら話す。

「そっか、残念だな……じゃあ雪平君っていう子には後でプリント渡さなくちゃな」

そう言つて板倉先輩は部室内を見回すと、微笑みながら続けて言った。

「待たせて悪かった。早速だけど、恒例となった新入部員歓迎会を始めよう」

第18話「映研歓迎会(3)」

「まず自己紹介からすると、俺の名前は知っている人もほとんどだと思っけど映研の部長の板倉栄司です。知ってる通り映研の二年の人数は少ないから、これから君達のことを頼りにしちゃう事が多々あると思っけど、その時はよろしく。」

板倉先輩が軽く頭を下げると、隣に立っていた金髪の髪の男が板倉先輩の髪をぐしゃぐしゃと撫でた。

「ちよっ…、おい篤朗アツロウっ！何を…」

「ちいっす！金髪でつり目だから怖いお兄ちゃんにしか見えねえかもしんねえけど、心は雨に濡れている子犬を放っておけない不良少年並みに心優しい伊淵篤朗イフチアツロウだ 一応、映研の副部長をやっつてんでよろしく〜」

「ちよつと篤朗っ！！あんた、そんな自己紹介で恥ずかしくないわけっ！？もうちよつと先輩としての威厳を保ちなさいよ、威厳を！！」

「あ？なんだよ？俺は俺なりに後輩と仲良くなれるようにフレンドリーに接しようと思っつてんじゃねえか！」

鷹のような鋭い目つきでぎんつと香帆先輩を睨む。

ち、ちよつと怖いかも……

「よくそんな事が言えるわね！？一年を見なさいよ。皆怯んじやつて、フレンドリーになれるどころかドン引きしてんじやないの！！しかもどこが心優しいのよっ！！あんたは中身も外見もまさしく不良よ、ふ・りょ・う……！！」

「あぁっ！？？」

「2人とも落ち着いて…。一年が戸惑うだろう？初っ端から喧嘩なんかしたら」

板倉先輩が宥めようとするが、伊淵先輩が食って掛かるような勢いで反論する。

「おいつ！栄司！！なんでお前こんな女と付き合ってたんだよ！生き血を全部この女に吸い尽くされる前に、さっさと別れないとお前死ぬぞっ！！」

「いや、死なないって……いくら香帆でもさすがに」

「ちよつと2人とも！！私を一体何だと思ってるわけ！？」

激しい口論に呆気にとられてしまう。

というか、香帆先輩って板倉先輩と付き合っていたの？

隣にいる由里香に小声で聞いてみると「私も初耳だよ・・・香帆姉ってば黙ってたな」とぶつぶつ文句を言いながらも驚いているらしい。

周りの二年生はいつもこの状況に慣れているのか、笑いながらもますます激しさを増していく口論を見守っていたが、さすがにつかみ合いにまで発展しそうになると慌てて途中で止めに入った。

「ふう…すまなかった。横道にそれだが、このあと歓迎会もあるしさっさと本題に入ろう」

ぜえぜえと息を切らしていた伊淵先輩と香帆先輩の2人に板倉先輩が呼びかけると、私達一年にプリントを配り始めた。

「今配ってるプリントは今年の映研の予定を載せたものなんだけど…。後ろまで回った？」

板倉先輩が確認するように見ると、一番後ろの席に座っていた女の子がこくりと頷いた。

「じゃあ大まかにまず映研の活動内容を説明すると、まあうちが一番力を入れているのは文化祭なんだ。これは去年もそうだったんだけど自分達で撮った数十分ぐらいの短い映画を文化祭という場を借りて公開させてもらってる。で、今年も7月の合宿で映画を撮影する予定だ。ただ今回はきちんとストーリー構成があってキャストイングも決めようと考えてる。」

周りで小さな驚きの声上がる。

どうやら一年だけではなく他の先輩達も驚いているらしい。

「まあ確かに今まではあるテーマを決めて特に台詞とかもなく自由に撮ってたけど、せっかくの文化祭だし見に来てくれる人にも楽しんでもらえるようにって事で篤朗と話し合って決めただ。撮り方とかも色々変わってくると思うんだけど…どうかな？」

一瞬場が静まり返ったが、次々に「いいんじゃないか」と賛成の声が出てきた。

「なんだか面白そうね！ストーリー仕立てで撮るなんて！！」

「うん、いいんじゃないスカ、ぶちよー！！」

一年生もどこか興奮したように、ざわざわとし始める。

それにしても…映画を自分達で撮影できるなんて凄すぎる！

由里香に半分引きずられたような形で何となく入った映画研究会だったけど、思った以上に楽しそうで胸が弾んだ。

ふと前から強い視線を感じてプリントから目をあげた瞬間、気付かなければよかったと激しく後悔した。

なんで一瞬でも目の前に座っている事を忘れてたんだろう…
ホントに馬鹿だ、私…！

必死に目の前の人と目を合わせないようにしていたのに、その努力も虚しく水の泡となってしまいそんな自分にひどく呆れてしまった。

顔は無表情だけどどこか面白そうに目が笑っている早坂君と視線が絡み合う。

すると早坂君の口が小さく動いて、

「一人でニヤニヤしてると変態みたいだぞ」

と周りには聞こえないぐらいの小声でそう呟いたのが分かった。目を丸くすると、早坂君の口元がふつと僅かに上がる。

…っつ！もしかして私ひとりで今笑ってたの！！？
しかも見られてたっ！！？

恥ずかしさと「変態」という言葉が思った以上に心に重く押し掛かってきた。

ショックで呆然と宙を見つめる。

へ、へんたい…

そ、そうだよな、やっぱりあのキスは私の妄想だったんだ…

目の前の悪魔のしっぽ、いや大魔王の角が生えてる人はいつもと変わらない様子だしやっぱりあれは…

「お、おい？」

早坂君の少し焦った様な呼びかけにも答える事が出来ず、脳内には「変態」という二文字がぐるぐると渦巻いていた。

さっきまでの高揚感もいつのまにか吹っ飛んでどこかに行ってしまった。

第18話「映研歓迎会」(3)「(後書き)」

久々に18話更新しました〜!!

待っていてくださった方々、遅くなってごめんなさい!! (< | >)

第19話「映研歓迎会（4）」

その後活動の細かな内容や合宿について10分ちよつとで板倉先輩が話終えると、今まで大人しくその隣に座っていた伊淵先輩がいきなり話を切り出した。

「じゃあ、説明も大体は終わったみてえだし、ちよつと早いけどさつそく歓迎会をはじめよーぜ!！」

待つてましたと言わんばかりに目を輝かせて勢いよく立ち上がる伊淵先輩を見て、誰もがぼかんと見つめた。

つかの間、部室内に「は？」という空気が流れる。

香帆先輩が思わず額に手を当ててため息を付いた。

「珍しく大人しくしてるからてつきり反省してるのかと思えば…あなたの脳にははじめっからそれしかなかったわけ?」

「悪いか? いいだろ、大人しくしてたんだからよ」

といじけたように伊淵先輩は言うど、拗ねた様にぷいとそっぽを向いてしまった。

「ははっ、篤朗らしいな」

そんな様子を見てところどころでくすくすと笑いが漏れる。

板倉先輩も笑いながら、

「篤朗が言うように皆も待つてたみたいだし歓迎会を始めようか」

と言った言葉を合図に、かくして歓迎会が始まったのだった。

「じゃあまず一番最初なにやるー?」

「俺らが歓迎会やって貰ったときに何やってもらったっけ?」

「アレよ、確か!?!自己紹介!」

「おーそういえば一年の名前まだ聞いてないじゃん!それやるうぜ、それ!?!じゃあさっそく一番右に座ってる女の子からっ!?!」

えええええ!?!?

自己紹介っ!?!?

どうしよう…人前で話すの苦手なのに…

一番右に座っていた渡邊さんも、いきなり話を振られて少し困っているようだ。
すると、

「おいおい、おめえら!そんなアバウトじゃ後輩が困るだろ?」

と伊淵先輩が助け船を出してくれた。

伊淵先輩って最初は少し怖そうに見えたけど、実は面白いしさりげなく気が利く人だし……
さすが副部长というポストについているだけあるなあ、なんて感心しているよ、

「んん〜っ、じゃあ女子はスリーサイズと男子は好きなエロ本の種類を……っ」

バゴツボキッドカッ

い、伊淵先輩……

容赦なく香帆先輩に叩きのめされている姿に、苦笑が零れる。

「はい、ごめんねみんな〜こんな下衆野郎は無視しちゃっていいからね。えーっとしてじゃあ、とりあえず名前と趣味をひとつずつ順番に簡単な言っててくれるかな？そんな堅苦しいのじゃなくていいから」

「はい、あなたからどうぞ」と香帆先輩に指され、渡邊さんは少し遠慮気味に立ち上がって皆順々に自己紹介を始めた。

えつと…このままいくと私、早坂君の次だから6番目に回ってくる事になるのかな？

どうしよお〜…なんだかすごく緊張してきた…

身体が自然と強張っていくのが分かる。

「渡邊聡子です…えーっ趣味は、やっぱり映画鑑賞かな？あ、あとテニスも好きです」

「た、高橋亜衣タカハシアイです。趣味というか分からないけど、よく山を登ったりします。外に出掛けるのが割と好きみたい…です。」

「田沼修太タヌマシユウタです！趣味はカラオケっす！よろしくお願いしますっ」

うわあああ…！

イツは早坂君をオトせるとでも思ってるわけっ！！！！？？勘違いもはなはだしいっ」

由里香の顔が凄まじい形相で歪みぼそぼそと荒い言葉遣いでそう呟きながら、鋭い視線はずっと城乃内さんに向けられている。

「ゆ、由里香…、ひとまず落ち着いて」と小声で一応声をかけてみるが、さらに拍車をかけただけらしく、「あんな奴に負けてられるかっ！葵衣は黙ってて！！」と一掃されてしまった。

由里香の勢いに圧倒されていると目の前の早坂君がすっと立ち上がった。

わわっ、次は早坂君だっ…！

女の子達もどこか浮き足立っている様子だし、やっぱりどこに行っても早坂君って人気者なんだよね。

「名前は、早坂健人。趣味…というか今嵌っている事は、最近見つけた猫で遊ぶこと」

早坂君はあっさりそれだけ言うてすぐに腰を下ろしてしまった。そして何故か私の方を見て意味有り気に唇が弧を描く。

はい？

ね、猫…？

というか何でこっちをみて悪魔の微笑をするんですかっ！！？

「うそっ、早坂君って猫飼ってたの〜！？」

「いいなあ〜むしろ私とその猫になりたいいい！！！！」

早坂君の家に猫？

猫なんていたっけ？

家にお邪魔させてもらった時には猫の姿なんてみかけなかったよう
な…

と、そこまで考えてはっと気付いた。

何言ってるんだ、私ってば…

昨日のことがもし全部妄想だったとしたら、早坂君の家に猫がいても全然おかしくないんだった。

妄想と現実の区別が出来なくなってくるなんてもう末期症状に近い
のかもしれない。

「つぎ、めがねちゃんだよ？」

え？

我に返って見ると、全員の視線が自分に集中していた。

うわあっ、すっかり忘れてた！！

「わわっ、すみませんっ…！」

ガタンッ

慌てて椅子をひいて勢いよく立ち上がると、椅子がはずみで倒れる。

「あっ…えっ!?!」

う、うそっ、何やってんの、わたし!!

部室内で笑いが巻き起こる。

隣で由里香が「まーた、この子はやってるよ」と呆れかえった様に
呟くのが聞こえ、早坂君も「くっ…」と目の前で笑いかみ殺して
いるのが分かった。

「くすくす。とりあえず落ち着いてめがねちゃん」

「そうだよ、時間はたっぷりあるからさあ〜ゆっくりでいいんだよ、
めがねちゃん」

いつのまにか（何故か）定着してしまっているあだ名を先輩たちか
ら呼ばれてフオーローされる。

初っ端から失態はするし注目は浴びるはで恥ずかしくて、この場に
いることにとんでもなく居た堪れない気持ちになった。

なんでこんな事になっちゃうの……!!?

は、恥ずかしすぎるよお〜!!

「し、しっ 白崎葵衣です……っ。趣味は、読書です。よろしくお
願いします……」

消え入りそうな声でなんとかそれだけ言うと、倒れていた椅子をも
とに戻して座った。

恥ずかしさのあまり、顔が紅潮していくのが分かる。

みんなまだ笑ってるし…!!

ホント穴があつたら今すぐにも入りたい…

次は芳沢君の番なのに笑いを堪えきれないのか、芳沢君は「白崎さんサイコー」と言いながらお腹を抱えて更には涙を目じりに溜めてまで大笑いしている。

そつ、そこまで笑わなくてもいいのに…

「…くくつ、…はあ。…すみません。えっと、芳沢直樹つす。趣味はスポーツ全般で、観戦するのも好きです！よろしくお願いします。」

席についても芳沢君はまた思い出したのか「ぶっ」と吹き出していた。

本当にもう忘れてください…

次に立ち上がったのは先程の可愛らしい男の子。立ち上がってみると意外にも背が高くてびっくりした。

「^{ハッシュユウ}原愁です 趣味は人間ウォッチングです 知らない人1人につき一時間は妄想が出来まーす！！」

と、原君は可愛らしく（なぜか）威張って言う。

に、にんげんうおっちんぐ？
周りの人たちもぼかんとして、原君を見ている。

妄想って…もしかして私と同じタイプだったりするのかな？

なんて妙に原君に親近感がわいてしまった。

あはは…

由里香は「次はいよいよ私の番ね！絶対あんな奴には負けないんだからあゝ！ラストに相応しいエンディングを飾ってやるっ！！！」と間違った方向に意気込んで勢いよく立ち上がると、次にはとんでもない言葉が飛び出してきた。

「酒井由里香ですっつ！趣味は 人助け です！モットーは、信号で渡れないおばあちゃんの手を引いて助ける事とか迷子になった子どもたちを迷子センターに連れて行くこととか落ちていた財布を落として困ってる人のために警察に届けることとか初めて都会に来た田舎の人のために」

と演説並みに続きそうな自己紹介に啞然とする。

ゆ、ゆりか…？

「私、最初に簡単でいいって言ったわよね」

と香帆先輩が呆れ顔で、未だにずらずらと得意顔で自己紹介（もはや自己紹介の域じゃない？）している由里香を見ている。

「今年の一年は面白い子達が揃ったね」

と苦笑いしている板倉先輩。

「いいんじゃないねえ？俺は逆にこんな奴らと行けるなんてすげえ合宿が楽しみになったしな」

と伊淵先輩はニヤついた顔で面白そうに由里香を見ながらそう呟いた。

余談

ついでにその後、自分の世界に入ってしまった由里香の自己紹介が放っておくと翌日まで続きそうな勢いだったので、見兼ねた香帆先輩が途中で止めに入りました。

第20話「映研歓迎会（5）」

それからの歓迎会は無法地帯、とまでは言わないまでもまさにどんちやん騒ぎだった。

「今日は無礼講だぁー！！オラア、お前らもどんどん飲めよぉ！！」
先陣きつて盛り上げているのが伊淵先輩だからか、皆やたらにテンションが高い。一発芸大会みたいなのをして盛り上がっている先輩たちもいれば、後輩と仲良く談笑している先輩もいる。

なんだか異様な盛り上がりについていけず、端っこの方で談笑に耳を傾けながら早坂君の様子をちらりと窺った。
案の定というのだろうか。早坂君と芳沢君の周りには人だかりが出るほどの、やはりすごい人気ぶりだ。

「ねえねえ、早坂君ってどこの中学校だったの？」

「好きな芸能人とかいるう〜？」

先輩は勿論のこと、由里香や城乃内さんも必死に話しかけている様子が目に入ってくる。

本当に人気者だなあ〜早坂君も芳沢君も。

話しかける隙なんて1ミリもないぐらい質問責めにあっていて、や

はりこういうのは苦手なのか、愛想良く質問に答えていく芳沢君とは逆に早坂君は不機嫌そうにむすつとして黙っている。

・・・？

はえ？

なんだろう？そんな様子を見ていたらもやもや、というのかな？心の中にわだかまりがつかえた感じがする。
なんでいきなり？

どこか釈然としない気分になったことに私が首を傾げていると

「めがねちゃん！盛り上がってるかあ〜！？」

といきなり後ろから声がかかった。

驚いて振り返ると、そこには顔を真っ赤にしている伊淵先輩の姿があった。

ど、どうしたのかな？

なんで伊淵先輩はこんなに顔が赤くなっているんだろう？
心なしか足取りがふらついている気がするし・・・

目をぱちぱちと見開いて返事が出来ないでいると、伊淵先輩はそんな私の様子を気にした風でもなく私が左手に持っていたコップに目をやると、

「なんだあ〜？ぜんぜん飲んでねえじゃねーか、めがねちゃん！ちつ、しょーがねえなあ！おーい！吸血鬼オンナ　　！！！」

「ちよつとお！？誰が吸血鬼オンナですつてえ！？」

直ぐさま反応してしまっているあたり“吸血鬼オンナ”と認めてしまっているようなものなのに、香帆先輩は怒り心頭でまったくその事には気付いてないらしい。

「いーからいーから！あんの甘いヤツまだ残ってんだろお？」

「はあ！？あんたそれ以上飲もうとしてるわけっ！？いい加減にしなさいよ！学校側にこんなところで飲んでるなんてバレたら、停学処分じゃすまなくなるかもしれないのよ！？だいたい、なんでちゃっかり内緒でいつのまにかこんなもん持ち込んでるのよ！」

「だあ〜いじよあ〜ぶだつて〜！ちょっとだけなんだしよ！今日だけ今日だけ」

そう言つて伊淵先輩は私からコップをとりあげると何かを注いで、「ほらよ」と嬉しそうに私に手渡した。

な、なんだろうこれ…？薄いピンク色してるけど……。

くんくんと嗅いでみると、甘い匂いがする。ジュースかな？いい匂いがする……。

伊淵先輩に促されるまま、こくんとそれを一口飲んでみる。

「どーだ？」

「おいしい……」

口内にじんわりと甘みが広がる。

そーかそーか、と伊淵先輩は笑みを浮かべると、満足したのかまた別の席に移動していったようだ。

私はそのままコップをまた口に付ける。

なんのジュースだろう……？

何の味かはよく分からないが、程良い甘さですごく美味しい。

飲んでいく内にだんだんと視界がぼやけてきた。体もなんだかぼかぼかとしてきて気持ちいい。

「おい!？」

「……ふえ？」

ぼんやりと霞む視界に入ってきたのは早坂君の姿だった。

「はやさかくん？」

なんで早坂君がここに？みんなは？

なんだか思考が上手くまわらず、ぼんやりと早坂君を見つめ返す。だが知らずのうちに口に出していたのか、早坂君がそれに答える。

「直樹が相手してる。てかお前ヤケに顔が赤」

言いかけて早坂君は私のコップに目を移した。

「っ!?!これ酒じゃねーか!?!なんでこんなもん飲んでんだよ!?!」

お、さけ……………？

ああ、だからこんなに目が…まわるのかな？

頭の片隅で妙に納得してしまった。

というかちょっと気持ち悪くなってきた気が……

「葵衣っ」

視界がぐらぐらと反転していくのを止めていくことが出来なかった。

体がフラフラしてのぼせたように熱い。

吐きそう……………。

早坂君に呼びかけられた声を最後に、意識が途切れた。

なにか暖かいものが私を抱えてくれたような気がした。

第21話「妄想なんかじゃない!？」

ずきんずきんと痛む頭に耐えきれず、閉じていた重い瞼をゆっくりと開いた。

最初に視界に入ってきたのは自分の部屋のものではない見知らぬ天井。

……………ここはどこ？

どうやらソファアール何かに寝ていたようだ。仰向けになっていた体を起こそうとするがうまく力が入らない。

っっていうか今まで何してたんだっけ…………。

なんとかかして首だけ動かして辺りを窺ってみるがぼやけていてよく見えない。顔に手を持っていき確認するように探ると、やはり眼鏡をかけていなかった。

ホントにここはどこなんだろう？

なんで…………。

思いたそうとすると、いきなり激しい頭痛が襲ってきた。

「……………」

い、痛い…………なぜ頭痛が？

「起きたのか？」

その声が聞こえた瞬間、思わず息を呑み込んでしまった。

「その声っ……早坂君!?!？」

は、えっ!?!?なんで早坂君がこんなところに!?!?

慌てて飛び起きるが、その反動で頭がぐんと重い衝撃がやってきた。

「いつ……たあ」

ずきんずきんずきん……

あまりの痛さに顔を歪めながらも、頭は大混乱状態に陥っていた。

な、な、なんで早坂君がいるのっ!?!?

「あつ、あのっ、なんで私こんな　　というか早坂君はなんでこんなところに、ってえっ、まって、そもそもここは　　」

「おい、落ち着けとりあえず。眼鏡はとなりの低いテーブルに置いてあるから先にそれかけろよ」

私は思いっきりうろたえながらも、言われるがまま眼鏡をかけた。

あ……

「ここ、はやさかくん、の家……?？」

見たことのある造りだった。どうやら寝ていたのはリビングの大きな白いソファ―だったようだ。

早坂君が呆れたようにため息をつく。

「まったく……慣れないもんなんて飲むからこんな事になんだよ、馬鹿」

「わたし……な、なんで早坂君の家に……？」

「覚えてもいないのか？お前、歓迎会で酒飲まされてぶっ倒れたんだよ。でもお前の親、夜までいつも帰ってこないみてえだし。俺の家がお前の家に一番近いし、仕方ないから連れて帰ってきたんだよ」
そう言われて顔がまるで火が吹くように赤くなる。

お、思い出したっ………！！

そうだ、私お酒って分からなくてそのまま酔って気持ち悪くなっちゃったんだっ………！！

「じっ、ごめんなさいっ！！すごい迷惑かけちゃって………！！」

わわっ、本当に私ってばなんてことを！

ありえないでしょ、普通！あんな少量で酔うとか情けなさすぎるからっ………！！

早坂君、あたりまえだけどあんなに迷惑かけたんだからきつともものすごい怒ってるよね？

どっ、ど、どっしょう……！今度こそ確実に殺されるかもっ……！？

「あーおーい？」

「はっ、はいっ！？」

うっっ、とうとう最後の審判が下されちゃうんだ……！
煮られるの！？それとも焼かれるのっ！？あゝっ、誰でもいいからホントに助けてくださいっ！！（涙）

「…俺が言ったこと覚えてるのか？」

「……………へ？」

だけど早坂君の口から飛び出してきたのは予想外のものだった。

早坂君が言ったこと……？

「っ！！？」

考える間もなく顔をぐいつと片手で引き寄せられた。

お互いの息がかかるほど間近に早坂君の綺麗な顔がある。

えっ、ええ！？／／／

頭痛のことなんてすっかり頭から消え去りあまりに突然の出来事に呆然と固まっていると、早坂君はそのまま耳元に唇を近づけて囁いた。

「名前で今度呼ばなかったら罰だつて……言つたよな？」

「……………つつ！！？」

色っぽい妙に艶のある低い声に思わず肩が震え、顔が真っ赤になる。

えっ……………！？

ち、ちよ、ちよつと待って！？

え、じゃあアレは全部 私の妄想なんかじゃなかったってこと……

…！？

小百合さんや彰さんのことも早坂君とのキスもっ！！？

ま、まって…！！いきなりそんな事言われても理解できないってばあ……………！！！！

パニックどころじゃなかった。まさに頭は真っ白という形容がふさわしいだろう。受け止めきれない現実に脳で理解できる容量はとっくに超え、回路は今にもショート寸前だった。

慌てふためく私などお構いなく、早坂君は私の顔から眼鏡を外すとゆっくりと顔を近づけてきた。

「あ、うえっ！？ちよ、ちよつと、早坂くんっ！？（／／／）まってまってまってえ……………！！！！」

我に振り返り慌てて手で近づいてくる顔を止めようとするがあっけなく阻止されてしまい、手首をぎゅつと掴まれたまま唇が重ねられた。

「んっ……………ふ……………」

唇を甘噛みされ、角度を変えては何度も口付けられる。

な、な、なんでまたこんな事に〜!? / / まさか夢っ!? これも私がまた作り出した妄想なのっ!?!?

いつのまにかソファーに押し倒され、キスは無遠慮に深くなっ
ていく。

必死に顔をそむけようとしても、しつかりと顔を固定されてしま
い動かすことが出来ない。抵抗らしい抵抗も出来ず、あまりの甘さに
体の芯まで溶けだしてしまいそうだった。

どうしよう、なにも考えられなくなってきた……

そう思っただけで諦めようとしたとき、突然リビングの扉の方から

「みーちゃった 健人君、こんなところで何やってるのかな
あ〜?」

と、揶揄するような声がかかった。

驚いて慌てて体を離し、目に映ってきたのはニヤニヤと面白そうに
笑っている彰さんの姿。

「兄貴っ!?!」

ええっ!?! まさか今の全部見られてたっ!?! / /

恥ずかしさのあまり言葉をなくしてしまう。

「いやぁー久しぶりにイイモノ見せてもらっちゃったなあ。まさか

こんな無愛想な弟のキスシーンを拝める日が来るとはねえ？まあ見られたのが姉貴じゃなくて俺だったことが不幸中の幸い、かな？」

彰さんはくすくすと嬉しそうに笑っている。

早坂君はちつと舌打ちすると

「クソ兄貴」

と小声で毒づき、そのまま

「葵衣、帰るぞ」と言い放つてすたすたと玄関へ向かって行ってしまった。その表情は彼にしては珍しくどこかバツの悪そうにしている。

リビングにとり残された私はこの状況をどう対処したらよいのか全く分からず、顔を俯けたままソファーからなんとかして体を起こした。

彰さんのことが恥ずかしすぎて直視できないよぉ~~~~!!
よりによってあんなところ見られてたなんて……………!!/!/!

「もしかしたらこれも夢かもしれない」とわずかな期待をもって思いつき頬をつねってみるが、見事に期待は裏切られ、つねった頬はものすごく痛かった。さあっと顔が青ざめる。

ゆ、ゆめなんかじゃない……

再びショックで固まっていると、

「早くしろ!」と早坂君の怒鳴り声が玄関から聞こえ、慌てて体を

動かした。

そんな様子を見てか彰さんは

「ぷっ」と小さく吹き出す。

「ごめんねー葵衣ちゃん。どうやら俺、王子の機嫌損ねちゃったみたい」

「えっ！？あ、あのっ、べつに」

「くすくす…あんな俺様な王子様だけに見捨てないでやってね〜」
機嫌とりは葵衣ちゃんに任せたよ」

そう言っつて彰さんは片目を瞑った。

顔がのぼせたように赤くなるのをおさえることが出来ず、小さくぺこりとお辞儀をして早坂君のあとを追いかけた。

もうなにがなんだか分からないよお〜！！

一体全体なんでこんな事になっちゃったの！？

早坂君の顔が恥ずかしくて見れそうにないし…彰さんにもとんでもないとこ見られちゃったし……

早坂君が家まで送ってくれることも拒んで、いつそのままどこかに逃げ出してしまいたい。

もちろんそんな事をした後の報復が怖くて出来るはずもないのだが…

私、こんな事ならずと妄想の住人でいたかったかも（涙）

そう強く望ま^ずにはいら^れな^かつた。

第21話「妄想なんかじゃない!？」（後書き）

ここまでお付き合い頂いてありがとうございます!!（ ^ ^

）次話からは閑話として健人視点に入る予定です。もしよろしければ、評価・感想お待ちしております

閑話(1)(健人視点)

俺は昔から女が嫌いだった。 いや、

「苦手」といった方が正しいのかもしれない。別に

「男同士」という趣味があるわけでもないし、これにはきちんとした訳がある。

あれは小学生の時のことだった。四年……いや五年の時か？

スポーツでも勉強でも特に苦手とする事はなかったし、背もクラスでは割と高い方だったからなのか俺はちよくちよくクラスの女子から告白を受けていた。

当然、色恋沙汰には興味が湧かなかつたしクラスの奴らとサッカーしてる方が断然楽しかったから、告白は全部断っていたが。

当時俺にはかなり気に入ってたものがあつた。叔父から誕生日に貰つた結構高めのグレーのパーカーだ。

兄貴が嬉しそうに俺に自慢してきたパーカーが羨ましくてなぜか無性に欲しくなつてしまい、無理を言つて叔父に同じものを買つて貰つたものだった。

ある日放課後かなり遅くなってから、俺はそのパーカーを教室の自分の席に忘れてしまった事を思い出し、友人との遊ぶ約束を断つて慌てて教室へと走つた。

誰もいないと思われた教室からは、誰かまだ居残っていたらしくぼそぼそと喋り声が聞こえてくる。

こんな暗い教室で遅くまで何をやっているんだろう？

俺は不思議に思いながらも教室のドアに手をかけ、ゆっくりと開きかけた瞬間だった。

……………え？

視界に飛び込んできた光景にドアを開こうと動かしていた手をびくりと止める。

まさに信じられないような光景だった。

俺に告白した事のある数人のクラスの女子たちが俺の席を取り囲み、あのお気入りのパーカーを奪い合うようにしてべたべたと触ったり匂いを嗅いで嬉しそうに笑う姿……………

俺にとつたらB級のホラー映画なんか比べものにならないほどショッキングな映像でしかなかった。

いつも花のように笑っている姿とはまるでかけ離れた別の生き物。

「やめろ」という言葉は何故か口からは出てこなくて俺は瞬きひとつせずに茫然としてその場に突っ立っていたが、ふと我に返るとふらつく足で教室から離れた。

今思えばアイツらの頭がイカレていただけの話なのだが、まだ子供の俺にしてみれば精神的な衝撃はとんでもなく大きかったのだ。

俺は帰宅するやいなや、偶然居合わせた姉貴に洗いざらいさつきあった出来事を話した。恐怖心のあまり誰かに話を聞いて貰わなければとても平常心など保っていられなかったのだ。手に入れたばかりのパーカーをあんな奴らに奪われたことが悔しくて涙がこぼれそう

だった。

だけど姉貴は俺の話の話を聞くと、事もあろうかいきなり大笑いし始めたのだ。

「あははっ……面白い！！本当にそんな事があるのねえ……ぷぷつ。ほら、よくあるじゃない。好きな子のリコーダーを舐めてるクラスメイトを放課後発見しちゃう話！いやぁー良かったわね、健人。あんたモテモテじゃない 小説のいいネタが出来たわ」

姉貴はひーひー苦しそうに笑いながら、そのまま二階へと上がって行ってしまった。

俺は姉貴のふざけた態度に再び固まってそこから動けなくなっていた。あんなに真剣に悩んでいたというのに……啞然として言葉も出てこない。

ありえないだろ……あんなんで姉貴だつていえるのか？

俺が女が苦手になった原因が姉貴にあるといつてもきつと過言ではない筈だ。

ついでにそれ以来そのパーカーは着ることは出来なかった。

中学に進学すると告白される回数はますます増えていった。街を歩くたびに逆ナンされたり、他校の男子生徒までもが彼女をとられたとか言いがかりをつけて喧嘩を売ってきたり、そんな事は日常茶飯事となっていた。

小学校からのダチである芳沢直樹は

「お前を知らねー奴、もはやこの世にいないんじゃないの？」とくつくつと可笑しそうにそんな状況を笑っていた。

本当にこれ以上はうんざりだった。

所詮、俺が少しばかり顔がいいとか勉強が出来るだとかスポーツが出来るだとか………そんなのだけで興味本位で近付いてくる奴らがマジで鬱陶しかった。

高校に入っても現状は変わることなく、新入生代表なんてやりたくもなかったのに無理矢理やらされるハメになり、俺の名はあつという間に学校中に知れ渡った。

まだ入学してから1ヶ月も経っていないというのに告白どころか、放課後には自称

「ファンクラブ」とかいう意味分かんない奴らに追いかけて回され始めた。俺がいくら冷たくあしらっても殺気に近いものを放つても、めげずにしつこく追いかけてくるのだからもはや寄生虫並だ。家まで付いてこられたら本当になわなない。

俺は次第に放課後になると図書室に逃げ込むようになった。直樹が放課後に図書室を利用する生徒は格段に少ないらしいと教えてくれたからだ。幸い、本を読むのは好きな方だったから避難場所にはもってこいの場所だったのが唯一の救いだったが。

何で俺がこんな事しなきゃならないんだ………理不尽な思いに苛立ちだけが募っていく。異常なストレスで心身共に崩壊しかねない勢いだっただ。

本当にこんな生活はうんざりだ。

いい加減にしてくれ……

そんな時だった。

アイツと出会ったのは。

閑話(2)(健人視点)

その日相変わらずしつこく付き纏ってくる女達をまくのに思ってた以上に時間を食ってしまい、図書室がある階にやっとの事で辿り着けたのは5時半をとっくに過ぎてしまっていた。

「ちょっとあなた達!!健人様は見つかりましたのっ!?!」
「駄目ですっ!こっちの教室にも見当たりません!!」

階段の下から女達が騒ぐ声が聞こえてきて、「ちっ」と思わず小さく舌打ちをする。

B棟まで探しにくるとは……あながち勘が外れていないところが恐ろしい。実際に俺はここに逃げ込んでいるのだから……狂ったような執念深さと鋭い嗅覚は到底人間のものとは思えなかった。図書室はB棟の奥の方に配置されているからおそらくここまで来ることはないと思うが…

俺は重くため息をつく、いつまでも廊下につっ立っているわけにもいかなないので図書室へと向けて静かに足を踏み出した。

放課後図書室にいる生徒達は大抵5時半を過ぎる頃には全員下校してしまっている。ごくたまに史書の若い女がいるくらいだ。だがその史書も今は産休でいないと噂で耳にしていた。

だから当然のごとく誰もいないだろうと勝手に予想をつけて図書室の扉を開いたのに
扉を開けた瞬間、

「美智子先生？貸し出し記録って」

という声がカウンターの方から聞こえてきて、見事その予想は外れた。ちらりと目を向ければ1人の女子生徒がぼつんとカウンターの端のほうに座っている。言葉を途中で切ったままぼかんとした面を口を開けていたが、我に返ったのか「えっと……返却ですか？」とその女子生徒はおそろおそろ尋ねてきた。髪は二つに結われていて眼鏡をかけている、よく図書室にいそうな地味な感じの女だ。

前髪と眼鏡で隠れていたから、顔まではよく見えなかったが……

俺はその言葉には答えず、本棚に向かって歩き出す。

背中に視線が突き刺さってくるのは分かっていたが、あえて無視した。

俺がこんなところにいるのを驚いてでもいるのだろう。顔もはつきりと見られたし、もしかしたら放課後俺がここに来てる事がバレるのも時間の問題なのかもしれない。そろそろ潮時だな……

俺はそんな事をぼんやりと考えながら、目当ての本を探し始めた。

姉貴が小説家な事もあって無理やり姉貴から勧められた本を昔から読んできたからか、今では割と結構な読書好きになってしまっていると自分でも思う。図書室は自習目的で利用する生徒もいるようだが、図書室にいる時はやはり自然と本を読んで過ごしてしまうのだ。

トリックの複雑難解さと思わぬ話の展開で好評を博しているという某人気小説家のミステリー推理小説を手にとると、俺はそのまま力

ウンターへと向かった。

……にしても、図書委員の仕事を真面目にこなしている生徒が存在していたとは正直少し驚いた。

「図書委員なんてサボってもばれないし怒られる事もない」と図書委員に当たった生徒達は喜んでHRが終わったらすぐに帰ってしまふのが普通なのだから。確かに図書委員の仕事なんていったら貸し出しの記録をつけるぐらいであとは暇なだけだし、サボっても決して咎められる事はない。

だからこそ大人しくカウンターの席についている図書委員の姿を目にするのは珍しいことだった。

眼鏡の女は何か考え込んでいるのか、一人で「うん」と呟きながら眉間にしわを寄せて首を傾げていた。考える事に没頭しすぎて目の前の俺の存在でさえ気付いていない様子だ。

変な奴だな、と不審に思いつつも本を乱暴に突き出して「早くしろよ。お前、図書委員なんだろ」と言うと、そいつは目を丸くして俺を見てからいきなり

「星屑少年っ!!」

と叫んだ。

は？

飛び出してきた言葉に思わず自分の耳を疑う。

星屑少年？何を言ってるんだコイツは……

自分の醜態に気付いたのか眼鏡の女は顔を真っ赤にして「す、すみません。えーっと、貸し出しですね」と言いながら目を泳がせている。

だが、次にそいつの口から出てきた言葉には更に驚愕せずにはいられなかった。

「じゃあ、学年とクラスと名前を言ってもらえますか？」

「…は？」

「え？」

今、コイツなんて言った？

俺が思いつきり怪訝そうな顔をしたからなのか、意味が分からないとでもいうように女の表情は困惑で揺れていた。

「えっと……？」

「お前、俺のこと知らないのか？」

俺が驚きを隠せずそう尋ねると、眼鏡の女は本当に知らなかった様できょとんとした顔をしてから慌ててこくこくと頷く。

マジで度肝を抜かれたような気分だった。

自惚れていたわけじゃないが、どこへ行っても何故か皆俺を知っているという事実を嫌でも実感するだけでしかなかったのだ。

なのにこんな身近に俺の存在すら知らないような奴がいたとは……

名前を尋ねると、「白崎葵衣」という名前の隣のクラスの一年だった。

同学年なのに俺を知らなかったのか……本当に変なやつ……

貸し出しの記入を終えるのを待っている間にふとカウンターの横に置かれていた鞆に目をやると、鞆から覗いていたのは『星屑』という題と夜景をバックに背中を向けて佇んでいる少年が挿し絵として描かれている本。

作者名は「天音夜椰」。

思い出した。

これは確か3年前に初めて姉貴がどこかの賞を受賞したヤツだ。姉貴があんまりに煩く騒いでいたから妙に記憶が残っている。なんでコイツがこんなもの……

「お前さ、その本好きなの？」

「本？」

白崎葵衣は動かしていた手を止めて、俺の視線の先を見た。

「本ってその『星屑』のこと？？う、うん。そのシリーズはすごい好きだよ」

どこか嬉しそうに笑いながらそう告げる。

マジかよ……

俺も一応読みはしたけど、メルヘンというか俺には合わなくて途中で読むの挫折したんだよな……姉貴には言っていないけど。

姉貴も意外に隅に置けないな、とか本人の前で言ったら半殺しにされそうな失礼な事を考えながら、ふと先ほど脳裏を掠めた疑問を思い出した。

まさか、な。

「ふーん……。さっきの星屑少年って何？」

「う、ごめんなさい……えっと、この本に出てくる主人公のイメージがあまりにも早坂君にぴったりだったから……つい、そのお……」

しどろもどろになりながらバツの悪そうに目を伏せて答える。

その答えを聞いて思わず息を呑んだ。

……驚いた。

鈍そうだしどこか抜けてるから絶対に気付かないと踏んでいたというのに……

『星屑』の主人公である少年は姉貴曰く俺がモデル……だったらしい。

人物像がどうしても思い付かなかったらしく、本人の許可も得ず「まあ、健人だし別にいいわよねえ」と姉貴は勝手に話をすすめて原稿を書き上げてしまったのだ。本当にふざけた姉貴だ、とあの時はかなり憤慨して大喧嘩になった覚えがある。

だがその事実には家族である兄貴も親父もお袋も全く気付かなかったのだ。

呆然として見つめていると、彼女の顔はみるみる赤くなっていった。俺が何も答えなかったことを気にしてか今にも泣きそうに顔を歪め、そのまま俺の顔を見ずに真っ赤な顔で記入し終えた本を渡してきた。今にも沸騰してしまうんじゃないかというぐらい耳まで真っ赤になっている彼女の様子を見ていたら、面白さのあまり気付いたときにはぶつと吹き出してしまっていた。

「くくっ………すげえ顔真っ赤。どうやってたらそうなんだ」

俺がいきなり笑い始めたことに、眼鏡の奥にある彼女の目が大きく見開かれた。

そして笑われたことが恥ずかしかったのかそのままぷっつと頬を膨らませた彼女の顔にさらに笑いの壺が刺激され、また笑いがこみ上げてくる。

ああ、こんなに笑ったのは本当に久しぶりだ。一体何年ぶりだろう。

「お前葵衣っていつたっけ？今週はずっとここに居るのか？」

「えっ？う、うん」

「どうせここにはそのシリーズ三巻までしかないだろ？続き持つてるから貸してやるよ」

「えっ！？うそっ！？いいの！？」

さっきまでのふて腐れた様子はどこにいつてしまったのか。

打って変わって満面の笑顔ではしゃいでいる様子に呆れつつ、不覚にも可愛いと思ってしまった自分に驚いた。

女は苦手な筈じゃなかったのか？

「ああ。そのかわり、俺が放課後図書室にいることは絶対誰にも言うなよ」

さっきまでバレても構わないと半ば諦めていたのに、なぜか今はそう思わなかった。

媚びてくる女達とはどこか違う、ふんわりとした空気をもつ彼女。

天然かと思いきや意外にも洞察力があったり、その癖やつぱりどこか抜けていて……一緒にいると調子を狂わされる。だが不快感を感じるわけでもない。

女が傍にいただけで疎ましかったのに、なぜかコイツだけ違った。

唯一、俺を知らなかった女。

葵衣か……面白いヤツに会ったな。

俺は図書室を出た後、ニヤリと笑みを浮かべた。

何の変哲も無い日常に色が付き始めた瞬間だった。

閑話(2)(健人視点) (後書き)

次話からはまた本編に戻る予定です。5話〜21話までの健人視点はもしリクエストがあつたら番外編の方にupしていけたらと思つてます。次話からは一応、第2部ということで話は定期テストの話へと移り変わります(*^ ^*)さらに甘くなりそうですがお付き合ひして頂けたら幸いです(笑)vv

* 登場人物紹介 *

登場人物は随時、更新していく予定です。（本編ネタバレ内容有り）

* 白崎葵衣シラサキアオイ…本編主人公。高1。眼鏡におさげと容姿は地味だが、どこか天然でドジな少女。読書が大好きで尊敬する作家は「天音夜椰」。映研部員。

* 早坂健人ハヤサカ ケント…高1。文武両道の世に稀な美少年。冷淡でめつたに笑わないことから「氷の王子」との異名を持つ。映研部員。

* 宮川恵理ミヤカワ エリ…高1。葵衣の親友で世話好き。新聞部所属。

* 酒井由里香サカイ ユリカ…高1。葵衣の親友でミーハー少女。健人の大ファン。映研部員。

* 瀬川玲セガワレイ…高1。葵衣の親友で格好いいボーイッシュな少女。バスケ部所属。

* 芳沢直樹ヨシザワ ナオキ…高1。健人の親友。映研部員。

* 早坂小百合ハヤサカ サユリ…健人の姉。小説家でありペンネームは「天音夜椰」。葵衣のことが大好きな美人。

* 早坂彰ハヤサカキラ…健人の兄。甘いマスクの美青年で、仕事はどうやら夜に働いているようだ？

* 早坂羽織ハヤサカ ハオリ…健人の母。男らしく一見イケメンであるが、実は料理好きなど女らしい一面も。

シラサキユウ
* 白崎祐…中3。葵衣の弟でしっかり者。葵衣と同じ学校に通って
いてテニス部所属。

キサラギスミレ
* 如月薫…高2。健人のファンクラブ会長を務めている。

イタクラ エイジ
* 板倉英司…高2。映研部長。

イブチアツロウ
* 伊淵篤朗…高2。映研副部長。

ジンタニ カホ
* 神谷香帆…高2。英司の彼女。由里香のいところでもある。映研部
員。

ジョウノウチ ミユ
* 城乃内美優…高1。健人の彼女の座を狙っており、由里香のライ
バル。映研部員。

ワタナベ サトコ
* 渡邊聡子…高1。映研部員。

タカハシ アイ
* 高橋亜衣…高1。映研部員。

タヌマシユウタ
* 田沼修太…高1。映研部員。

ハシユウ
* 原愁…高1。映研部員。

*** 登場人物紹介* (後書き)**

今更ですが載せさせて頂きました(笑) よろしければ参考にしてください。

第22話「救いのチャイム、再び」

なんだか最近早坂君といると前にも増してドキドキする……

なんなんだろう？

このぼかぼかとした暖かい気持ち……。

ふと気が付けば、目の前ではにっこりと微笑んでいる早坂君。

「葵衣、好きだよ」

そう言っつて早坂君は私の頬をそつと撫でる。

え？

え？

早坂君！？

いま、なんて……！？

早坂君は私の質問には答えず、目を閉じて顔を近づけてくる。

ちよつと待つて……！？

好きつて誰をつて今言つたの！？

今のは空耳？

ま、まっつて、早坂君っ……

「お願いだからちよつと待つてええ……！！！！」

「おいつ、姉ちゃん！？いきなりどうしたんだ！？」

「…………ふえ？」

目を開けて視界に飛び込んできたのは、心配そうな顔で私を見つめている祐ユウの姿。

早坂、くんじゃない……。

あれ……？もしかして今のって全部夢？？

「姉ちゃん起こしにすればさあ、いきなり『お願いだからちよつと待つてええ』って叫ぶんだもん。しかも魔ウナされながら。姉ちゃんなんか怖い夢でも見てたんじゃないの？（笑）」

祐はそうくすくす笑って言いながら窓のカーテンを開け、硬直して動けなくなっていた私を起こしにとりかかる。煩いぐらいに心臓はばくばくと高鳴っていた。

ちよ、ちよつと待つて……とりあえず落ち着こう、私。

今のはつまり夢でえ……

…………つて夢！？

たっ、確か早坂君が私のことを…………つって私なんて夢を！！？／／／／

「…………姉ちゃん？顔真つ赤だけど大丈夫？熱でもあんの？つーか早く起きないと遅刻するよ？俺ももう行かないと遅刻しちゃうし後は自力で起きてね？母さんも父さんも出掛けちゃって家には誰もいないから」

「・・・うえっ!!!?ま、待って。祐、いま何時なの?」

「8時ちようどだよ。ほら、姉ちゃん早く起きなっ!朝食簡単に作って置いといたからさ。目玉焼きとベーコンとトーストだけどそれで良かった?」

「う、うん!ありがとう・・・祐」

「どういたしまして。それじゃあ俺もっ行くから。姉ちゃん、くれも学校行くとき走って転んだりするなよ?」

「しっ、しししません〜〜!!!(汗)もっ子供じゃないんだしっ
!..!」

「くすくす・・・どうだかなあ?なんだかムキになってない?もしかして凶星だった?」

「ち、違いますっ!!..!!いいからもっ早く学校行きなっ!遅刻しちゃうよ!..?」

「(いや、むしろそれは姉ちゃんだろ・・・)ハイハイ。じゃあ行ってきまーす」

忍び笑いしている祐の背中を無理やり玄関の外まで押し出すと、私ははあっと溜息をこぼした。

祐こと、シラサキユウ白崎祐は真正銘血の繋がった、私の1つ下の弟だ。

我が弟ながら昔から几帳面な性格である上にしっかりしていて、私が朝寝坊したりするところやっ!て必ず面倒を見てくれるのだ。これ

ではどつちが年上なのか分かりやしない。

にしても・・・朝っぱらから何ていう夢を見ちゃったんだろう。
妄想の次は夢？私の頭は本当に大丈夫なんだろうか？

それこそ熱でもあるんじゃないかと疑わずにはいられない。
病院に行ったほうがいいのかも・・・。

第一冷静に落ち着いて考えてみれば、早坂君があんな事言うわけないじゃない。

はあああああ・・・ありえない。恥ずかしすぎるよおゝ！！
／／／

私はもう一度盛大に溜息をつき、ふと時計に目をやると・・・いつのまにか先程から5分経ってしまっている。

私は小さく悲鳴を上げると、慌てて洗面所に駆け込んだ。

「おはよう葵衣。ギリギリセーフだったわね」

「おはよー朝からお疲れさん」

予鈴と同時に教室に滑り込み、走り疲れて机に突っ伏した私に恵理と玲ちゃんが声をかけてくる。

「おはよ・・・うん、うつかり寝坊しちゃって。弟が起こしてくれなきゃ完全に遅刻してたよ」

僅かに顔を上げて返事をすると、いきなり前にいた恵理がぶつと吹き出した。

「えっ！？なに！？なんか変？？」

な、なんで急に笑ったの！？

焦って玲ちゃんの方を振り向くと、なぜか玲ちゃんまでお腹を抱えて笑い始める。

「アンタ・・・っ、どうしたのよその額・・・っ」

「え？額？」

2人の視線の先は真っ直ぐに額に向けられていて、恵理も玲ちゃんも可笑しそうに笑い続けている。

何が何だか分からなくて手で額に触れると、鋭い小さな痛みが走り思わず顔をしかめた。

お、思い出した。

学校に来る途中、急いで走っていたときに確か躓いて転んだんだっただ。もしかしてその時に出来ちゃった傷！？

どっ、どうしよお〜！！

祐にあんな偉そうに啖呵タンカを切っちゃったのにこの傷見られたら転んだ事がバレちゃう・・・

は、恥ずかしいぞ、それはかなり・・・

姉としての威厳もへったくれもないではないか！

「葵衣の事だから、どうせ何もないところで転んで頭でもぶつつけたのね？」

「うつ……」

す、鋭い……さすが恵理。

「そ、そんなに目立つ？この傷……」

「まあ、前髪で隠せば分からない程度だから大丈夫だよ。気にする必要はないって」

と玲ちゃんが答えてくれたのでほっと一息つく。なんとかバレずにすみそうだ……

「ほ、ほんと？良かった……ってあれ？由里香は？」

「まだ来てないみたいよ。遅刻じゃ」「あ　お　い
つつ！！！！！！！！」

恵理の言葉が遮られて聞こえてきた大声にぎよつとして声が聞こえてきた方向を見れば、ぜーはーと息を切らしている由里香の姿が目に入ってきた。そして由里香は鬼のような形相でそのまま猛スピードでこちらに向かって突進してくる。

ひええっ！！こっ、こわいっ！！！！

「アンタツツ！！！！昨日どうだったのよ！！！！！！」

「ひっ……き、昨日、ですか？」

「ぶざけんじゃないわよっ！？忘れたなんて言わせないから！！私

気になって寝れなかったんだからね！？おかげで寝坊しちゃったじゃない！！」

「あ、あの、何の事だかさっぱり・・・」

「しらばっくれる気！？早坂君よ、は・や・さ・か・く・ん！！歓迎会の途中で酔っ払った葵衣をあの早坂君が送ってくれたんでしょ！？」

「う、うん・・・」

『え！？』

恵理と玲ちゃんが驚きの声を上げる。

「いや、えっと一番私の家に早坂君の家がたまたま近いからって送ってくれただけだから・・・」

まさか起きたら早坂君の家にいたなんて言える筈もない。

「じゃあ特になーんにもなかったのね！？」

由里香が少し安堵した表情で確認するように尋ねる。

だがその途端早坂君とのキスが脳内に浮かび上がり、自分の顔に熱が集中するのを抑える事が出来なかった。

そんな様子を見た3人の目が驚きで大きく見開かれる。

「え？葵衣？まさかあの早坂君となんかあったの？」

「嘘。本当なの？」

恵理と玲ちゃんがそう慌てて尋ねつつも、どこか呆然とした表情を浮かべている。

「はあっ！！！！？ちょっと待ってよ！！！！嘘でしょっ！？ねえ、嘘よね葵衣！！！！？」

いきなり由里香に両手で顔を掴まされると、そのままがくがくと揺さぶられた。

「な、な、な何にもない、何にもないです！！！！てかゆ、由里香、首が痛い……いたって！！！」

「ホントね！？何にもなかったのね！？」

「は、はい！！」

こくこくと何度も首を振る。

するとその時、授業の始まりを告げる本鈴のチャイムが鳴り響いた。由里香は納得したのか「何もなかったならいいわ」と納得して、顔を掴んでいた手を解放してくれた。

勢いよく頭が揺すられからか、ぐらぐらと視界がまだ揺れている。背中は冷や汗でびっしょりだった。

「まあー葵衣だしねえ。何かあるわけ無いわよね」

恵理がどこかつまらなそうに呟くのに、玲ちゃんも苦笑しつつ頷いた。

と、とりあえずピンチは脱出した、けど……

い、言えない。

今の3人の反応、いや特に由里香の見たら今までの早坂君との事を話せるはずがない。

むしろ信じてすら貰えないんじゃないだろうか？

まさかあの早坂君と自分が何かあるなんて誰も思わないだろう。

彼と自分の差は天と地の差なのだから……

で、でも妄想じゃなくて確かにキス、したんだよね？早坂君と……

…。

それに……早坂君はなんで私なんかにキスしたんだろう。

友人3人はもちろんの事、自分ですら気付かないうちに葵衣はそう疑問に思いつつ健人とのキスを思い出し、また顔を真っ赤にしていたのだった。

第22話「救いのチャイム、再び」(後書き)

第二部開始です(笑) お付き合いして頂けたら嬉しいです

第23話「遭遇と決心」

お弁当の包みをほどいて蓋を開けると、今日は彼女の大好物ばかりだった。厚焼き卵にほうれん草のゴマ和え、可愛いらしいタコさんウィンナーも入っている。

思わず笑みをこぼした私を不審に思ったのか、隣でコンビ二のおにぎりを豪快に頬張っていた玲ちゃんが隣からお弁当の中身を覗き込んできた。

「わあーっ！美味しそう。これってもしかして例の弟クンが？」

玲ちゃんの言葉につられてお弁当を見た恵理と由里香も続けざまに感嘆の声を上げた。

「すごいわねえ。祐君だっけ？中3なのにこんなお弁当作れちゃうなんて」

「ていうかむしろ私なんかより断然料理ウマイ？なんか女として自信がなくなってきたあ…！」

身内の欲目無しでも料理が上手なことは明らかだった。彩り鮮やかなおかずからはお腹の虫をくすぐるほど良い香りが漂ってくる。

最近祐はどうも料理に目覚めたらしい。

たまたま見ていたテレビ番組で興味を持ったそうだ。

今までは母親が2人分のお弁当を朝早く起きて作っていたが、祐が料理に関心を持ったことを知ると喜んで料理を教え始め、今では頻繁に祐にお弁当作りを任せるようになった。

料理を覚え始めた頃に比べものにならないほど、祐はめきめきと料理の腕に磨きをかけている。その証拠がこのお弁当だ。もともと姉に似ず、祐は昔から手先が器用なのである。

それに比べて私はというと……料理はからつきしダメだ。

姉……いやそれ以前に女として終わってるなあ、とつくづく思う。まあ、料理が出来なくとも今の時代にはインスタント食品という便利なものがあるから別に困ることもないのだが。

どこか虚しさに捕らわれつつ、ふっくらと焼きあがった厚焼きたまごにがぶりと噛みついた。

「それにしても一体いつまでこの天気は続くのかねえ……ここまで続くと気分が滅入るわ」

恵理が窓の外を眺めて呟いた。

言われるがまま目を外に向けると、雨が窓を伝って滝のように流れ落ちていて外の景色が霞んで見える。

「来週には梅雨明けするんじゃないかな？もうすぐ7月になるし」「ええっ！？もうっ！？うっ、ゲホゲホ……」

玲ちゃんの言葉に驚いたらしく、由里香は飲んでいた牛乳を喉につまらせ咳き込んだ。

「ちょっと由里香、何やってんのよ……大丈夫なの？」

呆れ顔の恵理を、目尻に涙が溜まった状態で由里香は睨みつける。

「そんな事は今はどうでもいいっ！」

「はあ？」

「試験つていつからなの!？」

「試験?……ああ、期末考査のことね。何を今更…来週からに決まってるじゃない」

「ええ　　つつ!?!?来週!？」

すっかり試験のことを忘れていたらしく、由里香は焦った表情で叫んだ。

ゆ、由里香らしい……

そんな様子を苦笑しながら見ていると、いきなり肩をとんとんと躊躇いがちに叩かれた。

振り返るとクラスの女の子が気まずそうに立っている。

何だろう?……?

「あの、白崎さんと酒井さんを呼んでこいって…」

「え?誰が?」

「あそこに立つてる怖そうな女の人達……たぶん先輩だと思っ」

教室のドアを見ると、ドアはスカートの短い茶髪のキレイ系のお姉さんたちの集団で占領されていた。

その迫力に「ぎゃっ」と叫びそうになるのを堪えて、慌てて目をそらしたが心臓が恐怖のあまりバクバクと高鳴っている。

いま、確かに睨まれたよね…!?

ななな、なんで!?

全然面識無いのに……また知らぬうちに私なんかやらかしちゃったの?

「それに真ん中の人は如月さんキサラキじゃないかな。…あの有名な」
「え、え？ゆ、有名？」

なにで？

「ほら、早坂君のファンクラブの…確か会長だった気がするけど…。何言われるか分からないし、とりあえず早く行った方がいいよ……怒らせたらやっかいな事になりそうだし2人とも気をつけてね」

は、早坂君のファンクラブ…!!？

身じろぎひとつさえ出来ず、そのまま固まった。

瞬間的に脳内に早坂君との出来事が走馬灯のように駆け巡り、由里香の言葉がリピートする。

……早坂君に近づくと女を片っ端から裏で呼び出してシメあげて排除してくんだって!!まさにリンチよ、リンチ!!

も、もしかしなくてもこれからリンチで排除ですか？

「ゆ、ゆりか……」

ぎこぎこことロボット様になんとか体を不自然だが動かして、未だにこのピンチな状況に気付かずテストに心を奪われている由里香に呼びかける。

「ん？なによ、葵衣！今それどころじゃ」

由里香は不機嫌そうに振り向いたが、尋常じゃないほど蒼白になっ

ている葵衣の顔を見て目を見開いた。

「え、ちょっと、葵衣？どうしたの？」

「ファンクラブの人に、わ、私たち呼ばれたみたい……」

由里香は一瞬動きを止めてドアの方に目を向けてから、納得したようになぜか頷いた。

「由里香………？」

「いよいよお出ましくてわけね……ふふっ。行くわよ、葵衣！」

「え？」

しっかりと私の右腕を掴むと、由里香はそのまま引きずるようにして教室のドアへ歩き始めた。

あまりにも突然のことに思考が一時停止していたが慌てて我に返ると、

「うえっ！！？ち、ちょっと待って！！ゆ、由里香？な、なんか準備してかないと……」

と抵抗の色を示すが、

「は？何言ってるのよ。準備って武装でもしていくつもり？戦争しに行くんじゃないんだから！いいから、早くっ」

と一刀両断され、とうとう教室のドアのところまで来てしまった。

ええええええ！！？

ち、ちょっと待つて待つてえ!!
だ、だってリンチで排除されるかもしれないんだよ!?
なのに何でこんな由里香は落ち着いてられるの!?
むしろ楽しそうなのはなんでっ!??

助けを求めるように後ろを見るが、恵理と玲ちゃんを含めクラスメイトたちは薄情な事に、いつのまにか教室の端っこの方に移動してすでに遠巻きに見物する気満々なようだ。

お、おわった……

そんな様子などお構いなく、由里香は堂々とファンクラブの人達の目の前に立った。腕を放してくれなかったので必然的に私も……なわけ。

おそろおそろ顔を上げてみると、マスカラがたっぷり塗られた眼でぎよろりと睨まれた。

ひ、ひええええ……!!!

あまりの恐ろしさにがくがくと膝が震える。

「あなた達が白崎葵衣に酒井由里香ですわね？」

ゴージャスな巻き髪の先ほど如月さんと呼ばれた人が、ふんとバカにしたように笑った。

「なんだ……全然大したことありませんのね。危惧する必要もなかったわ。こんな乳臭い子供じゃ健人様もお相手にしないでしょっ」

それを聞いた由里香のこめかみがピクつと僅かに動いたのが分かった。だが由里香は笑みをたたえたまま、拳を手が白くなるまでぎゅつと握って怒りを堪えたようだ。

「それで……………先輩達はなんのご用で？」

「アラ、ごめんなさい。自己紹介がまだでしたわね。ご存知だと思えますけど健人様のファンクラブの会長を務めさせていただいてます、二年の如月董キサラモヘミレと申します。今回はあなた方に忠告を申し上げようとしたのですが……………とんだ無駄足だったようね。まあ、いいわ。あなた達……………映画研究会よね？」

なぜか如月さんの顔が私に向いた。

いきなりで思わず息を呑んだが、なんとか慌てて頷いて肯定の意を示す。

すると如月さんの顔が恐ろしいほど歪んだ。

「くつ……………ホントに忌々しいわ、あの女……………。いいこと？健人様に必要以上に近付いてご覧なさい。私たちファンクラブワタクシが黙ってないわよ？」

不適な笑みを浮かべて一瞥すると、

「行くわよ、あなた達」

と言い、身を翻して如月さんは颯爽と廊下を歩いて行ってしまった。その後を追うようにしてぞろぞろとファンクラブの集団がいなくなり、教室に急にしんとした空気が訪れる。

「……………」

あつと言つ間のことには何が起きたのか理解できず、混乱した脳内を必死に整理しようとした。

え、えつと？今のつて一体……………

「ホントにム力つくんだけど、あのケバ女ツツ！！誰が乳臭い子供だつてええ！！！？」

由里香の怒りが爆発した。相当我慢していたのだろう。由里香の手のひらには拳を握りすぎてか赤い爪痕がいくつも出来ている。

興奮のあまり顔を真っ赤にしてぜえぜえと息を切らしていたが、怒りがおさまったのか由里香はふうとゆっくり息を吐き出した。

「ふふ……………にしてもさすが香帆姉ね。頼んどいて正解だったわ」

「え？」

「絶対早坂君目当てで映研入部希望者が後から出てくるでしょ？だから早坂君目当ての女は全員切り捨てるように頼んどいたの。もちろんあのケバ女もね。香帆ねえ曰くすんごくしつこかったらしいけど」

「じゃ、じゃあさつき言つてた 忌々しい女 って……………」

「香帆姉のことですよ。それに隣のクラスの高橋さんも呼び出されたらしいし。渡邊さんだつてさつき廊下を歩いてる途中で引き止められたつて」

「ええっ！？？」

驚いて渡邊さんの顔を見ると、渡邊さんが気まずそうに微笑んだ。

そ、そうだったんだ……………

渡邊さんだけ呼び出されなかったのは、すでに忠告され終わっていたかららしい。

「色んな女に馬鹿みたいに忠告して歩き回ってるみたいだし、気にする必要も全くないわ。城乃内のヤツの次はファンクラブ……あんな奴らに早坂君を盗られてたまるかつ！！合宿の時に絶対に今よりもっと親密になってやるんだからああ〜！！」

由里香は雄叫びを上げ、その目はめらめらと闘志の炎で燃えていた。

今回は忠告だけですんだもの……次に呼び出されたとしたら確実にリンチであることは間違いないはずだ。あの集団に囲まれた自分を想像するだけで、ぶるつと寒気が走る。

なるべく早坂君に近付かないほうが良いのかもしれない……

どこか寂しいと思う心を閉じこめて、心の中でそう小さく決心を固めた。

まさかそれが後々悪魔の報復になるとも知らず

……

第24話「友情とは」

「葵衣ー！アンタ今日どうするの？図書室で勉強してく？」

「うっん、たぶんテスト前だから混んでると思うし……どうしよう。図書館にでも行こうかなあ」

家に帰っても勉強に手付かずだろうし、最初は学校の図書室で勉強してから帰ろうと思ってたんだけど……

板倉先輩の情報によると、試験1週間前を切ると図書室はいつも自習する生徒達で満員になるらしい。

上級生から下級生まで含め多くの生徒が図書室に殺到するため、想像を絶するほど違った景色が広がるそうだ。

「よし、じゃあ途中まで一緒に帰ろ。…由里香は？もう帰る？」

「帰るよー！さっさと帰って雌蜘蛛を蹴散らす為に対策練らなきゃならないしっ」

鼻息を荒くした由里香が力強く答える。

め、めすぐも！？

驚いて由里香の顔を見つめるが、由里香は平然としたままだ。思わず眉間にしわが寄ってしまふ。

蹴散らすって……駆除する必要性があるほど家に大量に蜘蛛が発生したということ？

だとしたら悠長に構えている暇などこれっぽっちもない筈では……。思わずうじゃうじゃと蜘蛛がいる様子を思い浮かべてしまい、ううと気分が悪くなって口元をおさえる。

由里香の家ははたして大丈夫なんだろうか……
というか……蜘蛛って性別をどうやって判断しているんだろう？
いつも蜘蛛に出くわすと怖くて咄嗟に逃げてしまうので、まじまじと蜘蛛を見つめたことがないから分からないが……

「あ、あの」

「葵衣？……って、どうしたの！？顔真っ青じゃない！」

一瞬にして恵理と由里香の表情が慌てたものに変わる。

「い、いや、これは別に大丈夫なんだけど……それよりも聞きたいことがあって」

一呼吸置いて気持ちを落ち着かせてから、言葉を繋げる。

「えっと……雌蜘蛛メスグモと雄蜘蛛オスグモの違いってどうやって見分けがつくの？」

その疑問を投げかけた瞬間、あたりの空気が水を打ったように静まり返った。

え……、ええっ！？

焦って2人を見比べるが、両者とも今まで見たことのないような表

情を浮かべ、人外のものを見るような目つきでこちらを凝視している。

な、なんでこんな急に静かになっちゃったの!?

どうしたらいいのかわからず戸惑っていると、しばらく経ってから恵理がそんな空気を一掃するように息を吐き出した。

「前々から事あるごとに天然だとは思っていたけど……ここまでくると天然記念物級だわ……」

由里香も呆れたように額を左手でおさえている。

「葵衣……この鈍感娘！雌蜘蛛っていうのは単なる比喻表現で、さっきのファンクラブの奴らのことを指してたのっ！分かった!？」

由里香の畳み掛けるような怒鳴り声に反射的に首をこくこくと縦に振る。

そして由里香は疲れたように目線を宙に上げてから「……ついでに私もさすがにクモの性別の見分け方までは分からないわ」とぼそっと呟いた。

そ、そっか……そうだよね。

よくよく考えてみればすぐにファンクラブの人達のことだって思い当たったはずなのに……。

本当に莫迦だ、わたし……

自分の思考の回転があまりにも鈍すぎて、自分が自分で情けなくなってくる。

「い、いじめんなさい……」

すると、恵理と由里香がきょとんとして見つめ返してきた。

「なーに謝ってんのよ、葵衣。それがアンタの良さのひとつなんだから。別に怒っちゃいけないわよ……ちょっと呆れただけで」

恵理の言葉に由里香がぶつと吹き出した。

「そうそう！私の表現の仕方悪かったし……」

「そうね」

恵理があっさりと肯定の意を示す。

「はあ!?!」

「だって普通にファンクラブって言えば、葵衣の考えがあんなに飛躍することもなかったじゃない」

きっぱり恵理が言っただけで、由里香は拗ねたように口を突き出した。

「そりゃそおだけど……アイツらホントにクモみたいなんだもん」

2人のやり取りに思わず笑ってしまった。

本当に……なんでこんなに2人とも優しいんだろう。

2人の気遣いにじんと胸が沁みてる。

こんな素敵な友達に巡り合わせてくれた神様に感謝の気持ちでいっ

ばいだった。

ふと思い出したように恵理が言った。

「っていつか由里香、さつきから言おうと思ってたんだけど……。ア
ンタ、来週から試験だって意気込んでたのもう忘れたんじゃないで
しょうね？」

「……………！！」

由里香の顔からさあっと血の気が引いていく。
どうやら本当に忘れていたらしい。

恵理は「バカ？」と冷ややかな目つきで由里香を睨むと、すっかり
言葉をなくしてしまった由里香を無視して帰りの用意を始めた。
そんな様子に苦笑しつつも、ふと違和感を感じて辺りを見回す。

あれ…………？そういえば玲ちゃんは…………？

「恵理、玲ちゃんは？」

「玲はいつものごとく、バスケよ」

「えっ！？な、なんで！？だって部活動ってテスト一週間前から禁
止されてるんじゃない？」

「先輩達の試合が近いんだって。だから今回は例外で認められたら
しいわよ」

「へええ〜」

思わず感嘆の声を漏らしてしまった。

玲ちゃんが前に「今度の試合は負けられない試合なんだ」と意気込んでいたのを思い出す。

そっかあ、試合か…すごいな〜さすが玲ちゃん。

一年生ももう試合に出られたりするのかな？

「まあ、玲はそこそこの頭いいし部活やっても試験には影響ないですよ。……誰かさんと違って」

「ちよっと!?なんでそこで私を見るわけ!？」

ちらりと由里香を見つめてきた恵理を、心外だというように由里香が叫ぶ。

「なんでって……この4人の中で一番危機的状況にあるのは間違いなくアンタでしょ。授業中だってほとんど寝てるじゃないの」

指摘されて由里香は言葉にぐっと詰まる。

「ほら、いいから早く帰る準備して。余計な事考えてないで、今は試験勉強に励んだ方がいいわよ。噂によると夏休みに補習があるかもしれない、って話だし」

「ほっほしゅっうっ〜!!!!?」

由里香は素っ頓狂な声を上げてから、腰が抜けたようにへなへなと床に座り込んでしまった。

「ゆ、由里香!?!」

慌てて声をかけるが、由里香は呆然とした表情のまま視点の先は一点に固定されて動かない。

「あ、ありえない……なんで高一から補習なんて受けなきゃなんないわけえ?」

「逆に高一から補習を受けるぐらいの成績じゃマズイってことですよ。このままアಂತアの夏休みが消えてもいいの?合宿も行けなくなるわよ?」

「よ、よくない!全然よくないっ!!早坂君との素敵 ラブサマーバケーション計画を崩されるなんて冗談じゃないわ!!ふたりももっ、帰るよ!勉強しなきゃ!!」

「早坂君とのすてきらぶさまーばけーしょん計画」?

なんだ、それは……?」

いつのまに由里香の脳内でそんな計画が進行していたというのだろうか?

がらりと態度を変えた由里香がさっさと張り切って教室を出て行く様子を見て、恵理はハアッと溜息をつくと、肩を竦めて「単純なやつ……」と呆れ顔で呟いた。

第24話「友情とは」(後書き)

や、約2ヶ月ぶりとなる更新です……。

本当に遅くなってしまつてごめんなさい……

更新履歴を見てもうこんなに月日が経つてしまっていたのか!と思
い慌てて……という感じです(苦笑)

もう11月も半ばに差し掛かり……本当に一年って過ぎるのがあつ
という間ですね(^^;)

次話のもうちよっと早く更新できるよう頑張ります!(汗)

第25話「悪魔からのお知らせ」

すでに夕暮れ時ではあったが、夏に差し掛かるうとしているせいか日が暮れるのが遅くまだ外は明るい。

恵理と由里香に途中で別れを告げると、私はさっそく市内の図書館に足を向けた。

最寄りの駅から歩いて約10分の距離にあるこの図書館は市内では一番大きいと言われている図書館で、200万冊あまりの本が所蔵されているらしい。

5年前ぐらいに建てられた割合新設のものだけど、私は小さい頃からよくこの図書館に通っていた。つまり小学生の頃からなるわけだけど。

滅多に見つからないような珍しい文献も多かったし何よりもこの暖かみのある雰囲気が好きで、ついつい気付けば足が自然に向かってしまうのだ。

恵理が言うように

「本の虫」っていうのも、あながち間違いではないんじゃないかと最近特にそう感じてしまう。

平日なこともあって、広い館内は割合閑散カンサンとしていた。来ている人たちのほとんどは学生のようなようだ。数人は机に向かってレポートのようなものを必死に作成している。

よし、これなら集中して勉強できそうかも…。

この図書館の何より便利な点は閉館時間が8時であることだ。遅く

まで勉強することが出来るから学生にしてみればオイシイ話なわけ。帰り道も人通りが多いから安全だし……。

内心ほっとして私は無意識に小さく微笑むと、一番窓際の端っこの日当たりの良さそうな席に腰かけた。

鞆から筆ばこと参考書を取り出し、ノートを机の上に広げる。

英語と国語と地歴はどうにかなるとして ……やっぱり山場なのは数学なんだよね。

ノートに記されている公式を見て、なんだかどつと気分が重くなつた。

私は数学が昔からあまり好きじゃなかった。どちらかといえば「嫌い」の部類に入るのかもしれない。

なんて言うのか英語とか地歴は暗記だけで補^{オギナ}えるところが多いけど、数学は頭の回転が必要になってくるしどうしても暗記だけでは答えまで導き出せないのだ。

「閃^{スリキ}き」なんて能力があればいいんだけど、そんなもの勿論もってないし……。

それでも中学までは何とかして平均点ぐらいの点はギリギリ取ってきた。本当にギリギリだったけどね。

ただで高校に入ってから一気に問題のレベルが高くなり、私の脳では理解不可能の域にまで到達してしまっているのだ。はつきり言わずとも今回のテストはかなりヤバい。ヤバすぎる。

はあ〜……………今日は一体何時に寝れるのかなあ？

絶望の境地に立たされたような気分であらゆる見上げる。
そしてゆっくり息を吐き出すと、私はノートに視線を落とし問題に
取り掛かった。

だ、ダメだあゝ全然解けない……………。

バタッと机の上に倒れ込む。

いくら頭を捻って考えても、まったく公式の展開が見えてこないの
だ。

シャープペンはさっきから同じ箇所ですつと止まったままだし…………ち
よっと進んだかと思ってもすぐに分からなくなって消しゴムで消す
作業の繰り返しになっちゃうし…………。少なくとももう始めてから3
0分は経過してしまっているはずだ。

どうしよう…………このままじゃ今日一日数学だけで終わっちゃうよ…
…。

なんだか急に泣きたい気分になってくる。

所詮、数学に向いていないのだ自分は……………。

いつそのまま数学なんてやめちゃいたい…。そんな考えが一瞬脳
裏をよぎっていく。

だけど今、数学を放り出してしまったらそれでこそ

「補習」になりかねないのだ。夏休みが数学漬けになるのだけはど
うしても避けたい。合宿にも行きたいし……………。

八方塞がりの状況に思わず溜め息がこぼれる。
机に顔をくっつけたまま窓に顔を向けると、顔に暖かい陽射しが当たってきた。陽射しを浴びているうちにだんだんと眠気が襲ってくる。

なんかポカポカして気持ちいいかも……。
朦朧モウロウとした頭でぼんやりとそんなことを考えていた時だった。

「おい」

いきなり頭上から聞こえてきた低い声。
びっくりして伏せていた顔を上げると、そこにいたのは……

「はっ、早坂君!!?」

ええっ!?!?

な、なんでこんな所にいるの!?!?

「な、なんで………」

慌てて突っ伏していた体を起こす。

早坂君は無表情のまま私の前の席に鞆をどさつと置くと、淡々とした口調で答えた。

「俺、よくここに自習しに来るから」

そう言って椅子を引いて腰かける。

そういえば……と、私の家と早坂君の家が近かったことをふと思いつ出した。

「…お前は？」

「あ…え、えっと私も勉強しに…」

「ふーん……その割には随分眠そうだったけど？」

早坂君はそう言ってニヤリと笑った。

ううっ……！出たよ、悪魔の微笑！！

それでいて格好良かったりするから更にたちが悪い。妙に癪に障るというか……。

なんだか急に悔しくなって、ムツとして言い返す。

「ちがうのっ！！数学に行き詰まって分からなすぎて眠くなっちゃっただけ！！」

……っ、全然言い返せてないし！！

一体何を言ってるんだ、私は！！

しかも全く威張って言える内容じゃない……。

こんなことしか言えない自分が心底情けなくなってくる。

「数学分かんないのか？」

きつとバカにされるんだろうなあ………と思いつつ諦めて素直に頷く。

だって本当に分からないんだもん……。

確かに自分だけではもうお手上げ状態だし数学を教えてもらいたい気持ちがあるにはあるけど……こんな完璧な人の手を煩わせていいはずがないのだ。

「お前……俺の言ってること聞こえてるのか？」

一気に不機嫌になった声色に慌てて我に返って頷く。

「聞こえてんならさっさとしろ！」

「で、でも迷惑じゃ」

「……いい加減にしねえと……俺を怒らせたいのか？」

ドスのきいた低い声に自分の体がピキッと凍り付いた。鋭く突き刺さる視線にすうっと背筋が冷えていく。

ひええっ！！や、やっぱり怖い……！！

「よ、よろしくお願いします……」

ダメです……もう完全にギブアップです……

私はこの方には一生勝てる気がしません。

がつくりとうなだれている私を尻目に

「ああ」と早坂君は満足そうに頷くと、

「……で、どこが分からないんだ？」と今度は吃驚するぐらい優しく聞いてきてくれた。

その目は

「もうそのギャップとかお願いだから勘弁してください！」って思

わず叫びたくなるぐらい優しい色を浮かべていて。

私は思いつきり動揺しつつおずおずと問題の箇所を言うと、早坂君は信じられないぐらいの速さですらすらと問題を解き、一問一問丁寧に解説してくれた。私のとんちんかんな質問にも何度もちゃんと答えてくれて……。

数時間後にはあんなに分からなかった問題が早坂君のおかげでやっと解けるようにまでなっていた。

「あ、ありがとう早坂君！おかげですごく助かりました……」

本当に早坂君がいなかったらこんな問題絶対にひとりじゃ無理だった。

いくらしても足りないぐらい感謝の気持ちで胸がいっぱいである。

早坂君はこちらを一瞥すると、はあっとため息をついた。

「別に……でも葵衣ってホントに数学だけは苦手なんだな」

「う、うん。いくらやっても解けるようにならなくて……」

私がそう言うと、なぜか早坂君は考えるように黙り込んでしまった。

どうしたんだろう……？

不思議に思って早坂君を見つめる。

伏せられた睫は男の子にしては長いなあ、なんてじっくり観察していると、ふと視線の先が早坂君の唇に突き当たった。

その途端、かあっと顔が熱くなる。

わたし、本当にこの唇とキ、キスしちゃったんだよね……？
嘘じゃなくて本当に……。

そこまで考えて急に恥ずかしくなって顔を俯ける。

うう………なんでか分からないけどまたドキドキしてきちゃった……
っていうかこんな事考えてる私ってやっぱり変態……！？

そんなことを悶々と悩んでいると、いきなり

「葵衣」

と早坂君に呼びかけられた。

ま、まずい……！

今絶対顔真っ赤だから変に思われちゃう……！

顔を上げられずに俯いたまましていると、早坂君が不審そうに尋ねてきた。

「お前、なんで下向いたままなんだ？」

早坂君が顔を覗き込んでこようとするので、慌てて顔の前で手をぶんぶん振ってごまかす。

「ほんと、き、気にしないで！それよりなにか私にあるんじや
」

しかし次の言葉を耳にした瞬間、私は聞いてしまったことを激しく

後悔した。

「ああ。お前明日から俺の家に来い。数学教えてやるから」

「え　　は、はい!!?」

いまなんとおっしゃいましたか、この方は!?

む、無理!!そんなの無理に決まってるじゃない!!

と、そのときまるでポンという効果音が聞こえてくるかのように思い出した。

あの巻き髪美人集団のことを…。

ぎよろりと睨みつけられた目を思い出し、思わずぴよんと体が飛び上がる。

そっ、そっだよ!!なんで忘れてたの!?!今日忠告されたばかりだったのに……

早坂君にはなるべく近寄らないって決めたばかりではないか!

早坂君の家に行って数学を教えてもらうなんて……

ジ・エンド。

おそらく社会的に抹殺されることはまず間違いないだろう。

あの集団に取り囲まれた自分を想像し、全身に寒気が走っていく。

絶対に、ムリ!!!あ、ありえないっ!!!

これは何としても断んなきゃダメだ!!!

よ、よしっ！

勇気を振り絞って、私は言葉を発した。

「あの　　！」

「言っとくけど、お前に拒否権はないから」

ドン！ と大きな衝撃音が胸に響いた。先手を打たれて無情にも告げられたのはきつぱりとした遮断の言葉。

呆然として早坂君を見ると、早坂君は微笑んで言う。

「こんな時間まで付き合ってやって、しかも俺が教えてやるっていうのにまさか断るわけがないよな？」

目の前にはドス黒いオーラを放っている魔王と呼ぶにふさわしい笑顔。
顔。

くらりと目の前が真っ暗になるような思いだった。

世界の終焉を告げる鐘がどこか遠くの方から聞こえてくるような気がした。

第26話「忘れ物と残したもの」

まるで霧がかかったような葵衣のもやもやとした心情とは裏腹に、
皮肉にも空は

「もう梅雨明けなのか？」と疑いたくなるほど見事に雲一つない綺
麗な水色に染まっていた。

渡り廊下を歩いていた葵衣はそんな景色を眺めながら、小さくため
息をこぼした。

はあああゝ……………

一体これからどうしたらいいんだろっ？

いくら悩んでもあれから答えを出すことが出来なかった。

いや、いくら考えたところで私に決定権など端ハナからあるわけ
がないのだけど…。

口を挟む隙もなく、彼にそうきっぱりと宣告されてしまったことに
抗えるわけもなく……………

「はあああゝ……………」

口から出てくるのはもはやため息でしかなかった。

すると隣を黙々と歩いていた恵理が堪り兼ねたようにいきなり

「暗いっつっ!!！」

と廊下の真ん中で大声を上げた。

その声に驚いて、すれ違っていた生徒たちが目を丸くして一斉に振り返った。

それはもちろん私も例外じゃなく ……

「え、恵理？どうしたの？」

慌てて尋ねると、正面を見据えていた恵理の目がぎろりとこちらを睨みつけてきた。

「どうしたの？じゃないわよ！寧ろ、こっちの台詞よそれは！なんでさっきからそんなに辛気くさいの？折角晴れたっていうのに、アンタがそんなんじゃこっちまで気分が重くなってくるじゃない！」

「い、ごめんなさい……！」

ああ……またやっちゃった……

恵理が隣にいるのに自分の世界に入って勝手に暗くなって……自己嫌悪で胸がいつぱいになる。

「……で？」

「え？」

「え、じゃないわよ。そのアンタを辛気くさくさせてる原因は一体なんなのかって聞いているの」

恵理の真剣な、そしてどこか気遣うような瞳にじーんと一気に胸が熱くなった。

てっきりこんな自分に呆れて怒らせちゃったかと思いきや、態度に

はあまり出さないけれどなんだかんだ言って心配してくれているのだ……。
だけど、まさかその原因が早坂君だなんて口が裂けても言えるはずもないし……

「う、ううん……えっと、もうすぐ……ええーと、なっ、夏になっちゃうなって!」

「…は?」

ぽかんとした表情を浮かべて、恵理が動きを停止させた。

うわぁ　　!!

どっどっしよう!! また何も考えずに変なことを言っちゃった……!

苦し紛れのつもりの言い訳が、これでは全然言い訳になってないではないか!

「夏?なに、アンタ夏が嫌いだったの?」

そんなの初耳なんだけど、と怪訝そうに尋ねてくる。

で、ですよね……

恵理にそう言われて思わず頷いてしまいそうになった。
だって自分でもそんなの当然のことながら初耳なのだ。

「えっと……き、嫌いっていつか今の時季よりは断然す、好きなんだけど……えっと……でも、暑くなっちゃうのは嫌だな、と思ひまして」

今度こそちゃんと言い訳になっているのか？という疑念を胸に抱えつつ無理に笑顔をつくってにっこり笑ってみせると、恵理の眉間にぎゅっとしわが寄る。

「確かに私も暑いのは好きじゃないけど……って、まさかアンタがため息ばかりついてたのってそんな理由で？」

本当は違うのだが……

申し訳なく思いつつ首を縦に振ってみせると、恵理は呆れたように息を吐き出した。

「はあ……、さすがというか何というか……。」

「う、うん。ごめんね心配かけちゃって……。」

「いいわよ別に。今に始まったことじゃないんだし……。」

恵理が苦笑まじりに笑って言う。

「それよりも早く行かないと売り切れちゃうわよ？男子たちに全部とられるわけにはいかないんだから。」

そ、そうだった！

そもそも今廊下を歩いているのは、私がパン販売に行くのに恵理に付き合ってもらっているからなのだ。

「次の5限は体育だから早めに食べ終えて更衣室に行かなきゃならないし……。しかも今日はマラソンだっていうから、あんまりギリギリに食べてもわき腹が痛くなるだけよ。」

「マ、マラソン!？」

マラソンってまさか10周マラソン……!？

あの校庭の長いトラックをこれから、しかも昼食のあとに走るとい
うのか？

「そうよ。聞いてなかったの？今朝、体育委員が言ってたじゃない。
でも10周走り終わったらまた体育館でバレーみたいだから、きつ
とすぐに終わるわよ……ってほら！着いたわよ」

恵理の言葉につられて視線を正面に向けると、すでにパンが販売さ
れている前には人ばかりが出来ている。

慌てて列の最後尾に並び売れ残っているパンを眺めながらも、意識
はすでに5限に飛んでしまっていた。

さ、さいあくだ……

ただでさえ体育は苦手だというのに、追い討ちをかけるようにマラ
ソンとは……

普段真面目な生徒である葵衣が保健室でサボってしまおうかと真剣
に考えるほど、葵衣にとってマラソンは昔から大の苦手な種目だっ
た。

玲ちゃんが朝練でグラウンドを走っている姿を教室の窓から眺めて
いてもすごいなあとただただ感心するだけで所詮、他人事でしかな
かったのに……よもや自分が走るようになるうとは。

もう、やだ……

泣きたい……

早坂君に、マラソンに……頭が痛くなってくるほど問題が山積みである。

葵衣は誰も近寄れないぐらいどんよりとした空気を背負ったまま、無意識のうちにまた小さくため息をついていたのだった。

「はああくっ！疲れたあ……もうさっそく足腰筋肉痛だよ！」

「確かに……マラソンやるだけで疲労感が全然違うわ」

「……………」

「ってというか、玲。アンタ、化け物？」

恵理と由里香と私のぐったりとしている様子を見て、玲ちゃんは隣で苦笑いしている。

ホントに、さすが玲ちゃんというか……

あれから昼食後に行ったマラソンは吐いてしまいそうになるくらい本当にキツイものだった。走り終えたあとなんて、本気で地獄を垣間見たような気がしてならなかったし……。何人かの生徒たちも途中で気分が悪くなって保健室に行ってしまった、運動音痴の私がここにこうやって無事に（あまり無事じゃないが）立っているのはもはや奇跡としか言いようがない。

なのに、ほとんど女子たち全員がマラソンで疲れはてて全くバレーの練習にならなかったにもかかわらず、唯一玲ちゃんだけが走り終えたあと男子並みに平然としていたのだ。その様子には、体育の教師も思わず目を見張ってしまったほど。

だから 化け物 は言い過ぎにしても、恵理の言葉には頷けるものがあった。

「男子なんてホントに驚いてたよねえ。特にあいつ、今井だっけえ？あの顔はまじで傑作だった！」

何かを思い出したかのように由里香がぷぷつと吹き出した。

玲ちゃんも「あー…」とは呟いているが、なんとも微妙そうな顔をしている。

「いまい……………」？

話からして同じクラスの子、かな……………」？

「あの、今井って……………」

「あーハイハイ。葵衣のことだから今井が誰か分かんないのね。前聞いたときですらなぜか地味軍団しか名前が出てこなかったくらいだし……………」今井っていうのは……………」うーん、まあ一言で言っちゃえば玲のファンよ！」

「ファン？」

「ちよつと、由里香！」

得意げに言う由里香に、クールな玲ちゃんが珍しく焦ったような声

で制止しようとするが、由里香はさらっと流して話を続ける。

「つまりは玲にベタ惚れなわけ。これはもうクラスでも公認の事実よ？今井はさ、ちよつとでも格好いいところを玲にアピールしよう」と毎日奮闘してるのに、当の意中の相手がこんなに格好いいんだもん。そりゃあ男としては落ち込むよねえ」

「ゆ、ゆりか!?!」

玲ちゃんの顔は今にも沸騰しちゃうんじゃないかってぐらい真っ赤になっていて、いつもの玲ちゃんからは想像つかないようなそんな様子が可愛くて私はつい笑ってしまった。

そっかあゝそうだよな。

玲ちゃんにファンがたくさんいる事はもともとから知っていたけど、玲ちゃんはこんなに格好よくて可愛いんだもん。そりゃあ、その今井君って男の子も好きになっちゃうに決まってるよ!

「はいはい〜照れちゃって可愛いなあ、玲は!」

由里香はニヤニヤしながら、手にしていた体育館履きの入った袋でバシツと玲ちゃんの背中を叩いた。その瞬間「うわっ」と叫んで玲ちゃんが吃驚したように由里香のほうを振り向く。

「ちよつ……由里香!?!」

「このおーっ!羨ましいぞ、玲!」

そんな二人のやりとりを笑って見ながら、ふと何か忘れているような気がして首を傾げた。

あれ……？
なにか、わたし忘れてる……？

「…あっ！」

自分の手のひらをじっと見つめて、その瞬間急に思い出した。

（く、靴がない！！）

ど、どうしよう…！！

体育館履き、体育館に置いて来ちゃった……！！

「葵衣？どうかした？」

恵理が私の様子に気がついたのか、足を止めて尋ねてくる。

「ごめんっ！体育館に忘れ物して来ちゃった……！さきに戻ってもらってもいい？」

「え、ちよっ……葵衣！？」

「すぐ取ってくる！！」

恵理の呼びかけを背にして、私は慌てて体育館に向かって走り出した。

* * * * *

え〜つと……どこに置いといたんだっけ……。
確かこのあたりだったような気が……

体育館の靴はこの辺りをきよろきよろと見渡すと、端っこに無地の袋があるのを発見した。中から靴をとりだして名前を確認すると、確かに 白崎葵衣 と明記されている。

あ、あつたあ〜!!

袋を腕に抱えてほつと一息つく。

もしもなかったら……と不安だったのだが、そんな心配も取り越し苦勞に終わったようだ。

体育館履きは以外にも値段が高かったりする。しかも最近では、違ったメーカーのものに変えたとかで今までのより更に値が張るとか……。
もしこのまま見つからなくてもう一足買わなきゃならないなんてことになっていたら、かなり痛い出費であつたに違いない。
本当にあつてよかった……。

「よし……戻らなきゃ」

顔を上げてそのまま体育館をあとにしようとしたその時、扉の奥から小さくだがボールが弾むような音が聞こえてきた。

あれ……？

誰がいる……？

早く戻らなければいけないことは分かっていたが、なんだか気になつてそつと窺うように扉を開いた。

「 うん、正解 俺の名前、覚えてくれたんだね」

満足そうに微笑んだ顔を見て、名前を間違えずに言えたことに小さく胸を撫で下ろす。

はあ……

なんで自分は人の名前、特に男の子の名前を覚えるのがこんなに苦手なんだろう？

「にしても白崎さん、こんなところでどうしたの？もしかして忘れ物とか？」

「う、うん。靴を忘れちゃって……」

「そりゃ災難だったな。で、見つけられた？」

こくりと頷くと、良かったねと芳沢君は笑って言ってくれた。

「……………」

あれ……………？

今……………

芳沢君が陰になっていてほとんど見えてなかったけれど、芳沢君の肩の上の隙間から見えるゴールのネットが動いたような気が……
そつえば芳沢君はここにいるのにボールの音だつてさつきから止んでない……

その事実気づいた瞬間、悪寒が稲妻のごとく背筋を走った。

一瞬にして脳裏を掠めていった自分の考えを、頭を振って思いつき
り否定する。

ま、ま、まさかそんなわけがない……！
そんなタイミングよくいるはずが

「おい、健人！そろそろバスケやめねーと次の授業始まるぞ！」

ぴきつと体が固まった気がした。

け、ん、と……？

芳沢君の体がふと横にズレた瞬間、邪魔していた壁がなくなり二つ
の視線がかち合った。

獣のような冷たくて鋭い眼差しに葵衣の体は金縛りにあったように
動けなくなる。

はっ、早坂くん………！！

今にも逃げ出したくなる衝動。これはもはや野生動物の勘として本
能的に働いたものに違いない。

明らかに不機嫌そうな表情で早坂君はじっとこちらを見つめている。

「おい、健人？」

芳沢君もいつもとどこか違う彼の様子に不審そうに尋ねるが、決し
て視線が外されることはなかった。その強い視線に次第にがくがく
と足が震えてくる。

だめ……………！
やっぱりこわいつ……………！！

次の瞬間。

葵衣はその場から全力で逃げ出していた。

「えっ！？　白崎さん！？」

驚きのこもった芳沢君の声にも答えず、全力疾走で走り続ける。その速さはマラソンの後だとはとてもじゃないけど思えなかった。運動音痴であるはずの私の中で最速とさえ言えるかもしれない。

だけどそんなことにも気づかないほど、頭の中は恐怖と混乱に支配されていた。

そう。

この時とった自分の行動がどんな結果を招くことになるのか考えもせずに……………

頭、痛くなってきた……

やってしまったことは取り戻せない。

けれど、あの時は本気で怖かったのだ。今だって瞼マブタに焼き付いて離れない。

あの鋭い視線に冷たい表情……

見た瞬間、体が凍りついた。彼に纏わりつく重い空気がひしひしと体に伝わってきて、恐怖のあまり耐えられなくてつい逃げ出してしまったが……

なにかまたやらかしてしまっただらうか……無意識に……

はつきりとした確信はないけど……けど早坂君、怒ってたよね？

だとしたらなにが早坂君の怒りに触れちゃっただらうか……もしかして昨日、返事をするのを私が渋っていたから……とか？

今日だってこれから一体どうなってしまったんだらう？

早坂君の家で勉強を教えてもらっ約束……

確かに昨日約束してしまっただけれど、細かいことは何一つだって決まっていなかった。

まさか学校から一緒に家に向かうなんて天地がひっくり返ってもありえないし……

かと言って早坂君の家の前で待っているわけにも……

今この状態で早坂君に会うのは非常に気まずい。考えるだけで怖くて泣きそうだ。

でも約束をすっぱかしてしまったら、それこそどうなるか分からないし……

う、うわーん！！！！
もう、どうしたらいいの？

教室掃除の係の人の邪魔になってしまうので、いつまでも席に
ているわけにもいかず、とぼとぼと校門まで歩き始める。

しょうがないよね……校内で人気者の早坂君に私が話しかけたりな
んかしたら、リンチになるのは確実だし……
とりあえず一回家に帰ろう。それから様子をみて考えるしかない。
それに……もしかしたら早坂君も忘れてるかもしれないし。

自分を納得させるように一人で「よし」と小さく頷くと、私は駅へ
と足を向けた。

それは改札を通り抜けて、駅の構内から出たときのことだった。
改札の脇の壁に寄りかかるようにして立っている、背の高い一人の
男子生徒。

人目を避けるように隅のほうにいるにもかかわらず、彼の人並み外
れた美貌に惹きつけられ、たくさんの視線が集まっていた。

その姿を目にした瞬間、私は咄嗟にぱつと背を向けた。
理解不能な情報を猛スピードで頭の中で解析していく。

い、いまのはなに……？

まぼろし……幻だよね……？

は、走りすぎて目も疲れちゃったのかなあ？

うん、そうに違いないよね！はは……

その時。

急に「ゾクッ」と背筋が震えた。

周りの空気の温度が信じられないような速さで急激に冷えていく。

どくどくどくどくどく……

体を硬直させたまま、激しい鼓動だけが胸の中に響き渡る。

背中に痛いぐらいに感じるのは、突き刺さるような強い視線。

振り返っちゃいけない…振り返っちゃいけない…と警鐘がうるさいぐらいに頭の中で鳴り響いていく。

鞆を右手にぎゅっと握り締めて、俯く。

だらだらと大量の冷や汗が額に浮かぶのを感じた。

どくどくどくどくどく……！！！！

緊張のあまり視界が涙でぼやけていく。

そうこうしているうちに、規則的な足音がだんだんとこちらに近づいてきた。

そして、真後ろでその音はピタッと止む。

「！！！」

呼吸が止まったような気がした。

その瞬間、左腕を強く掴まれたかと思うとぐいっつと体を反転させられる。

「あせ」

バランスを失って転びそうになるのを何とか踏みとどまる。驚いて顔を上げるが、それを目にした途端、顔がひきつった。

ひ、ひええっ……………！！！！

「は、早坂くん……………っ」

まさに彼は「不機嫌」そのものだった。

あの悪魔の微笑みですらどこにも見当たらない。

無表情であるがゆえに、彼の精巧な顔立ちがより一層際立っているが、今はその美しさが何か不吉なものを象徴している気がしてならない。

淡い期待ががらりと虚しくも目の前で崩れ去っていく。

目を見たら最後だと分かっていたのに……………

視線が絡まると、捕らえられてしまったかのように視線がそこから動かせなくなってしまった。

「……………っ…あ……………えっ……………」

だめだ。

声がどうしても震えてしまう。

すると、早坂君はふっと口元を緩めた。

そして抑揚のない、淡々とした声で告げる。

「……………なあ？なんで今日逃げたんだ？」

「……………っ！！」

「俺のことは無視しておいて直樹とは楽しそうに喋りやがって……随分偉くなつたもんだな？お前も」

「そつ、そんなつもりじゃ……！」

「直樹」つて芳沢君のこと……だよな？

た、たのしそうつて……芳沢君とはあの時たった二、三言しか言葉を交わしていないのに……

「ふーん？そんなつもりじゃなくても、こっちはそれなりに傷ついたらんだけど？」

「し、しめ……」

「責任とれよ」

「え？」

目を丸くして聞き返すと、左腕を掴んでいる手の力がコモ籠る。ばくばくと心臓の暴れまわる音が耳にまで響いてくる。

な、なんだか……

どうしようもなく嫌な予感がするのは気のせい……？

早坂君は体を屈める様にしてわずかに顔を近づけると、囁くように低い声で言った。

「責任取れって言うてんの。俺を傷つけたんだ……それなりの代価は払ってもらつぞ」

第27話「開始宣言」(後書き)

第28話「見間違い？」

き、き、来ちゃった……

目の前の煉瓦造りの建物を見て、それから落ち着きなく周りをきよるきよると見渡す。

玄関先の鮮やかな緑が広がる庭は、マメに手入れされていることが見てとれた。

…早坂君のお母さん、がやったのかな？

そういえば早坂君のお母さんって見たことないかも……お父さんも見たことない……

どんな人なのかな、と想像しかけてすぐに頭をぶんぶんと振った。

長男「彰」、長女「小百合」、そして次男「健人」

見事に才色兼備すべて揃った、神の領域にまで踏み込むぐらいこの美しい姉兄弟なのだ。

早坂君の両親がさぞ素晴らしい人達であることは容易く想像できる。
家族全員が並んで立った^{アカツキ}暁には

「……………」

だ、だめ！

神々しすぎて脳内がおかしくなっちゃう！

訂正 想像力の限界を超えるので容易く想像できるなど言った事は戯言でした……

はっと我に返って顔を上げる。

そ、そうだ……！

それどころじゃないんだった……！！

不機嫌なオーラを放っていた彼はいつのまにか鍵を取り出して玄関の扉を開けていた。

おそろおそろ顔を上げると、早坂君は冷たい眼でこちらを見つめている。

「早く入れ」

一言そう言い放つと、早坂君は家の中へと姿を消していく。

その後ろ姿を呆然と見つめながら、思考はパニックに陥っていた。

ど、どうしよう……

完全にこれは怒ってるよね？

ここで帰ったりなんかしたら、間違いなく殺されるかも……

ううっ……、やっぱりあがるしかないのかな？

頭を捻って必死に考えるが他に選択肢が思いつかず、結局家に上がる羽目になってしまっほか道はないらしい。

しぶしぶ玄関で靴を脱いで上がると、ちょうど2階から降りて来た小百合さんと鉢合わせになった。

わあ……相変わらず綺麗だなあ……

今日の小百合さんは長い茶色い髪を結わずにそのまま垂らしていて、そこらへんのモデルなんか比べ物にならないほど美しい姿に思わず見蕩れてしまう。

小百合さんは一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに満面の笑顔で出迎えてくれた。

「きゃああ〜！！葵衣ちゃんじゃないっ！！」

前に初めて小百合さんと会ったときみたいに、ぎゅっと抱きつかれる。

その瞬間、甘い良い香りが漂ってきて女の人なのに妙にドキドキしてしまった。

「お、お久しぶりです、小百合さん」

ぎこちなく笑みをつくると、小百合さんは何故かはっと息を呑んだように見えた。

「ああん、もうっ！可愛すぎよ、葵衣ちゃん！！」

「え、え？」

そんなわけない。

むしろ可愛いのは貴女ですって……

相変わらず、小百合さんの目のおかしさも健在のようだ。

「今日はどうしたの？まさか私に会いに来てくれたとか？」

「え、えつと……」

ここのところ色々あつて頭から抜けていたけど、小百合さんは私の尊敬する作家「天音夜椰」さんなのだ。

今でも信じられないような衝撃……

だってこんな身近に、しかもこんなに綺麗な人だったなんて驚かない方がおかしい。

実はあれから小百合さんに一度で良いから本話を聞いてみたいなあゝなんて密かに図々しくそんな事を考えたりしていたし……

すると、いきなり背後から声が聞こえた。

「……んなわけないだろ。暇な姉貴とは違って、勉強すんだから邪魔するなよ」

吃驚して後ろを振り返ると、そこには早坂君が立っていた。

「ひ、ひまつ!? アンタ、それ誰のこと言ってるのよ!!」

「姉貴」

「なんですってえ!? これから出版社に打ち合わせに行こうとしてるお姉さまに向かってその台詞!?!」

「ああ。あの担当の人、この前姉貴がどっか遊びに行ってる間に姉貴が全然仕事しないって散々喚いてたし」

「都子ミヤコめえ……人のいぬ間に」

小百合さんはそう言って、悔しそうに唇を噛み締めている。

……もしかしてお仕事行き詰ってたりするのかな?

「……ん? って今アンタ勉強するって言った?」

「ああ」

「葵衣ちゃんど？」

「ああ」

「…アンタの部屋で？」

「ああ」

早坂君が同じ答えを淡々と返すたびに、だんだんと小百合さんの眉間にしわが寄っていく。

そしてそのまま黙り込んでしまったかと思うと、小百合さんが急に叫んだ。

「な、な、なんですって!!!?」

「五月蠅い。早く仕事行けって」

早坂君が面倒臭そうにため息をつく。

そんな早坂君の態度が気に入らなかつたのか、小百合さんの表情がより一層険しくなつた。

「ふざけんじやないわよ!!このまま私が見過ごして仕事に行くとも思ってるの?」

「ふざけてない。いいからさっさと行けよ。行かないなら今すぐあの担当の人に強制的に姉貴を連れて行くよう電話するけど?」

「なっ……！だって彰も今日はいないのよ!？」

「知ってる」

即答する早坂君の言葉を聞いて小百合さんは眉間にしわを寄せたまま、また黙ってしまふ。

小百合さんは気持ちを抑えるかのように目を伏せていたが、数秒していきなり大きく目を開いた。

そしてそのまま、「ニヤリ」と唇を上げる。

「じゃあ、私は行ってくるわ」

え……ええっ!？

今の話の流れでどこからそんな、と思うような言葉に仰天している間に小百合さんはいつのまにかヒールの靴を履き終えている。

ええ？

だ、だって、よく分からないけど、小百合さん出かけることを渋っていたのになんで急に……？

早坂君も驚いたのか、不審そうに小百合さんのことを見つめている。

「さ、小百合さん……?」

「葵衣ちゃん、ごめんね〜！残念だけど、お話はまた今度しましょ。私のメアド渡しておくから今日の夜、メール送ってくれる?」

そう言って小百合さんは白いオシャレな鞆の中からお財布を抜き出し、そこから名刺サイズの白い紙を私にくれた。

そこには綺麗な字で小百合さんの「早坂 小百合」という文字と携帯のアドレスと番号が載せられている。

さっ、小百合さんの!?

いいんだろうか私がこんなのを貰ったりして……

私が頷くを見て、小百合さんは満足そうに「楽しみにしてるわね

」と微笑むと早坂君に向き直る。

小百合さんは微笑を深くして言った。

「……ふふ 健人、覚えてなさいよ」

……あれ?

今、なんか

一瞬、小百合さんの微笑んでいる姿がああ早坂君の「悪魔の微笑」とかぶって見えてしまった。

ぱちぱちと瞬きを繰り返すと、小百合さんはいたずらっ子のように笑っている。

どう見ても「悪魔の微笑」ではない。

やっぱり私の見間違いだっただのようだ。

そんなわけないよね……

小百合さんだもん……。私目でも悪くなったのかな?

そして小百合さんは「それじゃあ葵衣ちゃん、またね」と言い残して嬉しそうに出掛けて行ってしまった。

「行くぞ」

突然かかった声にびっくりして思わず振り返ると、早坂君はすでに階段を上り始めていた。

え、えつと……

こ、これは、つまり、ついて来いってことなのか……？

どうしたらいいのかわからず戸惑っていると、「何やってんだ。早くしろ！」と怒鳴り声が2階から響いてくる。

ひっ、ひええええ〜！！！！

私このままいくと、確実に殺される気が……！！

凄まじい気迫に逆らえずビクビクしながら二階に上がると、早坂君は無言でこちらをじろりと一睨みしてから「早く入れ」と言い、私は手前にある右側の部屋に押し込まれた。

「適当にそこらへんに座ってる。お茶でいいか？」

早坂君にそう尋ねられ、反射的に「は、はい」と頷く。

あ、あれ……？

ちよつと機嫌が直ってる……？

「教科書とノート、机に出しとけよ」

早坂君はそう言い残して部屋から出て行ってしまった。

な、なんだあ……
思い過ぎしか……

ほっとして、ゆっくり安堵の息を吐き出す。

よ、良かった……。。

体育館の件でとてつもなく恐ろしい仕返しがされるのではないかと心配だったのだが……どうやら無事に済みそうだ。

私は抱えていた鞆を床に下ろし、数学の教科書とノートを取り出してから、改めて部屋の中をゆっくりと見回した。
安心した途端、急に緊張感が舞い戻ってくる。

ここ、早坂君の部屋だよね……？

白と黒で統一された、学生にしてはシンプルな部屋。物数が少なくすっきりと片付けられている。広さは……8畳ぐらいだろうか？
置かれているものといったら、中央に位置している大き目のテーブル、ベッド、テレビ、それから……

「あっ」

壁側にずらりと並んでいる本棚を見て、思わず小さく声が漏れてしまった。

う、うわあああ……！！

すっ、すごい量の本……！！

まさか早坂君、この本をぜんぶ……？

隙間なくびっしりと埋められている本棚に絶句したまま、貼り付い

てしまったかのように視線をそこから動かせなかった。
慌てて立ち上がった、本棚に駆け寄る。

「わあっ、コナンドイルにエドガー・ウォーレス、サンパー……あ
っ！フレッチャーマである！！」

本棚には探偵推理小説を初めとし、様々なジャンルの著名な作家達
の名前が連なっていた。

店頭に置いてあるランキングに入っているような現代の人気小説も
あれば、古典文学や中には到底私には読めなさそうな資料も混ぜつ
ている。

うわあああ〜！！

すごい、すごい、すごすぎる……！！！！

これだけの本を読んでいるのなら、早坂君の異常なほどの頭の良さ
も納得できる。

私は一冊ずつ確かめるように順番に見ながらも、すっかり体は興奮
で火照ってしまった。緊張なんて初めからなかったかのように、
とつくにどこかへと吹き飛んでしまっている。

「…あ、でもさすがに恋愛小説は置いてないみたい」

当たり前か……

早坂君がそんなの読むはずがないよね……まあ、私もただけど。

早坂君が恋愛小説を読んでいる姿をつい想像してしまい「ぷ」と吹
き出す。

早坂君に恋愛ものってちょっと……いや、かなり似合わないかも……

読むときとか一体どんな顔して読むのかな……
やっぱり無表情とか？うわぁ〜見てみたい！！

「随分と楽しそうだな？」

ふふつと笑ってしまった瞬間、いつのまにかコップがのったお盆を
かかえて戻ってきた早坂君とばっちり目が合った。
笑顔がそのまま凍りつく。

「ハ、ハヤサカクン……」

突然のことだったので、思いつきり声が裏返ってしまった。

うわーん！ばか！私の馬鹿っ！！

こんなんじゃないかにも「動揺してます」と証言しているようなもの
じゃないか！！

背中に汗が伝っていく。

い、いいいつのまに……！？

いつから……！？一体いつからいたの！？

まさか、独り言もぜんぶ聞かれてたとか……！？

「なあ？なに想像して笑ってたんだ？言ってみろよ」

早坂君はお盆をテーブルに置き、口元に笑みを浮かべて聞いてくる。

ひよええええ〜！！

目が……目がまったく笑っていないんですけど！？

私になにを考えていたのか、早坂君は全てお見通しであるに違いない。

し、知ってて聞くなんて……い、いじわるだ……！

「あ、その、えっと……何でもな」

「言え」

でた……！言い切り！

もはや完全に目の前には悪魔が降臨しているように思えてならなかった。絶対に私があたふたしている様子を見て楽しんでる……！

「え、えっと……その、ほ、本見てたら、すごい量でびびっくりして、そう！あの、嬉しくなっちゃって」

「……お前さ、そんな言い訳で俺に通用するんでも思ってるのか？」

「うっ……」

「勉強する前にいろいろと叩き直してやる必要があるみたいだな。けどその前に……」

「へ？あ、あの……？早坂君？きやつ……」

いきなり体がふっと浮いたかと思うと早坂君に体を抱き上げられ、そのまますぐ脇にあったベッドの上にぼすつと下ろされた。

「ええっ……！？あのっ……！？」

ぐちゃぐちゃになった頭の中を必死に整理しようとしているうちに、

いつのまにか早坂君が体の上に跨るようにして乗っかっていた。
その事実気付いた瞬間、体が凍りついたように固まる。

「落とし前、きっちりつけて貰うぞ」

「…あ、へ！？お、おとしまえ？」

「ああ。忘れたなんて言わせないからな」

おとしまえ…おとしまえ…

混乱している脳で必死に思い巡らすが、ドクドクと耳元に届くほど
激しく鳴る鼓動が正常な思考を妨げる。

おおお、落とし前って……いったい何の！！？

「…あ。」

ま、まさか、あの体育館？

てつきり機嫌が直ってたと思ったのに、全然そんなことなかったの
…！？

そう思い当たった時には
すでに唇が塞がれていた。

第30話「嵐と太陽」

早坂君は眼鏡を私の顔からどけると、再び唇を重ねてきた。

最初は優しく触れ合う程度だったものが、だんだんと貪るような激しい口付けに変化していく。

「んやあつ……早坂く……っ」

体重がかかっているわけじゃないのに、体を真上から押さえつけられているせいで身動きすら出来なかった。

それでも何とかして早坂君の胸を両手で押して逃れようと試みるが、そんな私の様子に全く構うことなく早坂君は唇を押しつけてくる。

かちこちに固まっていたはずの体から徐々に力が抜けていき、抵抗していたはずの腕の力も弱々しいものになってしまう。

だ、だめっ……！

こんなの……っ！！

恥ずかしさのあまり本気で死にそうだった。体は異常なほど熱いのに、妙にこの事態を頭の片隅で客観的に捉えている自分がいて、こんな自分がキス というものをしていくという事実には啞然とした。

わけの分からない感情に呑み込まれていく自分が怖くて、ぎゅっと目を瞑る。

「……目、開けるよ」

唇がやっと離れたと思った瞬間、上から低い声が降ってきた。

私はその言葉に抵抗するように小さく首を何度も振った。顔を両手で覆うようにして横にそむける。

こんな自分が嫌で恥ずかしくてたまらなかった。

早坂君はきつといつもの様に平然としているのだろう。顔色一つ変えず何事もなかったかのように。

なのに、それに比べて自分は今絶対にみっともない顔をしているのだ……

早坂君にそんな自分を見られたくなかった。自然と瞼の裏に涙が浮かんでくる。

「葵衣！」

苛立った声で名前を呼ばれ、仕方なく私は目を開けた。

もうやだあ……

なんでこんな事に……

早坂君の顔が思った以上に近かったことに驚き、思わず体をビクリと震わせる。

う、うわあああ

ちっちち近いっ……！！

一気に顔が熱くなっていく。

冷静さを完全に失った私は、もちろんパニックに陥った。

とんでもない現実に瞼に溜まっていた涙が溢れてきそうになる。

「くそっ……」

早坂君の吐き捨てるような呟きに、反射的に早坂君の顔に視線を向ける。

し、しまったあ……!!

目を合わせないようにしていた努力も虚しく消え去り、早坂君と視線がばつちりと合ってしまった。一度目が合ってしまったら終わりだと経験から何度も学んできたはずなのに……

だがなぜか早坂君は視線を合わせたまま動きを止めている。

あ、あれ……？

早坂くん？

「どうし ……んっ！」

言葉を最後まで言えずに、なぜかまた唇を塞がれる。突然のことに体が再び固まった。

えええええっつ！！！！！？

なっなんで!？

し、しかもさつきよりスゴい気が……

目を見開いたまま対処することができずにあたふたしていると、ふと異変を体を感じた。

え………？

疑問に思っただけ自分の体に目を向けた瞬間、体内から血の気が一気に引いていく。

自分の胸に添えられているのは

……早坂君の手？

……………。

「うぎゃ

っっ！！！」

思いつきり早坂君の体を押し退け、その反動で私はベッドの脇へと転がり落ちる。

と同時に、

ドドドドド…ガタンッバタッ、ガコッ、ダダダダダ…ドントッ
ッ！！！！！！！

「健人おおお

！！！！！！」

勢いよく部屋のドアが開かれ、誰かが部屋の中へドストドスと猛突進してきた。

そして早坂君の胸倉をつかむと、大声で怒鳴りつける。

「てめえ　っ！！お前、なに他人様のお嬢さんを襲ってやがるっ

っ！！！！ふざけんじゃねえぞ！！！！」

「っ！？なんでお袋がここにいんだよ！？」

「バーカ！んなの小百合に聞いたに決まってるだろーが！すべててめえの思い通りに事が運ぶと思うなんて大間違いなんだからな！！」

ふんつと鼻を鳴らして、その人は勝ち誇ったように笑う。

した。

「アンタが葵衣か？」

「はっ…はい！」

そう言つてこくこくと頷いてみせる。

直視できないほど眩い姿に目がくらみそうだった。

「おい…なんで呼び捨てにしてんだよ」

不機嫌マックスの早坂君の声……

早坂君のお母さんは早坂君に目を向けて微笑む。

「あーあー。男の焼きもちほど見苦しいものはねーなあ？しかも女に焼くなんて馬鹿じゃないのか？」

「……男みたいなものだろ」

早坂君がぼそつと呟く。

「なんか言つたか？」

「言つてない」

うわわわ……

な、なんか冷戦なみに激化しているよーな……

小百合さんとのやり取りに比べて、はるかに凄まじく「ピリッ」とした雰囲気息が詰まりそうだった。

「大体話によれば今日は勉強会なんだよな？なのに何で教科書もノートも開かれてないんだろ？なあ？いやあ、実に不思議だなー」

早坂君のお母さんは腕を組んで首を傾げるようにしてみせた。

途端に早坂君を取り巻く空気が、恐ろしいほど怒りに満ちていく。

「しかも部屋から悲鳴は聞こえてくるは、部屋に入ればベッドが乱れているは……てめえはこの純粹なお嬢さんに一体なんの勉強を教えようとしてたんだ？」

「お袋っ！」

早坂君が怒りを表情に露わにして怒鳴った。

見たことのない早坂君の姿に吃驚していると、早坂君のお母さんは早坂君を無視して私の方にいき直った。そして苦笑しながら早坂君のお母さんは困ったように頭をポリポリとかいている。

「とまあ、うちのバカ息子は…あつ、どっかのバカが変な嫉妬してるから葵衣ちゃんって呼ばせてもらうな？んで、とにかくこの通り葵衣ちゃんに本気みてえだから、今日のことは大目にみてやっつてな？」

「…へ？」

「おいっ！…！」

ほ、本気って……

一体何のこと…???

「だいじょーぶダイジョーブ！アタシがいる限り明日から手は出させないようにするから。どーせ明日もやんだろ？勉強会」

や、やるのか…？

訴えるように早坂君を見つめると、早坂君はそっぽを向いたまま不機嫌そうに頷く。

や、やるのか……

がっかりしたような嬉しいような変な気分になる。

つて、あ、あれ…？

なんか早坂君の顔がちよつと赤くなってるような気が…つてそんなわけないか……あの早坂君だもん。きつと光の加減でそう見えちゃっただけだよな。

クスクスと忍び笑いが聞こえてくる。

「あーウケる！こりや噂通り鈍感！我が息子の恋路も前途多難だな、オイ。せいぜい頑張れよー健人！！まあ精一杯邪魔してやるけど」

「……嫌い」

早坂君がお母さんを鋭く睨みつけるが、早坂君のお母さんはそれに動じることもなく、なぜか笑い続けている。

やっぱりさすが早坂君のお母さん……！！あの睨みを笑い飛ばすなんて……

小百合さんも彰さんもだけど、早坂家は並みの心臓の持ち主じゃないことは確かなようだ。

「おっと……！すっかり忘れてたけどアタシの名前は羽織^{ハオリ}。一応こいつらの母親やってんだよな」。あっ、アタシのこと全然呼び捨てにしちゃって構わねーから！よろしくな、葵衣ちゃん！」

この人が早坂君のお母さん……

それはまるで太陽のように眩しすぎる笑顔で。

羽織さんはそう言ってニカッと嬉しそうに笑った。

第31話「何かが変わる日」(前書き)

いつもより長くなってしまいました……(汗)
最後までお付き合いしていただけたら嬉しいです。

第31話「何かが変わる日」

羽織さんの作ったオレンジケーキと紅茶をご馳走になった。

いくらなんでもそれは図々しすぎるだろうと一度断ろうとしたのだが、羽織さんに有無を言わずリビングにまで引っ張ってこられてしまったのだ。

だが遠慮していたのも束の間、目の前に出されたものを見た瞬間あっけなく心が折れる。

うわあっ……おいしそう!!

これ、店で売ってるのじゃないんだよね!?

す、すごい……こんなの作れるんだ……

誘惑に見事に負け、おそろおそろ口にケーキを運ぶ。

口に甘みが広がった瞬間、ぱあっと一気に幸せな気分になった。

お、おいしいいいい……

柑橘系の微かな香りとケーキの甘さ加減が絶妙で、思わず頬っぺたがとろけちゃうんじゃないかと思っただくらいだ。

自然と笑顔がこぼれる。こんなに美味しいものを毎日食べれるなんて早坂君が羨ましい。

「すごく美味しいです!!今までで食べてきた中でいちばんっぐらい」

「あはは、口に合ったようで嬉しいよ。なんかそう言ってくれとすっげー作りがいがあるもんだな。ほら、健人も彰もあんま甘いもの好きじゃねえみたいだからさ。まあ、小百合だけは甘いものに目

がないけどな」

「ええっ！？そんなんですか!？」

信じられないような気持ちで早坂君を見つめる。

こゝ、こんなにおいしいものが苦手!？」

だけど早坂君は黙ったまま冷たい目を返してきただけだった。

その威圧感に1人で勝手に興奮していた自分が急に恥ずかしくなつて、しゅるしゅると萎んだ。

「1」、「ごめんなさい」

「.....なんで謝る」

「だ、だって.....なんか1人ではしゃいじゃったから.....」

「別に」

早坂君のそっけない短い返事に更に落ち込む。

や、やっぱりうるさかったよね.....

自己嫌悪の渦の中にぐるぐると入っていると、羽織さんが突然くつくつと堪えるようにして隣で笑い始めた。

驚いて顔を上げると、羽織さんは心底可笑しそうに笑っている。

「くくく.....はは!ごめんなあゝこんな息子で。あんま気にしないでくれていーぞ?どーせ拗ねてるだけなんだからさ、そこのお坊ちやんは」

「拗ねてない。適当なことを言っなよ！」

「よく言うよまったく…。女の子に八つ当たりなんて見つとも無いだけだぞ？」

早坂君は鋭い睨みを羽織さんに向けたあと、深くため息を吐き出した。

重々しい雰囲気にしたたまれない気持ちが悪ってくる。
ど、どうしよう……！！

「あゝあ、葵衣ちゃんみたいなお娘がほしかったなあゝ。こんな可愛げのない息子なんかより断然マシ！可愛いし、いい子だし、ケーキの美味しさも分かってくれるし、サイコーッッ！！」

「へ、へ？」

「なあ葵衣ちゃん、いつそのこと養子にこないか？」

「え、え？よっ、養子ですか！？」

「ああ。いや、それよりもっと良い方法があるな……」

そこで意味ありげにいったん言葉を止めると、羽織さんはニヤリと怪しい笑みを浮かべた。

「どうだ？葵衣ちゃん。健人のお嫁さんに来てみないか？」

「ぶっ！！！！うっ、ゲホゲホ……」

予想もしなかった言葉に口にしていた紅茶を噴き出しそうになって、

何とか堪えようとしたら逆に胸につまって咳が止まらなくなる。

「大丈夫か？」と私の様子に驚いた羽織さんに背中をさすられながらも、顔が自分で真っ赤になっていくのが分かった。

おおおおおおお嫁さん！！！！？

あの、は、早坂君の！！！！？

お嫁さんってつまり、その、奥さんになるってことだよね！？

は、羽織さん、冗談にしても限度ってものがありますって……！！

「す、すみません。でも、あの、ええつと、そ、その……」

うまく切り返そうとしても、上手な返事がなかなか思いつかず、そのまま言葉に詰まってしまふ。

「あはは……ごめんごめん！冗談だからそんなに慌てなくてもいい……でも、まあ、ちょっと本気だったんだけどなあ……なあ、健人もそう思うだろ？」

(！！！！！！)

なっ！！！！？

な、なななんで、そこでそんな話を早坂君に振るんですか！！！！？ぱくぱくと魚のように口を開けたり閉じたりしながら、話を別の方向へと転換させたいのに、動揺のあまり言葉が出てこない。

そんなことを言ってみろ！

早坂君のことだ。

きつと「こんなバカなやつが嫁？ふざけんな」と怒りまくるに違いない。

ああ。

清々しいぐらいの沈黙が部屋中に充満している。刺すような空気が痛い。

私は俯いたままこの状況をどうすればよいのか必死に悩んでいた。

こ、これはやつぱり今からでも別の話題を出すしか……！！
でも話題っていったって一体何が……

と、その時。

いきなり腕をとられて、勢い良く誰かに後ろへと引っ張られた。そしてそのまま、玄関へずるずると強制的に引き摺られていく。

「え、は、早坂君!？」

吃驚して名前を呼ぶと、早坂君は私の呼びかけに背を向けたまま足を止めた。

そして僅かに振り返ったその表情を目にしたとたん、体が強張る。

う、うわあああ~~~~!!

や、やつぱり、怒っていらっしやる……!!

「……もう遅いから帰れ。家まで送るから」

「え、え!？だ、大丈夫です!そんな事までして貰わなくても……!!」

もちろん、恐れ多い気持ちもあるのだが……

なにより今の早坂君と二人で帰ったりしたら、命が無事に済みそうにない。

そ、それだけは避けなきゃ……!!

「おいおい、なんだあ？もう帰っちゃうのか？…まあ、もう遅いでしょうか」

後ろからどこか残念そうな羽織さんの声が追いかけてくる。

私は申し訳なく思いつつ、ぺこりと頭を下げた。

「今日のご馳走にまでなっちゃって、本当にありがとうございまして。すぐケーキ、おいしかったです」

「いやいや、こっちこそ食べてくれてありがとな。明日もまたウチに来てくれるんだよね？」

「は…」

はい、と返事をしかけて言葉を止めた。

ちよ、ちよっと待って…そもそも今日早坂君の家に来た理由は…思い出した瞬間、顔がさつと青ざめる。

ああ~~~~っ！！

べ、勉強……！！！！

「行くぞ」

私が羽織さんに返事を返す前に、早坂君に腕を掴まれたまま強引に外に連れ出されてしまった。

玄関のドアがしまるのと同時に、羽織さんの「じゃあまた明日な」と笑顔で手をひらひらと振る様子が視界に入る。

閉ざされたドアを呆然と見つめながら、私は慌てて早坂君の方に向き直った。

「あ、あの…！早坂君、本当に送ってくれなくて大丈」

「うるさい。何か文句があるのか？」

「い、いえ！め、滅相もございません！」

まさに蛇に睨まれた蛙状態。

結局断りきれずに、早坂君に家まで送ってもらう事になってしまい、自分の行く末を案じずにはいられなかった。

時刻はすでに夜の7時を回っていた。

外はすっかり闇に包まれていて、空の月も生憎雲アイニクですっぽり覆われてしまっている。

ぽつぽつと街灯の明かりが照らし出されている道路を、私は早坂君の半歩後ろに並びおどおどしながら歩いていた。

ううう……気まずい……

早坂君の表情は周りが暗くて読み取る事は出来なかったが、怒っているのは明らかだ。

前に私がお酒を飲んで倒れちゃった時もこういう風に家まで送ってもらった事があったが、その時もほとんど会話はなかったけれど、ここまで気まずい空気ではなかった。もう今にも酸欠で倒れてしまっている。

なんで早坂君こんなに怒って…

首を傾げながら、ハッとすぐに思い当たる。

そ、そうだった！

も、もももしかしくとも

私が奥さんになるって言われたの、冗談だとしてもすごい嫌だった
……んだよね？きつと……

チクリと胸に小さな痛みが走る。

たとえ憶測だとしても、妙にリアリティーがあった。

思わず自分でもその考えに頷いてしまう。

そ、そうだよね……世間一般にみてもこんな私を誰もお嫁さんにし
たいなんて思わないよね。

私だって男だったら、自分みたいなのとは結婚したくないもん……

「ハア……」

自分で言っておいて、なんだか急に落ち込んだ。

取り柄といっても特になにもない単なる本好きの根暗女である自分
に、今更どうしようもないと分かっただけでも悲しみすら湧いてくる。
勉強だって、もともと頭がいいわけでも何でもないので。単にいつ
も必死になって勉強しているから少し出来るだけであって……
現に数学だって自分ひとりの力では全然解けない。
数学……

「……あ！」

わ、忘れてた……！

今日は本当は数学を教えてもらうはずだったのに、結局何もやらな
いまま厚かましくも何故かケーキと紅茶まで頂いて、単に早坂君に
迷惑を掛けただけではないか!!

「は、早坂君……あの、今日は本当にごめんなさい!!」

謝って済む事じゃないけれど……

私は慌てて直角に体を曲げ、早坂君に向けて精一杯頭を下げる。
早坂君は立ち止まると、私を怪訝そうに見た。

「……何が？」

「だ、だって、せつかく数学を教えてくれるって言うてくれたのに
……」

「…別にいい。それにそれは第一俺が」

「俺が？」

「……何でもない」

早坂君はどこか疲れたようにため息を吐くと、空を仰いだ。

うっ……

や、やっぱり迷惑だったよね……

しゅんと頂垂れていると、いきなり「ペチッ」と良い音を立てて額
を叩かれた。

びっくりして早坂君の顔を見上げると、そのまま髪をくしゃくしゃ
と掻きまわされる。

「バーカ。明日からみっちり教えてやるから気にするな。まだ試験まで日にちはあるんだし余裕だろ」

気遣いが籠った優しい目に、胸がきゅんと締め付けられた。

きゅ、きゅん？

一体どうしたというんだ、自分は??

ワケの分からない感情に疑問符が飛び交う。

なぜだか早坂君の目を直視することが出来なくて目を泳がせていると、いつのまにか私の家の前までたどり着いていた。

「じゃあ、明日な。学校終わったらすぐに俺の家に来いよ。もしまだ俺が帰ってきてないようなら、先に上がってていいから」

「あ、あの、本当にいいの？早坂くん、迷惑じゃない？」

「それ」

「え？」

そ、それ？

何の事を指しているのか分からず戸惑っていると、早坂君はまた小さくため息を吐いて言う。

「お前さ、学習能力ないとかよく言われんない？“早坂くん”って呼ぶのいい加減やめろって言ってただけ。また罰でも受けたいわけ？」

「あ……」

そ、そういえば……。

気まずい気持ちを抱えてちらりと早坂君を見つめると、怒りはおさまったのか、目の前の早坂君はいつも通り意地の悪そうな目つきになぜか戻っている。

や、やな予感……

「一回言ってみろよ。お前の場合、こうでもしないと絶対呼ばないままな気がするし」

はは……

まさにその通りなので反論することができない。

私は苦笑いを浮かべつつ、危険を感じて、一歩後ろにさりげなく下がった。

「葵衣？」

絶対零度の微笑みに、逃げ腰になっていた体が凍りつく。

「呼ばないんだったらどうなるか分かってるんだろ？」「という意思が笑顔の裏に含まれているような気がしてならなかった。

だ、だめだ……！

これは呼ばなかったら確実に天国に行くことになる……！！（むしろ魔界？）

その迫力にあっけなく負け、私はごくりと唾を飲み込んで意を決した。

「け……」

早坂君にじつと見つめられているうちに、変な緊張が押し寄せてきた。体の横でぎゅっと握り締めた手は汗ばみ、心臓は荒れ狂うように早鐘をうち始めている。

しよせん名前、たかが名前なのだ……！

単に「け」と「ん」と「と」という文字をひとつずつ発音するだけですべてが終わると思えば良い。

し、しっかりするんだ、自分……！

すでに混乱しかけている頭に必死に言い聞かせる。

よ、よし！

「け…、け、けけけけけ」

「おい、何やってんだよ。不気味な笑い声みたいになってるぞ」

呆れ顔の早坂君に、羞恥のあまり一気に顔が熱くなった。

時折吹く涼しい夜風すら今の自分にとつたら何の意味もない。

え、えーい！！

もうこうなったらヤケクソだっ！！！！

「け、健人ケントくん……！！」

い、言ったあ……！！

言っただぞ、わたし！！よくやった……！！

自分を心の中で褒めちぎる。

ものすごい達成感を感じて、無意識のうちに笑顔すら浮かんだ。

私は嬉しさのあまりしばらく意識をべつの場所に飛ばしていたが、ふと何の反応も返ってこないことに気がついて、慌てて我に返った。おそろおそろ早坂君の顔を見つめる。が、私と目が合うと早坂君にそのままスツとすぐに目をそらされてしまった。

「は、はやさか」

ギロリと睨みつけられて、反射的に口を噤む。

「あ…えっと、け、健人くん……？」

「なに」

つつけんどんな返答に、肩がびくくと震え上がる。

表情の険しさに冷や汗を感じながら、おそろおそろ尋ねた。

「あの、この呼び方って、ずっと……なんですよね？」

なぜか口調まで丁寧になってしまう。

一回呼ぶだけで、かなりの神経が擦り切れたような気がした。

「当たり前だろ。学校では面倒臭いことは避けたいし今まで通りでいいけど、学校以外の場所ではそう呼べよ。……いいな？」

「は、はいっ……！」

急に声が低くなって凄みを増したため、咄嗟に上ずった声で返事をしてしまった。

早さ、け、健人君は（うう、慣れない…）私の答えに満足した
ようで僅かに口元を上げた。

「ああ…それとさっきの話だけど、別に迷惑じゃないから」

「へ？」

「迷惑だと思っようなことをわざわざ俺がする筈がないだろ。とにかくお前が気にする必要は全くないから」

「あ、はい…。えっと、ありがとうございます……」

け、健人君は、優しいから気を遣ってそう言ってくれているのだから。

躊躇いを感じないわけじゃなかったが、実際に数学のテストが危険であることも否めない事実だったので、今回だけはその好意に甘えさせてもらうことにした。

「じゃあ、俺もう帰るから」

「は、はい…。あっ、送ってくれてありがとうございます！」

ぴよこんと慌てて頭を下げると、健人君はぽんと私の頭に軽く手を乗せてから、帰って行ってしまった。

私は今の嘘みたいな出来事にしばらくぼーっとして家の前で立ち尽くしている、いきなり背後で「キキキ」と自転車のブレーキをかける音が聞こえた。

「ね、姉ちゃん」

心なしか震えているように感じる声に振り返ると、そこにいたのは案の定、祐ユウだった。

「ゆ、祐？お帰りー今、部活終わったの？今日はどうだった？」

祐はテニス部に所属している。ついでに祐は私と同じ学校の生徒だ。ただで中学生と高校生は校舎が別になっているので、そう滅多に学校では会うこともなかったりする。

「そんなの今はどうでもいいよ！なあ、姉ちゃん！今のってあの早坂さん”だよな！？”」

「えっ！？ゆ、祐、見てたの！？」

い、いつから！？

驚いて祐を見ると、祐は仰天したように体を反り返らせた。

「見てたって…う、嘘だろ！マジであの早坂さんなわけ！！？」

「え、え〜っと…有名なの？祐たちの間でも」

「あつたり前じゃん！！だってあの容姿だぜ！？勉強もスポーツも出来るし、性格もクールでカッコいいしさ。うちのクラスの女子だってたまに教室から早坂さんの校庭にいる姿を見ただけで大騒ぎしてるぐらいだし！男の俺でも憧れるよ」

そ、そんなに人気なのか…

改めて健人君の凄さを知って吃驚する。

比較的いつも落ち着いている祐でさえ、めったに見られないぐらい興奮しているのが見てとれた。

「なんでそんな人と姉ちゃんが一緒にいるんだ!?まさか友達!？」

「う、うん…えくと、そんな感じかな？」

自分でも「友達なのか？」と疑問に思いつつ、曖昧に返事を返す。
知り合いぐらいにしか思われていないような気もするが……

「すげ〜…うわー姉ちゃんを尊敬するわ。しかも、あの早坂さんが姉ちゃんを家まで送ってくれたとかじゃないよな!？」

「ち、違うよ……たまたま会っただけで……」

気づいた時には違う言葉が口から出ていた。

罪悪感を感じつつ微笑んで見せると、祐はほっとしたように一息ついた。

「だよなあ〜!!あの早坂さんが女の子を家まで送るなんて聞いた事がないし。ああ、びっくりした。もしそんなことあったら前代未聞すぎて他の女の子たちとかヤバイことになってるよな」

祐は苦笑しながらそう言った。

言われて初めてその事実が付き、動揺しまくっていた私は「ソ、ソウダネ…」と思いつきりつろたえた返事しか出来なかった。

お風呂に入って髪の毛の水分をタオルで拭き取りながら自分の部屋

に戻ると、私はそのまま「ボスツ」とベッドに倒れこんだ。
シートから心地よい洗剤の香りがする。

「はあああああ~~~~」

さつきから何度目になるか分からないため息を吐き出しながら、ころんと両手を広げて「大」の文字に体を伸ばす。

真っ白な天井を見つめながら、どうすればいいのか考えあぐねていた。

ど、どうしよう……

なんだかどんどん不味いことになってる気がする……

健人君ってやっぱり人気者なんだな……

健人君……だめだ、やっぱりまだ呼ぶのに抵抗があるよぉ……

勉強まで教えてもらうことになり……

祐ですらあの反応なのだ。他のひとたちに知られたら、一体自分は
どうなってしまうんだろう。身の安全が保障できない事はまず間違
いない。

風呂上りで体が冷えたからなのか恐怖からなのかぶるつと身震いす
る。

時計の秒針の力チカチという音をしばらく聞きながらふと小百合さ
んから名刺のことを思い出した。

あ……!

そつだ、小百合さんにメールしなきゃ……!

時間はすでに11時を過ぎてしまっている。

私は慌てて体を起こすと、携帯を鞆から取り出した。

どうしよう……なんてメールしたらいいんだろう？

自分の場合、携帯を持っていてもほとんどいつも意味をなしてなかった。

もともと「女の子だから、一応何か危険が降りかかった時のために」と父親から渡されていた携帯だったので、メールをするといつても家族と恵理や由里香や玲ちゃんとぐらいでメモリーにだってほとんどアドレスは登録されていない。

電話もごくたまに緊急時に使うぐらいだ。

私は数十分程度、文章をうったり消したりして、やっとのことで文章を完成させた。

.....

宛先：小百合さん

件名：白崎葵衣です

本文：メールするのが遅くなってしまつてごめんなさい。

今度ぜひ小百合さんとお話してみたいです。

葵衣

.....

数十分も悩んで内容がたったこれだけかよ！と由里香が見たら散々に言われそうなメールである。

だがメールをうちなれていない自分にとつたら、このメールは割と

良い出来だった…ように思う。

よし……！！

これでいいかな……？

私はメールの送信ボタンを押し終わると、再びベッドに横になった。じっと宙の一点を見つめていると、ふと今更になってキスされたときのことを思い出す。思えば今と似たような状態で……

あの時の温かな体温を妙に思い出してしまい、ありえないほど顔が真っ赤になる。

わあああああ~~~~！！

な、なななななで思い出しちゃったんだろう……！！
ど、どうしよう、こんなんじゃ寝れないよ……！！

両手で赤面した顔を覆ってそんな事を心配していたが、3分後にはきっちり心地よい眠りの中へと誘われていたのだった。

第31話「何かが変わる日」(後書き)

31話の一部をご指摘頂いて修正しました。
教えて頂きありがとうございます。><

第32話「運命の結果発表」

差出人：小百合さん
件名：小百合です

本文：葵衣ちゃんのテストが終わったら、私も夏休みにじっくり話がしたいわ。今度、葵衣ちゃんの都合のいい時の予定を教えてください！楽しみにしてま〜すv v

小百合

今日は待ちに待った定期テストの成績結果が学校の掲示板に貼られる日だ。

それは同時に夏休みの補習のメンバーの発表もかねているため、テストの出来があまり芳しくなかった生徒たちにとって今日という日はある意味、死刑の宣告を待つ囚人のような気分なのかもしれない。

貼り出されるのは昼休みということで、午前中の授業の生徒たちの心はここにあらず状態。

夏休みがかかっているため仕方がないともいえる事態に、教師たちもため息をつきつつ、そんな生徒たちの様子を黙認していた。

夏休みを見事獲得できるか、
惜しくも逃して補習三昧という手に入れたくもない地獄行きへの切符を獲得することになるか
……

明暗を分ける運命の瞬間を目の前にして、校内全体がそわそわと落ち着かない空気に包まれている中、ここにも2人似たような症状になっているものがいた

「ちよつと葵衣！あんた、フォークから唐揚げが落ちてるわよ！つて…由里香！！アンタは牛乳が口から垂れてる！！ちよつ…汚いからさっさと口を拭きなさいよ！！」

恵理の声に我に返って視線をつくえの上に落とすと、いつのまにか唐揚げがころんと転がっていた。

「……………うえっ！？」

う、うわーん！！

せっかく祐がつくつてくれた唐揚げが…！！

思わず口から情けない泣き声に近いものが漏れる。

大丈夫？という玲ちゃん言葉に頷きつつ泣く泣く唐揚げを拾い、嘆息して隣りを見ると、由里香がぼーとした表情を浮かべたまま口にストローをくわえていた。

唇の端から牛乳が一筋垂れていて、そのままつくえの上に滴り落ちている。

由里香はまったくその事に気付いていない様子で、右手に牛乳パツクを持ち左手で頬杖をついたまますっかり上の空だ。

ゆ、由里香……………？

声を出して呼びかけてみるが、聞こえていないのか返事はない。

「うーん、こりゃ重傷だね…」

そう言つて苦笑する玲ちゃん。

恵理は小さくため息をつく、素早い動作で由里香から牛乳パックを取り上げ、ティッシュでやや乱暴気味に由里香の顔を拭き始める。すると突然虚ろだった由里香の目が大きく見開かれ、

「痛あゝい!!」

と由里香が驚いたように悲鳴をあげた。

拭かれた口のまわりが赤くなつていて見ていて痛々しい。

うわあ……大丈夫、かな？

「ちよつとお!?いきなり何すんのよ、恵理っ!痛いじゃない!!」

怒りを含んだ声に、恵理はしれつと言り返す。

「いつまでたつても現実に戻ってくる様子が見えないからよ。逆にこうやって無事に帰つてこれたんだから感謝してほしいくらいだわ」

「はあ?」

「つたく……どーせ結果が気になつてしょうがないんでしょ?」

ギクツ。

由里香に向けられた言葉なのに、由里香と一緒に思わず固まつてしまった。

幸いなことにそんな私の様子に気付かなかったのか、恵理がそのまま言葉を繋げる。

「今更悩んだところでもう結果は決まってるんだから。補習になったら補習になったで潔く諦めなさいよ」

慰めともとれなくもないのだが、辛辣な言葉にカチンときてしまっ
たらしい。(ある意味凶星ともいえるが…)

由里香がものすごい形相で睨みつける。

「諦めらるわけじゃないっ！だって高校生活初めての夏休み
なんだよ！？補習なんて冗談じゃないのに……なのっ！あんな
に数学が難しいなんて誰も思わないじゃない！なんなのよアレ！！
なんで教科書の基本レベルを超えて、応用問題ばっかなの！？」

そうなのだ。

無意識のうちに私はうんうんと頷きつつ、試験の日のことを思い出
す。

本当に今回の数学のテストは予想以上に難しかった。

あれから毎日のように健人君に2時間も数学をびっちり教えてもら
い、大好きな読書も一切絶ち、テスト前日は万全を期して8時には
就寝について試験に臨んだというのに ……

問題を見た瞬間、頭の中が真っ白になった。

気付いたときには試験が終わってしまい呆然としていたけれど、数
学がその日の最後の試験科目だったからまだ良かったのかもしれない。
い。

あのまま他の科目の試験があれば、間違いなくショックな気持ちを
引き摺って、その科目にも影響が出ていたに違いないから…

出来が良かったのか悪かったのか、自分でもそれすら分からない
何ともいえない曖昧な状況に不安だけが募っていた。

うう……結果がこわいよお……

昼休みのことを思うだけで、じっとしてられないような衝動が押し寄せてくる。

中学生の頃はここまでテストの結果を気にしたことがなかった。
だが……今回ばかりはどうしても点をとらなきゃならないのだ。

……俺が教えてやったんだ。全教科合わせて10番以内に入
れ。お前ならいけるだろ。

もし10番未満だったら……分かってるだろうな？……

テスト前日になって言われた恐ろしい宣告……

あの時のニヤリと笑った不敵な表情を思い出してしまい、そのまま
頭を抱え込んでしまいたくなる。

もし10番未満だったら……その時の自分を考えるだけで泣きたく
なった。

確かにせっかく健人君の大切な勉強の時間を削ってまで教えてもら
ったのだから、自分でもいい結果だといいなという思いもある。

だが、進学校であるこの学校で30番以内に入ることだって決して
容易いことではないはずだ。

それがいきなり10番以内とはいくらか無謀な気がするのだが……

「はあ……結果見たくない……」

本音が思わずポロツとこぼれる。

未来に全く希望の光が見えないことに肩を落とすと、そんな自分に玲ちゃんが気付いたのか、

「大丈夫だって、葵衣なら。うちなんて今回3教科ぐらいヤバいのあるしさ！」

と笑って、ばんぼんと肩をたたいて励ましてくれた。

玲ちゃん…

目の前の美少年ばりの優しい笑顔につられて、微笑み返す。

うん！こんなひとが先輩だったら一生ついていきます！って私も慕っちゃうよなあ……

えっと…また名前忘れちゃったけど、何とか君の気持ちもすつごく良く分かるよ！！

恵理と由里香がすぐ傍で激しい言い争いへと発展しているにもかかわらず、えへへと照れ笑いする葵衣とそんな葵衣を見て微笑んでいる玲の間には平穏でほのぼのとした空気が流れていた。

ものすごい気温の差である。

だがそんな空気もつかの間、それを破る勢いで、突然廊下に大きなどよめきが走った。

なっ、なに！？

何事かと思い顔を廊下に向けると、ひとりの男子生徒が大慌てで教室に駆け込んできた。

「おいっ！結果が貼られたってよ！！」

「うっそ！！」

「マジでか！？うっひゃあー死ぬうーっ」

「早く見に行こーぜ！！」

その声に数人の男子たちが立ち上がり、廊下へと目にも留まらぬ速さで飛び出していく。

彼らに続くようにして、それぞれ落ち着きのない不安そうな面持ちでクラスメイトが次々に立ち上がり始めた。

きっ、きたあ

！！！！

男子の言葉を聞いた瞬間から、飛び出しそうなほど高鳴っている心臓。

一呼吸おいて、気持ちを落ち着かせるようにぎゅっと自分の胸のあたりの服をしわになるぐらい掴む。

「ほらっ、私たちも、い、いくわよ」

由里香の心なしに震えた声を合図に立ち上がってに教室のドアへと向かった。

かつてないほど緊張で顔を強ばらせている由里香を見て、大丈夫だろうかと心配に思う反面、その気持ちが痛いほど伝わってきた。

な、なんか高校受験のときより緊張するかも……

そう考えてみればおかしな話なのだが、足が^{スグ}痺んでしまうほど緊張しているのも事実だった。

「どっひゃあゝすごい人！ってかもうダメ！ねえ、恵理。どうしよう、補習だったら……！」

「だーかーらー！往生際が悪いわよ！そんなの結果見てから考えなさいよ！」

泣きそうな由里香に恵理が呆れ顔で叱咤する。

教室から出るとすでに廊下の掲示板の前には遠目に分かるぐらい人だかりが出来ていた。

うっうわあああ……ど、どうしよう……

掲示板に近づくとつれバクバクと鼓動が速まっていく。

もう、神にでも仏にでも縋りたい気分だ。

お願いします……！！

どうか、……どうか10番以内に入ることが出来ていますように……！！

人の頭だらけでなかなか結果が見えそうにない様子に、痺れを切らした由里香が、止める間もなく人と人の間に体を突っ込んで掲示板の前に大胆にも進んでいく。

そして暫くしてざわめきの中から、由里香の興奮混じりの叫び声が聞こえてきた。

「きゃあーっ！スゴいっ！早坂君一位だって！！800点中796点！？あっ、ありえないっ……！！」

ええっ……!!?!

一位の上に、800点中796点……!!?
どうやったたら、そ、そんな点が……!!?

驚きのあまり、ぱちぱちと瞬きを繰り返す。

改めて健人君の凄さを実感したというか……

さすが新入生代表に選ばれただけはある……って、そりゃそうだよ
ね。

だってあれだけ難しそうな本もたくさん読んでるんだもん……

はあ…ホントに人間って不公平だあ……

なぜかツクンと小さく胸が痛んだ。

……え?

咄嗟に胸に手を当てる。

なんで……なんでこんな気持ちになるの?

もともと手の届かない雲の上の人だということはちゃんと分かっているはずなのに……

健人君をさらに遠くに感じ、どこかそれを寂しく思う自分に気が付いて、体が思わず固まる。

な、なんで………?

「…い、葵衣っ！あんた3番じゃん!!」

「……え?」

その言葉を理解する前に、由里香にいきなり前から腕が伸びてきて

引つ張られる。驚いて顔を上げると、信じられないことに、

3位：白崎葵衣（773点）

という文字が貼り紙の上の方に載せられているのを見つけた。

う、うそ……

3番？わ、わたしが…？

「うわっ、スゴいじゃん！さすが葵衣だねーっ……っであー…私、59番かぁ」

「私は……32番ね。すごいじゃない、葵衣。アンタ、トップ3に入るなんて一体どんな勉強の仕方したのよ？」

玲ちゃんと恵理から賞賛の言葉をもらって、どう反応したら良いのか分からず、とりあえずお礼の言葉を言っただけで笑ってみせる。

「やったぁ　　！！私、補習から外されてるっ！！みてみてっ」

歓喜の叫び声に振り向くと、由里香が満面の笑顔で順位の貼り紙のとなりに貼られていたB5サイズの紙を指さしていた。

どうやら補習メンバー表のようだ。

「わっ」

そのまま由里香にいきなり抱きつかれてよろけてしまったが、由里香の心底嬉しそうな表情を見てだんだん自分までぽかぽかと暖かい気持ちになってきて

「良かったね」と声をかけた。

ありがとー！と素直に喜んでる由里香はとっても可愛かった。

やっぱり由里香は笑顔がいちばんだよね。

暗い顔は似合わない。

由里香が笑うだけで、その場の雰囲気明るくなるのだ。

「やったじゃん、由里香！」

「ほら、だから言ったじゃない。でも結局何番だったわけ？」

「へっへーん、141番でしたー！」

「アンタ……よくそれで補習逃れたわね」

「もう今はそんなことどうでもいいのっ！結果良ければすべてよし！やったあー夏休み遊び放題ー！」

「はいはい」

あちこちで喜びの声や落胆の声が聞こえてくるざわめきの中、やっとじんわり胸に嬉しさがこみ上げてくる。

………ということとはつまり…健人君が言ってた罰はないってこと…だよ、よかったですあ…

ほっとして安堵の息を吐き出す。

今回、奇跡的にこのような結果になったのは紛れもなく健人君のおかげなのだ。

今度教えてもらったお礼をしなきゃなあと考えながらも意識はすっ

かり夏休みに飛んでいた。

夏休みは1ヶ月ちょっと。

満足のゆくまでたっぷり読書ができるし、映研の合宿もあるし、小百合さんとお話出来る機会までもてたのだ。

ついちょっと前に感じていた心の違和感のこともすっかり忘れ、楽しみがたくさん詰まっているだろう夏休みを思い浮かべて、葵衣は胸を躍らせ小さく微笑んだ。

夏休みまであと少し

賑やかな廊下の窓から見えるのは、初夏の風で揺れている新緑の若葉。

暖かな木漏れ日が廊下に差し込んでいる。

何かの始まりを予感させる夏が今まさに
始まるうとしていた ……

第32話「運命の結果発表」(後書き)

ここまでお付き合いして下さった方々、本当にありがとうございました！ということと第2部終了です(笑)いよいよ合宿編ということになるんですが、その前に健人視点が入る予定なので、少しでもそちらも楽しんで頂けたら嬉しいです(^^) ではでは〜*夕氷
嘩*

閑話（健人視点）

苛々する。

ここ最近、ずっと胸の中でくすぶり続けている感情。じわじわと体を蝕んでいくような感覚に思わずため息が零れそうになる。

白崎葵衣 ……悩みの種の張本人。

初めは面白い奴、ぐらいにしか思ってなかった。

外見は分厚そうなレンズの眼鏡に髪を二つに結った、クラスで目立たないタイプの奴。だけど思ってる事はすぐ表情に出すし、それが面白くてついついからかえばバカ正直に反応を返してくるし

……

何より媚びるような態度を俺に対してしてこない初めての女だったから、傍にいても大分気が楽だった。張り詰めていた気持ちも彼女と話しているうちに次第に和らいでいく そんな不思議な女だった。

いつのまにかその居心地の良さを求めて、足は自然に図書室に向かうようになっていた。

そして僅かな時間ではあったが一緒に過ごしていくうちに、彼女の新たな面を発見していくことになる。

見られている事にも気付かず、本を読みながら幸せそうに微笑んだり、ハラハラと焦ってみたり、静かに涙を落としたり……。

くるくると変化する彼女の表情は見飽きることがなく、初めはあのしつこい女達から逃れる為にここに来ていた筈が、いつのまにかそんな事すら忘れ彼女の表情をじっと見入るようになっていた。

彼女を見つめながら、気付かぬうちに芽生え始めてきていた想い。その想いに気付いた時には愕然とした。

この俺が？

そんなバカな

……

慣れてない感情に付き纏われ、それを受け入れるのにかなりの時間を要した。自覚した後やたらに彼女が可愛く思えて仕方がなくて、そんな自分にひどく戸惑った。

無意識のうちに何度か彼女を襲いかけたこともある。

だが、心中で葛藤を繰り返している俺とは対照的に、のほほんと微笑んでいる彼女に対して腹立ちすら湧いてきていた。

人の気も知らないで……何でコイツはこんなに無防備なんだ？

姉貴にも兄貴にも気付かれているというのに、何故コイツだけが気付かない？

「どうした？今日調子悪いじゃん」

指先から放たれたボールは弧を描き、僅差でゴールの端に当たって勢いよく跳ね返った。

落ちた後も小さく弾んでいたボールを片手で拾い上げると、小さくため息をつく。

直樹の言う通りこのところずっと不調続きだった。思うようにボールが飛ばず、なかなかゴールが決まらない。

俺と直樹は時々こうやって人のいない時間帯を狙って、バスケットをしにわざわざ体育館にまで来ていた。

初めは直樹に無理矢理連れ出されてあまり乗り気ではなかったのだが、いつのまにか全ての事を忘れて何かに没頭できる、俺にとって欠かせない時間になっていたらしい。

だが、気分転換にやっている筈のバスケも今は何の気の紛れにもならなかった。

頭の中を支配しているのは彼女のことだけで…自分だけがこんなに悩まなきゃならない事が、ひどく理不尽な事のように思えてならなかった。

「なになに？何かあったの？お前がこんななんて珍しいじゃん」

「別に」

愉快そうに尋ねてくる直樹にそっけなく返事を返すと、直樹は面白くねーなあと言わんばかりに拗ねたように唇を突き出した。そんな直樹を冷たく見返してから、再びシュートを放つ。

だがそれもやはり不発に終わり ……

くそっ！

腹立ち紛れに足下に転がってきたボールを蹴り上げようとした瞬間だった。

「あれ!？」

直樹の驚いたような声に、動かしかけていた足をピタリと止める。

何やってんだ俺は……

発散出来なかった苛立ちを無理矢理胸の中に抑え込んで後ろを振り向くと、誰かが体育館に入ってきたようだった。

直樹の知り合いのようだが興味が湧くはずもなく、転がっていたボールを拾おうとした……が。

「なんだ、誰かと思っただら白崎さんじゃん」

耳に触れていったその名前に、思わず一瞬体が固まった。

空耳か？

ボールを右腕に抱え、ゆっくり体を起こしてから振り返る。

憎たらしいほどずっと頭から離れずにいる存在　彼女だとして
ら…何故こんなところにいる？

ちょうど直樹の体が壁になっていて彼女かどうか判断しかねたが、ちらりと見えた姿は間違いなく彼女だった。彼女も俺がいる事は、まだ気が付いていないようだ。

声が遠くて話の内容まで聞き取れなかったが、直樹は随分と楽しんでいるように見えた。

途端に、カツと身体が熱くなる。

あの笑顔を直樹にまで見せているのかと思うと、胸に突き刺さるような怒りが急激に込み上げてきた。

なんなんだ一体……

なぜ俺がこんな思いをしなきゃならない？

怒りにまかせて半分ヤケ気味にゴールを目掛けてシュートをうつつと、なかなか入らなかつた癖に、今度は皮肉にもネットを掠りもせず綺麗にシュートが決まつた。

「おい、健人！そろそろバスケやめねーと次の授業始まるぞ！」

その声をかけてくる直樹すら疎ましく思えて、そんな自分に対して呆れた。

こんな事一度もなかつたのに……

直樹の背後から姿を現した彼女はどうかやら本気で俺の存在に気付いていなかつたようで、驚いて目を見開いている様子が目に入った。

完全に自分の八つ当たりであることは分かつていたが、不機嫌さを隠すことが出来ずにそのまま彼女を睨みつける。すると彼女は怯えたような表情を浮かべ、泣きそうに顔を歪めていた。

クソツ……こんな顔がさせたいわけじゃないのに。

意志とは裏腹に、冷めきつていく表情を止めることができない。直樹の困惑したような呼びかけにも答えず鋭い視線を容赦なく向けると、彼女は俺の視線に身体を震わせて、体育館から駆けだしていつてしまった。

遠くなつていく後ろ姿を呆然と見つめながら、直樹は首を傾げた。

「いきなりどうしたんだろっ…白崎さん。あつ！もしかして健人のことが好きで、見つめられて急に恥ずかしくなつちやつたとか？」

からかいを含んだ声に、俺は直樹を無言で睨みつけると、返事をせ

ずにボールを片付けてさつさと体育館を後にした。後ろから慌てたような直樹の声が聞こえてくる。

彼女が俺に想いを寄せるなんて有るわけがないのに ……

ありえない現実には、ふっと自嘲的な笑みを浮かべる。

半ば強引に取り付けた勉強を教えるという約束も、単なる俺の願望のようなものでしかなかった。

体育館での一件以来俺の苛立ちは一向に収まる気配を見せず、部屋で彼女とふたりつきりになった瞬間理性が吹っ飛ぶのを抑えられなかった。

駄目だ。

彼女をこれ以上、怖がらせるわけにはいかないのに…

本能が先立ち、彼女を滅茶苦茶にしてやりたくなる衝動を必死に堪える。

彼女の顔から眼鏡を取り払うと、露わになる可愛らしい顔。

初めて 彼女が歓迎会で酔っぱらったのを放っておけずやむなく家で介抱した時、寝るには邪魔かと思ひ彼女から眼鏡を外した瞬間、思わずその顔に見惚れた。

こんな綺麗な顔をしているのに何故いつもあんな格好をしているのか不思議でならなかったが…俺にとってはむしろ都合だった。彼女に余計な虫が付いても困る。

不安そうに揺れている潤んだ瞳に上気した頬、柔らかそうな唇…どれも俺を煽っている様にしか見えなくて、我慢できずに本能のまま目の前の彼女の唇を塞いだ。

角度を変えて、彼女の唇を堪能する。

あまりの甘い誘惑に理性は引きちぎれそうになっていた。
勉強会の事などとうに頭がない。

ああ、ヤバい。

病みつきになりそうだ

……

理性崩壊寸前にタイミング良く飛び込んできたのは、意外にもお袋だった。

あまりのタイミングの良さに舌打ちする。

姉責め……こういう事か。

出掛ける間際に残っていた言葉の意味をやつと理解する。

姉責の得意げな顔が思い浮かんでくるようで、一気に胸糞が悪くなった。

邪魔されたことに加え、姉責の思い通りになってしまったことに不機嫌になった俺とお袋で一悶着あった後、彼女をお袋にとられていつのまにか二人は仲良くなってしまっていた。お袋もすっかり彼女のことを気に入ったらしい。

「くあーっ、可愛いな葵衣ちゃん！健人、明日も絶対連れてこいよ。まあ、お前と葵衣ちゃんを間違っても2人つきりにはさせねーけどさ」

と彼女を送った後、お袋はカラカラと笑いながらそんな事を言ってきた。

また厄介な邪魔者が増えたとその言葉に俺は力なく肩を落とした。

その日から約一週間にわたる猛勉強を終え試験も終わり、結果発表

の日の放課後

……

学校から帰宅し部屋で本を読んでいると、静かな空間に突然チャイムが鳴り響いた。

生憎家には俺以外誰もいなかったので、しぶしぶ腰を上げる。

インターホンに出るのも面倒でそのまま玄関のドアを開くと、いきなり小さな紙袋を突き出された。

目の前には目をぎゅっと瞑って、微かに顔を赤らめている彼女……

まさか彼女だとは思わなくて驚きのあまり動きを停止させていると、そろそろと目を開けた彼女は遠慮がちにこちらを見て口を開いた。

「あ、あのっ……ありがとうございます！えっと、健人君のおかげで、3番とか信じられないような成績をとれて……それで、さ、差し出がましいかなとは思っただけ……これ、良かったら」

そのまま俺が紙袋を受け取るのを確認すると、呆然としてる間に、頭を下げてその場から逃げ帰るようにいなくなっていた。

我に返って袋を開けると、中にはクッキーが入っていた。

どうやら市販のものではなく手作りらしい。

どうせならクッキーよりも彼女からの愛情が欲しかったぐらいだが……。

そうは思っても込み上げてくる嬉しさを抑えきれず、俺は彼女の去ったあとを見つめながらふっと笑った。

あれだけ鈍感な彼女にそれを求めるのはまた早いのかもしれない。だが彼女を独り占めになりたいという思いはますます強くなるばかりで…誰にも彼女を触れさせたくない。それは紛れもない“独占欲”。

長期戦は最初から覚悟の上だ。

あの彼女をどう自分に振り向けるか……綿密に計画を練る必要がありそうだな。

いつか必ず俺のことを好きだと言わせてやる……
覚悟しろよ、葵衣。

第33話「夏合宿のはじまり」

夏らしい、目が眩んでしまいそうなほど強い日差しが生い茂った樹々を通って地面いっぱい降り注いでいた。

手を翳して上を見上げると、緑は光を浴びてより一層輝いている。枝葉の合間から見えるのは抜けるような雲ひとつない青空。

まさに絶好の合宿日和だった。

私たち映画研究会は、都心から離れた山奥に位置するペンションにやってきていた。

森に囲まれ穏やかな空気に包まれている、まるで自然と溶け込んで一体化しているようなところだ。

板倉先輩の叔父さんが今年に入って経営し始めたとかで、叔父さんの方から合宿所として提供すると申し出てきてくれたらしい。

有難くその話を受け取り、今年の合宿先はここに即決したそうだ。

……いいところだなあ。

目を閉じて澄んだ空気を胸いっぱい吸い込む。

ここにずっと住んでもいいかな、なんて思えるぐらいきれいな場所。

「うひゃあーっ、すごい、自然って感じー」

ふわりとスカートを舞わせてバスから飛び降りてきた由里香が興奮したように言った。

今日の由里香の格好はすごく可愛い。

薄茶のふわふわとした髪も、花柄のワンピースも、大きな麦わら帽子もまるで深窓の令嬢のよう。

そのうえ可愛らしい顔立ちをしているから、先ほどからちらちらと男の先輩のひとたちも由里香のことを見ている。

本人曰く「これは勝負服に決まってるでしょ！」と鼻息を荒くしていたが……

し、勝負服？

「勝負服」というものが何であるのかよく分からなかったけれど、由里香は嬉しそうだったしきつと良い服のことなんだろう。

私はそう勝手にひとりで納得すると、ふと自分の服装に目をやった。

足元ですっぱり覆うジーパンに長袖のシャツに紐で結ぶ運動靴。

これは全部お母さんが用意してくれたものだ。

山奥だし夏ということもあって、いわゆる虫除け対策らしい。

合宿に着ていく服装を思いつかなかった私は、それもそうかと思いは言われるがままこの服を着てきたのだけれど……

自分の服から目を離し、荷物をバスから運び出している方へ視線を移す。

香帆先輩や他の先輩たちも、渡邊さんや城乃内さんだって自分以外はみんな夏らしいお洒落な格好をしている。

特にこの服装に不満とかあるわけではなかったのだが……

何だかひどく自分が浮いた存在のように感じてしまい、急に気恥ずかしくなった。

「……え？」

「……え？」

考え事をしたまま長い間突っ立っていたらしい。
名前を呼びかけられて慌てて意識を引き戻す。

わわっ…いけない！
私、ぼーっとして……

顔を上げると、目の前にはサラサラと色素の薄い髪を靡かせた少年
が心配そうな表情で私を見つめていた。
あまりの至近距離に一瞬体が固まる。

「大丈夫？具合でも悪いの？」

眼鏡ごしに顔を覗かれ、いきなりのことに驚いた私は咄嗟に一步後
ろに下がって言った。

「う、うん。大丈夫……」

「そう？…なら良かった。じゃあ僕らも荷物運ぼう？」

促されるようにしてバスの荷台へと向かう。

彼の名前は、えーっと確か……

雪……そうだ、ユキヒラガナデ雪平奏くん。

雪のような色白の肌にぴったりな綺麗な名前だな、と感動したから
珍しくよく覚えている。

それに何より……

雪平君は映研歓迎会の日、風邪をひいて残念ながら来れなかったら
しい。

なので、夏休みに入って合宿に向けての打ち合わせで初めて顔合わ
せということになった。

「始めまして。雪平奏と言います」

礼儀正しく背筋を正して頭を下げた少年に、呆気にとられた。

まるで貴族を感じさせる少年。

どこか儂げでありながら、上品な雰囲気を持ち合わせている。顔もお約束のように整っていて。

私はそのまま食い入るように彼を見つめてしまった。

に、似てる……！

そう。

彼はとてもよく似ていたのだ。私がよく知っている人物
ンドールに。

アラ

アランドールというのは勿論この世に実在する人物ではない。

私が今まさに読んでいる、天音夜椰さん…つまり小百合さんの新作に登場する人物だったりする。

今回の新作は中世を舞台とした上流貴族のお話。

豪華絢爛な貴族の生活を描く一方、その裏であちこちに確執や陰謀が張り巡らされている…そんな貴族社会の中に生きるひとりの少年それがアランドールなのだ。

うわあああ……すごい！

イメージにぴったり……！！

別の理由ではあるけど、びっくりしたのはどうやら私だけじゃなかったようだ。

みんなが雪平君を呆然と見つめている中、香帆先輩は「今年の一年は美少年だらけね…」と感心したようにぼやいていた。

雪平君は昔から体が他の人に比べて弱いそうだ。

ただどここれでも昔よりは大分マシになったんです、って雪平君は笑ってそう言っていた。

そのはにかんだ表情に、あちこちからはうっとりしたようなため息が…

「はい。これ、白崎さんの荷物だよね？」

あっ……

またぼーっとしちゃった…！

慌ててお礼を言って雪平君から荷物を受け取る。

ふと目が合うと、雪平君はにっこりと微笑んでくれた。

う、うわあ。

本当にそっくりだなあ……

ほわほわとした感覚が胸に広がっていく。

健人君のときもそうだったけれど……

私ってもしかして小説の主人公と実在の人物を結びつける癖でもあるのかな？

先輩たちにならって荷物をペンションに運ぼうと体の向きを回転させると、芳沢君と話をしている健人君の姿が目に入った。

同時にとくん、と心臓が大きく鳴る。

そっか：これから2泊3日、健人君とも一緒なんだよね。
そういえばこの前のクッキー：少しは喜んでもらえたかな？

試験の結果発表の日の放課後に強引に手渡したクッキー。
勉強を見てもらったほんのお礼のつもりだった。

実はあれ：祐の手作りなんだよね。

あの日、家に帰った途端良い香りがキッチンの方から漂ってきて、
吸い付けられるようにキッチンに向かえば、祐がオーブンから焼き
立てのクッキーを取り出しているところだった。

どうしたの？と尋ねると、祐は照れたような表情を浮かべて答えた。
どうやらお母さんの料理本を暇で読んでいるうちに、急に作ってみ
たくなっただけらしい。

ひとつ食べさせて貰うと、初めて作るとは思えないほど美味しくて。
甘さが控えめになっているところも、このクッキーにはちょうど合
っているような気がした。

「姉ちゃん、それ全部食べて良いよ」

「えっ、祐は食べないの？」

「ぜ、全部ってこんなに！？」

「うん。だって作って見たかっただけで別に食べたかったわけじゃ
ないし」

「でもこんなに多くは…」

「食べれないよ。」

「そう言いかけてから、あっと気付く。」

そ、そうだ！

これ、ちょうど甘さが控えてあるし健人君のお礼に…

前に健人君は甘いものが苦手だと羽織さんが言っていたのを思い出す。

私は思い立つと、すぐに準備を整えて健人君の家に向かった。

いきなり尋ねてきた私に驚いた表情を浮かべている健人君。

何の音沙汰も無くいきなりやって来たのだから、当然の反応なわけ。

なんだか急に恥ずかしくなって、押し付けるようにして逃げちゃったけど……

なにやってるんだろう？私…

その時のことを思い出して、はあっとため息をつく。

ホントに不審者だよ、これじゃあ…

もしかしたら迷惑だっただけなのかもしれないし…

「葵衣ーっ！！早くしないと置いてくよーっ」

「う、うんっ」

ペンションはバスを降りた位置から少し離れているそう。

由里香の声に我に返ると、慌てて私は後を追いかけた。

歓迎しているように一斉に聞こえてくる虫の声。

樹々は嬉しそうに葉を輝かせていて。

夏の合宿はまだ幕を開けたばかり。

第34話「不可解なところ」

バスを降り立つた場所から、歩いて約5分ぐらい。到底車を通るには無理そうな小道に沿って歩いていくと、樹々の間から次第に建物の屋根が見えてきた。

目の前に現れたのは森に囲まれ青々とした芝生の上に建てられた山荘風の建物。

木の屋根に白壁と、まるでヨーロッパの建物を基調としたような外観に、つい足を止めてぼーっと見惚れてしまった。

うわああああ…

こんなところがあるなんて……

「うひょーっ！マジでか!？」

建物を目にした瞬間、伊淵先輩から甲高い感嘆の声が上がる。なに变な奇声上げてんのよ、と香帆先輩が呆れた表情で横槍を入れるが、まったく香帆先輩の声が耳に届いていないのか、伊淵先輩は興奮気味にバシバシと板倉先輩の背中を叩いた。

その途端、「うっ」と板倉先輩から小さな呻き声がもれる。

傍から見ている、ちよつと痛そうだった。

だ、大丈夫だろうか？

「お前の叔父さん、すげえじゃん!！」

「…あ、ああ。まだ、始めて間もないし……ケホッ、たぶん叔父さんたち中にいると思うんだけど……」

板倉先輩は顔からズレた眼鏡をついと片手で押し上げてから、玄関に目を移した。

随所に細工が施された洋風の扉は、艶がありとても立派なものだ。

す、すごいなあ……

なんだか本物の貴族のお屋敷みたい……！

思い浮かんだ自分の考えにハッと顔を上げる。

さりげなく視線を彷徨わせて、ある一点を捉えた瞬間、思わず私は息を呑み込んでしまった。

うわああああ……

実写版（？）アランドールだあ……

雪平君は目を細めて、眩しそくに建物を見上げていた。

それはまるで一枚の絵画から切り取ったような美しい構図。身に纏^マう儂げな空気や上品さ……その姿は貴族そのもので。

ペンションの周りを取り囲む美しい森ですら舞台のセットに見えてくるから不思議だ。

本の世界に取り込まれたような、夢を見ているような……そんな感覚に陥ってしまう。

も、もつたいない……！

この構図、小百合さんにも見てもらいたかったなあ……

きつと小百合さんが見たら、びつくりするに違いない。

その時の小百合さんの反応を思い浮かべて、笑いそうになるのを何

とかこらえる。

すると、私が見ていることに気付いた雪平君がきよとんとして私を見返してきた。

あまりにもじつと見つめすぎていたのだろう。

すでに妄想の世界に旅立っていた私は、その問うような視線に慌てて意識を引き戻した。

な、なにやってんの、わたしってば……！

こんな時まで妄想に浸っちゃうなんて……

この、身にしみこんでしまった癬を、今すぐ自分の中から追っ払ってやりたくなった。

は、恥ずかشير……

雪平君と目が合った瞬間、気まづくなって顔を俯けると、クスクスと雪平君から小さな笑い声が聞こえてきた。

おそらく　いや、間違いなく私に対して笑ったのだろう。

一気に顔に熱が集まるのを感じた。

うう……恥ずかしいよお……

ぜったい雪平君、私のこと変な子だって思ったよね……

そりゃそうだろう。

妄想の世界に入り込んでいるし、じつと雪平君のこと見ちゃったし、顔をすぐに赤くするし……

雪平君から見たら、拳動不審以外なんでもない。

合宿が始まってまだ間もないのに……思い起こしてみれば、雪平君には変なところしか見られていない気がする。

あ、ありえない……

情けなさのあまり、泣きたくなってきた。

「ちよつと葵衣？顔赤いけど……」

由里香の不審そうな目に、我に返る。

「うえっ！？え、あの、ちよつと暑くて……」

「ちよつと〜そんなんでこれから大丈夫なワケ？まつ、確かに暑いけどさ〜。思ったよりは涼しいし……さすが山奥だけあるよねえ」

な、なんとか誤魔化せた……のかな？

由里香の納得したような声に、苦笑を零す。

もう一度雪平君をちらりと盗み見てみると、雪平君は他の子と何やら楽しそうに談笑していた。その様子にホッと息を吐く。

はあ〜っ……

この妄想癖なんかしなきゃなあ……

この時……

恥ずかしさに囚われて何も考えられなくなっていた私は、自分に向けられていたもう一つの視線に気づく事が出来なかった。

*** **

板倉先輩の叔父さん夫婦は「暑い中よくこんなところまでいらして下さいました」と温かな笑顔で出迎えてくれた。

優しいところとか、やっぱり親戚だけあって板倉先輩とどことなく似ているような気がした。

それから挨拶を済ませ、すぐに部屋に通されると、やっとのことで荷物をおろすことが出来た。

部屋は女子と男子それぞれひと部屋ずつの合わせて2部屋を借りるらしい。

人数もそこまで多くないため、部屋の中は随分とゆとりがあるように感じられた。

はあ〜…重かったあ……

もうちょっと減らしてくれば良かったかなあ？

肩にくい込んでしまいそうなほど、ぎっしりと詰められた重い荷物。下ろした後も、じんじんと肩に痺れるような感覚が広がっている。

うーん、そんなに荷物を詰めた覚えもなかったんだけどなあ……

入れたのは確か衣服類とタオルと洗面具ぐらいで……

あと他には何入れたっけ？

自分の荷物をじっと見つめ、首を捻る。

今開けてしまうと、弾けて色んなものが飛び出てきそうで、なんとなく怖くて中身を確認する気にはなれなかった。

「……チャンスよ、これは」
「はい？」

ちゃんす？

いきなり横から聞こえてきた声に、驚いて振り向くと、由里香が真剣な目つきで何やら考え込んでいた。

由里香は「そうよ」と頷いてから、そのまま真っ直ぐな瞳を自分に向けてくる。

ただならぬ気迫に、思わずごくりと唾を飲み込んだ。

「……いい？葵衣…合宿は2泊3日しかないの。分かる？」
「う、うん…？」

由里香が何を言いたいのか分からなくて、首を傾げる。

2泊3日…なのは、もちろんすでに知っている。

知らずに合宿に来たというひとがいるとは、ちょっと考えにくい気もするが……

「だーかーらーあ……。はあ〜っつ、ホントに 안타って鈍いわね！合宿ってどういうもんか分かってる？」

「え…えつと…」

が、合宿？

合宿っていえば ……

「ええつと、クラブごととかに、目的を達成したり鍛えたりするための ……っつ！？」

な、なんで!?

思いつきり後頭部をいきなり容赦なくたたかれて、痛さのあまり頭を抱え込む。

きつと漫画だったら バチーン! なんて効果音がついていたに違いない。

ま、間違っでないよね?

な…なんでたたかれたのだ?

ワケが分からなくて恨めしげに由里香を見上げる。

「バカッ! 誰もそんな答え求めてないってーの! あかねえ、合宿っていうのは要に『お泊り』なの! それがどどういう意味が分かる!?」

「お…とまり?」

それは勿論分かっているが ……

「そうよっ! つまり、片時も離れず早坂君といられる数少ないチャンスだと言ってんの! ここでチャンスを逃すわけにはいかないのっ!」

「へっ?」

か、片時も離れず ……

由里香の大胆な発言に、思わず顔が真っ赤になる。

すると、由里香はきよるきよると確認するように辺りを見回してから、声をひそめて耳元で話し始めた。

「…しかもチャンスを狙ってるのは、当然私だけじゃない。ほら、アイツ見てみなさいよ　　城乃内のヤツ」

ほらつと由里香に首で促されるまま、その方向に目を移す。特に変わったところがあるように思えないのだが……

「どこ見てんのよ！アイツの服と顔を見なさいよ。あの露出しまくりの服にど派手なメイク……あれで早坂君を誘惑する気まんまんよ」「ゆ、ゆゆゆ誘惑!？」

確かに、格好がちよつと寒そうだなあゝなんて呑気に思っていたけれど……

まさか「誘惑」なんて言葉が出てくるとは思わず、そのまま思考が一時停止状態になる。

「もちろん、他にも狙ってる人はいると思うけど……とにかく！私本気でいくから！葵衣、協力してよね!!」

「う、うん……」
「よおーしっ！素敵　ラブサマーバケーションに向けて頑張るわよ！！」

由里香はそう意気込んで、ガッツポーズを「うしっ」と決めた。

由里香、ホントに健人君のこと好きなんだなあ……

そんな由里香を見て笑おうとしたが、なぜか上手く笑えなかった。

……え？

一瞬、体が固まる。

由里香を応援してあげたいと思う気持ちは確かなのに
相反して重たい鉛のように深く沈んでいく心…
そんな自分に困惑が隠せなくて、しばらくのあいだ由里香の言葉が
耳に入らなかった。

な、なんで

？

第35話「動きはじめ」

主人公はひとりの女のひと。

都会での暮らしにくたびれた主人公は、有給をとって久々に故郷に帰省することにした。

都会とは違った、懐かしくどこかホッとするような自然の香り

……

主人公は身体にたまっていた疲れが次第に和らいでいくのを感じながら、ふと思いつく。

あの森……今もまだ残っているだろうか？

子供の頃毎日のように行っていたためか、いつのまにか隅々まで把握するようになっていた …… あの頃の自分にとっては隠れ家のようなところ。

都会に出て何年と経ってしまったから、開拓も大分進んでしまっているだろう。

だがそれでも“あの森”が今はどうなっているのか気になった主人公は、我慢できずそこへ訪れようと決心した。

驚くことに、あんなに年月が経ってしまっているというのに“森”は昔と変わらずそのままの形を残していて、足は自然と動き今でも身体は“森”を覚えていた。

主人公はその事実嬉しくなつて、満足のゆくまで森を楽しんだ。

まるで子供のころに戻つたような、どこかくすぐつたい感覚……

都会生活での嫌なこともぜんぶ忘れ、解放感が心の中に広がつていく。

“森”は、昔も今も、じぶんにとってかけがえの無い大切な場所だつたのだ。

そして主人公は、その“森”でひとりの青年と出会い、恋に落ちることになる……

秋の文化祭で公開する予定の映画は、大まかに言うと大体こんな感じのストーリーになるそうだ。

いわゆる、ひと夏の恋の物語らしい。

「まあ、ありきたりな話なんだけどね。今回初めて台詞を入れるということで、篤朗と話し合つてあえてシンプルな話にしてみたんだ。本当はもっとキャストを増やす予定だったんだけど……結局この主人公と青年でほとんど占めちゃうかな」

……と、合宿前の打ち合わせで板倉先輩はそう話していた。

メインキャスト……つまり主人公の女のひとは香帆先輩が、青年の役はもうひとりの先輩が演じることに決まつた。

「ロケハン（*）はしつかり済ませたし、今度の合宿先…叔父さんのペンションは、撮影の環境としては最適な場所だと思うんだ。一年には主に撮影の手伝いをして貰うことになると思う。試行錯誤しながらだから色々と問題はあると思うけど…よろしく頼むよ」

合宿1日目は怒涛のごとく過ぎていった。

板倉先輩の叔父さんのペンションに着き、荷物を部屋に運ぶと、さつそく午後から撮影が開始されることになった。天候に左右されることもなく、特に何の問題もないまま撮影は順調に進み、気付けばあっという間に日が暮れてしまっていた。

私はと言うと、撮影の間はただただ先輩たちのカメラワークに圧倒されているだけで、何の役にも立てなかった。

せいぜい出来たところで、指示通りに機材を運ぶぐらい。…と言っても、ほとんど男子たちがやってくれたので、結局撮影中はせめて邪魔にならないように端っこで傍観してるだけだった。

な、情けなさすぎる…

まあ、変に手を出したところで結局は足手纏いになるだけだから仕方がないのかもしれないけれど…折角撮影という機会に携われるチャンスだったというのに、傍から見ていることしか出来ない自分にどうしようもなくもどかしさを感じた。

そんな私の様子に気付いた香帆先輩は、

「しょうがないわよ。私たちが一年の時も、ひたすら戸惑ってただけだし…。あなた達が二年になって自分たちが撮影するようになる

時のために、今は手順や撮り方を学んでいくことが先だと思っわ。
気にする必要はないんじゃない？」

と撮影が終わったあとでそうは言ってくれたけれど…

はあああああ〜…

思わず零れ落ちるため息。

と同時に、

「ちよつと、葵衣!？」

「え? つ!」

由里香の声に驚いて顔を上げたときにはすでに遅かった。
誰かの背中に顔ごとぶつかり、その反動で身体がよろめく。

「す、すみま…」

顔を右手で抑えながらぶつかってしまった当人に謝ろうと慌てて視線を上げてみたはいいが、その顔を認識した瞬間私は見事に固まってしまっていた。

うわあっ…

け、けけ健人くん…!?

「大丈夫か？」

「…う、え?あ、はいっ!」

途端にドキドキと鳴り出す心臓。

顔が真っ赤になるのを抑えることが出来ず、思わず視線を反らして

芳沢君はああ言ってくれたけど、絶対に健人君怒ってる気がする…

小心者の自分が心底情けなくなってくる。

駄目だ、こんなんじゃ…謝らないなんて最低だよ。

ちゃんと謝らなくちゃ…！

覚悟を決めて、私は唾を飲み込んだ。

「わ、私の不注意でぶつかっちゃってごめんなさいっ…！」

健人君の反応を見るのが怖くて、思わずぎゅっと目を瞑る。

辺りに訪れるしんとした空気。

急に足元が震えてくるような感覚が襲ってくる。

だ、ダメだ…やっぱり怒ってるのかな？

すると突然、頭にふわりと温かい感触が降ってきた。

驚いて目を開けると、頭上から聞こえてきたのは私にしか聞こえないぐらい小さな声。

「…これから気を付けるよ」

それは決して怒りを含んだものではなく、優しい響きで。

ずっと頭から温かい感触が消える。

それが健人君の手だったのだと気付いたのは、数秒後のことだった。

私はしばらく呆然としていたが、由里香に体を揺さぶられて意識を引き戻した。

「ち、ちよつと…！今アンタ、早坂君にポンって…ポンって頭やられたわよね…!?」

「え？えつと、あの…」

「何アレ…！何でぶつかった葵衣がそんなコトしてもらえんの!? 羨ましすぎる…！こんなだったらワザとでもいいから私が早坂君にぶつかっておくんだったわ…！」

「いや、あの…」

今の興奮気味の由里香にどう声をかけてみたところで届かなそうだった。

諦めて、小さく息をつく。

頭に未だに残っている感触…

夕焼けに紛れて頬は赤くなつたまま。

そつと胸に手を当てると、ドキドキと心臓の音が身体を波打っている。

夜の訪れを感じさせるかのように、涼しい風が木の葉を揺らしている。

掴めそうで掴めない何かの頭の中で揺らぎ始めていた。

第35話「動きはじめる」(後書き)

本当の本当にお久しぶりです…

何ヶ月も放置した状態になってしまい、本当に申し訳ありませんでした(涙)

家庭の事情で小説を更新できない状況にあったのですが、徐々にこれから復活していく予定です。

コメントやメッセージを下さった皆様、本当の本当にありがとうございます！！

超鈍足更新ですが、これからもお付き合いしていただけると嬉しいです^^^；

第36話「つかの間の休息と恋愛談義？」

「ふあ〜…」

気持ちいい。

白く濁ったお湯に包まれ、たいして今日は疲れていないはずなのに
思わず欠伸が出てしまった。

早いなあ…

もう合宿1日目は終わりなんだよね。

「葵衣、湯船のほうはどう？」

「うん！すつごく気持ちいいよ〜」

身体をシャワーで洗い流していた由里香が尋ねてきたので、満面の
笑みで答える。

お湯の温度も熱すぎず温ぬるすぎずでちょうどいい。

ぽかぽかと身体が温まってきた、だんだんと眠気に襲われてしまい
そつだ。

今浴場にいるのは私と由里香の2人だけ。

撮影が終わりペンションに帰るとすぐに由里香にお風呂に行かない
かと誘われたので、やってきてみれば案の定まだ早すぎたのか誰も
いなかったよう。

湯に身体を沈めながら、ゆっくりと目を閉じる。

あったかい…なんだか本当にこのまま寝ちゃいそつだなあ。

「葵衣、アンタさ…好きな男の子とかいないの？」

「ぶっ！！」

けほっ、けほ。

「は…へ！？」

す、好きな…？

いきなり何を言い出すのかと思えば…咳き込む身体を必死に押さえながら由里香の方を見やると、由里香は期待に満ち溢れた視線をこちらに向けている。

いやいやいや！

そんなに目を輝かせられても困りますって！

す、好きな男の子なんているわけがな…

顔が真っ赤になっていくのを感じながら、ふと脳裏に過ぎったのは、健人君の姿。

「！！」

な…、なんでここで健人君が出て…？

「だって、葵衣と今までこういう話したことってないじゃない？アンタいっつも本読んでるしさ、恋愛とか興味ないのになって思ったわけよ。でも今日さ〜見てて思ったんだけど、アンタ雪平君と結構イイ感じなんじゃないの？」

「ぶほっ！！」

ゆ、雪平君！？

「雪平君ってあの通りの美貌じゃない？私は断然早坂くん派だけど。あの儂げな雰囲気とかさ、触れることさえ許されない禁忌の存在だとか…香帆姉いわく映研の女子の中ではそういう扱いになってるんだって」

「へ、へえ…」

「今日バスから降りたときとか雪平君が葵衣の荷物とってあげたりしてさあゝ葵衣も案外満更じゃなかったりして？」

「っ！！？」

なっ、何を言っ…

確かに雪平君は優しいしカッコいい人だと思うけど、そういう対象で彼を見たことは一度もない。

…というか、私なんか相手って雪平君にかなり失礼な話だ。

啞然として否定できずにいると、由里香は「あっ」と突然何かを思い出したように叫んだ。

「いいこと思い付いちやっ！ねえ、うちら二人で協力して頑張ろうよ、この合宿中に！葵衣は雪平君、私は早坂君と急接近できるよっにさ」

「はえ？」

何だか話が良くない方向に進んでいる気が…

「よーしっ、そうと決まれば早速今夜は緊急会議よ！大丈夫、私がしっかり策を練ってあげるから。どんと大船に乗ったつもりで私に任せなさい！」

「あの、由里香、なにか激しく誤解を…」

…物凄く嫌な予感がする。

目を爛々と輝かせている由里香の耳に私の声は虚しくもまったく届く心配すらない。

とその時、浴場の戸がガラリと大きな音を立てて開けられた。

「あらあ？そこにいるの…もしかして酒井さん？」

「げっ」

浴場に入ってきた姿を認めて、由里香が心底嫌そうな顔をする。

「城乃内…」

ぴりぴりと何だか触れてはいけないような空気を感じて思わず湯船の中で後退りする。

な、なんだろう…

もしかして、ふたり、仲が悪かったり…するのかな？

そういえば歓迎会の時もあまり良い雰囲気ではなかった気が…

城乃内さんは由里香をじっと見つめた後、ふっと勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「貧相な身体…そんなんじゃ早坂君を誘惑するにも出来ないわね。

かわいそうに…心配も杞憂だったみたいね」

「なっ……………Aカップを舐めんじゃない！！！！！！」

由里香は顔を紅潮させたかと思いきや、次の瞬間、栓をひねって手にしていたシャワーを思いっきり城乃内さんの顔面に向かって浴びせていた。

「きゃあつ！！」

「ふざけんな！！アンタが何カッブあるかなんて知らないけどねえ…早坂君は見た目だけに絆されるようなそんな軽い男なわけないじゃない！その辺の男と早坂君を一緒にするなんてサイテー！！この性悪女つ！！！」

「何すんのよ！！ヤダ、信じらんなくいつつ！この暴力男！！」

「男っ！？アンタいくら胸ぺちやだからって、性別まで男になった覚えはこっちはどこにもないわよ！！！」

「男みたいなものじゃない！！どっちも変わんないわよ！！」

「なんですつてえ〜！！！！？」

呆然としてる間に、目の前はいつのまにか戦場と化していた。

お互い何やら言い争いながら（もはや内容は聞き取れない）勢い良く飛び出すシャワーを浴びせ合い、仕舞いには手元にあつた桶を投げ出す始末。下手したら本当に怪我しかねない状態だ。

どっ、どうしよう…

何とかして止めなきゃ…！

そう思い湯船から上がろうとした瞬間、浴場の入り口で呆然として佇む香帆先輩たちの姿に気が付いた。

香帆先輩の右手の握られた拳がふるふると震えているのが分かる。

そして次の瞬間、浴場に強烈な怒鳴り声が響き渡った。

「貴方達、何をしているの！！いい加減にしなさいっ！！！！！！」

第36話「つかの間の休息と恋愛談義？」（後書き）

更新ペースがもはや半年に一度という…本当に酷い話です。（涙）
たくさん応援メッセージやコメント本当にありがとございまして！！遅くなってしまいすみません。

第37話「夜の静けさと」

「ぶえーつくしよい!!」

「だ、大丈夫？由里香…」

ずびつと鼻を噉って、由里香は「大丈夫よ」と笑ってみせた。

さっきので風邪でも引いちゃったんじゃないかな…

本当に大丈夫なんだろうか？

「にしても、ホントにむかつくーっ!!城乃内の奴っ、あのメス豚

」!

「はは…」

あの後、香帆先輩が場を收拾し、二人とも喧嘩するのを大人しくやめてくれたので良かったけど…幸い、誰ひとり怪我を負うことなかったのだから。

それでも興奮は未だ冷め止まないのか、由里香はぶつぶつ呟きながらずつと不服そうにしている。

そんな由里香を見遣りながら、私は苦笑を浮かべすでに自動販売機から出てきていた缶を取り出す。

私を取り出した缶を見て、由里香は「あっ」と何かに気が付いたかのように小さく叫んだ。

「それ、新発売の『甘くて酸っぱい 桃色サイダー』じゃない!!」

「うん?」

手にしているカラフルな加工が施されている缶を持ち上げて、まじ

まじと見てみる。

本当だ…確かに『甘くて酸っぱ（以下略）』と可愛い文字で書かれてる。

あまり深く考えずに選んじゃったんだけど…お、美味しいのかな？

不安そうな態度がいつのまにか表情に出てしまっていたのだろう。

由里香が笑いながら「大丈夫よ、それ。ちゃんと人気あるもん」と言ってくれたので、安心して口をつけてみる。

うん、確かに美味しい！

口内にシュワつとしたあの炭酸の独特な感じと甘酸っぱさが広がる。知らず知らずのうちに満面の笑顔になっていたらしい。由里香に指摘されて、慌てて顔を引き締める。

そんな私を見て由里香は可笑しそうにまた笑った。

「はーっ、本当に 안타って見てて飽きないよねえ」

「そ、そうかな…」

ほ、褒められてるのかな？

ちよっとばかり照れ臭くなって、鼻をかく。

「褒めてない褒めてない…」

「へ？」

「いや、何でもないわよ」

何だろう？

首を傾げるが、由里香は呆れたようにため息をついただけだった。

2人で暗闇の中仄かな明かりが灯るロビーのソファ―に腰掛ける。時刻はすでに夜中の0時を回っていた。皆が寝静まったのを見計らって、2人でこっそり部屋を抜け出してきたのだ。

「さて、と」

コホンと小さく咳払いをして、由里香は真っ直ぐな視線を私に向けてきた。

あまりの真剣さに思わずごくりと喉が鳴る。

実のところ、何故いきなり由里香が部屋を抜け出そうと言ってきたのか自分でもよく分からなかったりするのだ。

よほど真面目な話なのだろうと踏んでいたのだが…

「葵衣、お風呂で言ったこと、ちゃんと覚えてるわよね？」

「え？」

お、おふる？

「　　というワケで、今から作戦会議を開きまあす！！」

「へっ！？」

作戦会議！？

必死に記憶を辿っていくが、何せあの「浴場事件」があったのだ。あまりに印象が強すぎて…というか衝撃が大きすぎて、他のことをほとんど覚えていないというのが正直なところだったりする。

「なによ、忘れたのぉ？アレよ！アンタと雪平君、私と早坂君のお近付き作戦よ、お近付き作戦！」

「…あ」

そういえば、そんなことを言ってた気もするぞ。
なんでか、雪平君と変な風に誤解されたままだったんだっけ…
その事にやっと気付いた私は、慌てて訂正しようとする。

「あのね、由里香、そのことなんだけど…」

「明日の予定なんだけど、さっきさりげなく香帆姉に確認してきたんだよね。明日1日でラストまで撮影終えて、夜はお楽しみみのサプライズイベントがあるらしいの。それが何かまでは香帆姉もさすがに教えてはくれなかったんだけど…でもそのイベントしか絶対の機会チャンスがないわ！明後日はもう最終日だから時間がないし」

「は、はあ…」

「とりあえずアンタ明日は自分から雪平君に話しかけなさい。コレ絶対よ？そう言ったコツコツとした地道な努力が大切なんだからっぐつと握り拳を決めて力説してくる由里香に、気付いたらこくこくと頷いてしまっていた。

ひ、ひえ…、何だかとんでもないことになってきたあ…

「私もなにが何でもこの合宿で早坂君とお近付きなる！だから葵衣、一緒に頑張ろうっ？」

そう言ってちよつと頬を赤く染める由里香は、やっぱりすごく可愛くて。

どれだけ健人君のことが好きなのか、真っ直ぐに伝わってきた。

私には縁のない話だけど…

こつやつて自分の心に素直で純粹に相手を想える由里香を羨ましく思う。

私にも…

私にもいつかこういう相手、見つかるのかなあ…？

「…っ！」

って、えっ!？

だから、何でここで健人君が出てくるの…!？

ぎゅっと目を閉じ、健人君のことを頭の中から追い払おうとブルブルと首を振る。

「?…何やってんの、アンタ」

「えっ!?!うっ、ううん!何でもないよ」

訝しげに見てくる由里香に、私は慌てて笑って誤魔化した。

だんだんと、でも確実に育まれている想いに必死に気付かない振りをして。

第37話「夜の静けさと」(後書き)

第38話「運命や、いかに」

カー
カー

バサバサという羽音に驚いて、思わずビクリと身体が揺れる。見上げると、夜空に紛れて黒い影がぐるりと円を描いていた。

雲に紛れてうつすら見え隠れしていた月が次第に光を失っていく。なんだか今夜が酷く不気味に感じられるのはきつと気のせいでも何でもないだろう。

昼間はあんなに開放的で爽やかな緑が広がっていた森は、姿を一転させどこまでも深い闇色に包まれていた。

お願いです、神様。

もはや一生のお願いでもいいです。

今すぐ。今すぐこの場から消え去らせて下さい。

「白崎さん？」

「っ…！…！」

突然背後から名前を呼ばれ、身体が驚きで跳ね上がる。

振り向くと、心配そうにこちらを見つめている雪平君の姿があった。

「…、あつ、雪平くん…！」

び、びつくりした……

ほーっと、安心して胸を撫で下ろす。
バクバクと心臓が飛び出しそうなほど高鳴っていて、下手したら雪平君にまでバれてしまいそうな勢いだ。

「大丈夫？無理そうなら辞めておいた方がいいんじゃない？今ならまだ間に合うし」

「う、ううん、大丈夫…ありがとう」

「そう？…でもホント無理しないでね」

雪平君に微笑まれて、思わず顔が引き攣りそうになる。

ごめんなさい、雪平君。

大丈夫なんて大嘘です。真っ赤な嘘です。

…本当なら今すぐここから引き返してしまいたい。

なんでこんなことになってしまったんだろう、と人知れずため息をつく。

まさか…、

昨晚由里香が言っていたサプライズイベントが『肝試し』だったなんて思いもしなかった。

先輩達から喜々としてサプライズイベントの内容を発表された時、思わずその場で卒倒してしまうかと思っただくらいだ。

何でよりによって…『肝試し』なんだろう？

小さい頃から得体の知れない「おばけ」という存在が怖くて大嫌いで。

家族がホラー映画を居間で見始めようもんなら、自分の部屋に引き籠もり、テレビの音が聞こえてくるのも嫌で耳を両手で塞ぎじっと耐えていた。

何をそこまで怖がることがあるのだったよよく言われたけど……
そんなの私が聞きたい。怖いものは怖いのだ。

今だって必死に自分を気力で奮い立たせてるから動けるだけの話なだけで。

泣きたいのを何とか堪えて、俯く。

ううゝ…誰か助けて…

「はいはい！じゃあ、皆よく聞いてね！今から皆に一本ずつクジを引いて貰うから！同じ番号の人がペアの人よ。そのペアの人と一緒に、森の奥に祠みたいところがあるから、そこにお供え物をして元の道を引き返してきてくださーい！それじゃあ順番に引いてって！言っておくけど、1回引いたら交換不可だからねー！」

香帆先輩が缶のようなものを片手に、そう叫んだ。

缶の中では何本もの割り箸がからこると音を立てている。

その途端、ざわざわと浮き足立ったようにその場が騒がしくなる。

男子も女子も、囁き合いながら何だか楽しそうだ。

何がそんなに楽しみなのだろう、とこの場の雰囲気には相応しくないことをつい考えてしまう。

むしろそこまで楽しみに出来ることが本当に羨ましい。

「…とうとう来ちゃったわね」

「えっ？」

由里香が珍しく、緊張した面持ちで隣に立っていた。少し強張った表情とその台詞から、意図を読み取ることが出来なくて首を傾げる。

来ちゃった…って、もしかしくとも肝試しのことだよな？

…あっ！もしかして由里香も怖いのかな？

そっだよな。昨日の夜聞いた限り、さすがの由里香もサプライズイベントが肝試しだったことまでは知らなかったみたいだし。

仲間を見つけたことに喜びを感じ、ほっと一息つく。

「だ、だよな。やっぱり由里香も？」

「当たったり前よ！このクジに全てがかかってんだから」

……クジニスベテガ、カカツテイル？

予想の外れた答えに、一瞬動きが止まる。

あ、あれ…？

「城乃内のヤツを筆頭に他の女子だって、皆早坂君のペアのポジションを狙ってるわけだし。でもその特等席はたった一席。ホント運に頼るしかないんだから！」

そ、そういうことが…

同士ではなかったことに、がっくりと肩を落とす。

「ちょっと！アンタだって他人事じゃないんだからね、葵衣！雪平

君だって、早坂君ほどじゃないけどそこそこ人気あるんだから。てか昨日言ったけど、自分から今日一回でもいいからアンタ雪平君に話しかけたの？」

話はしたが、自分から話しかけたといえ、そうではない。

いつも雪平君が話しかけてくれるのがきつかけだったような気がする。

首をふるふるとゆっくり振ると、その動作を見て、由里香が呆れたように盛大にため息をついた。

「はーっ、そんなんじゃいつまでたっても先には進めないわよ！まったく…」

ぶつぶつと不平を言う由里香に、苦笑を漏らすことしか出来ない。

するといつのまにか、周りはクジを引き始めていたらしい。

自分は何番だったと主張する声や、相手を見つけて騒いでいる声があちこちから聞こえてくる。

「はい、次はあなた達の番よ。由里香からどうぞ」

「…香帆姉、これ、細工とかないよね？」

「あるわけないでしょ！いいから早く引きなさい。まだ他にも引いてない子いっぱいいるんだから」

「はいはい。…お願い、神様！」

そう言つのと同時に、由里香が割り箸の束から一本引き上げる。

「2番、ね。ペアは後で1番から順に発表してくから、ちょっと待っててね。はい、めがねちゃんもどうぞ」

目の前に差し出された割り箸の束を、じっと見つめる。

私は目をぎゅっと瞑ると、えいっと適当に一本割り箸を掴んだ。

「7番：やったじゃない、めがねちゃん！ラッキーセブンよ」

「は、はあ…」

やたら嬉しそうな香帆先輩に相槌を打つことしか出来なかった。

「7」という数字が、割り箸の先に黒いマジックで書かれている。

ラッキーセブンも何も…肝試であるという時点でアンラッキーとしか言い様がない。

「あおい、葵衣っ！早坂君何番だったのかなあ？」

自分の腕に腕を絡めてきた由里香の視線は、今まさにクジを引こうとしている健人君に釘付けになっていた。

周りを見渡すと、どうやら他の女の子達も気になっているようだ。ちらちらと健人君に視線を向けているのが分かる。

さすが、健人君。やっぱり人気者だなあ…

「おらあ！皆クジ引き終わったな！？まだ引いてないやついたら、今のうち申告しとけよ？じゃなきゃ、俺らと一緒にオバケ役になっちまうからな！！」

そう言う伊淵先輩に、どつと笑い声が巻き起こる。

「じゃあ、ペア発表するぞーっ！てめえら、耳の穴かっぱじって、よく聞いとけよ！！」

沸き上がる、歓声の嵐。
そして一瞬にして、水を打ったように静まり返った。
誰もがじっと耳を傾ける。

「それじゃあ、1番

」

手元にあるのは「7」の数字。

ラッキーセブンか、

はたまたバッドセブンか。

神のみぞ知る、運命はいかに

……

第39話「らっきーせぶん？」

ごくり。

それは誰が唾を飲んだ音だったのか。

その場にいる誰もがその瞬間をじっと見守っていた。

「それじゃあ、1番！」

伊淵先輩はそこで大きく一息つくと、ニヤリと笑ってみせた。

「高橋と梶原ペア！お前ら、トップバッターだかな！
びびんじゃねえぞ、特に男子！」

ひゅーっと一気に囃し立てるようにして、周りが盛り上がる。

呼ばれた2人は照れたように前に出てくると、彼らは板倉先輩から一枚の紙と小さな巾着袋のようなものを受け取っていた。

どうやらあの中に祠に置いてこなければならぬというお供え物が入っているようだ。

あの紙はなんだろう…？

「次つ、2番！！」

その声にビクリと隣で由里香が反応したのが分かった。

隣を見ると何やらお経のようなものをぶつぶつ唱えながら、由里香は必死に手を摺り合わせている。

「ハヤサカクンハヤサカクンハヤサカクン……………」

「酒井・原ペア！！」

「！！！！」

がーん

そんな感じの漫画の効果音がすぐ傍から聞こえてきたような気がした。

由里香は呆然としたまま、その場から一步も動かない。みるみる表情が青褪めていく由里香に、心配した私は慌てて声をかけた。

「ゆ、由里香？大丈夫」

「…ねえ、葵衣、ねえ、今なんて…今…ねえ葵衣…今…葵衣…ねえ…」

余程ショックだったのだろう。

壊れた機械のように同じ言葉を繰り返していたかと思いきや、由里香は宙を見つめたまま、完全に動きが止まってしまった。

えっ…え！？

「ゆ、ゆゆ由里香！？」

だだだだ大丈夫！？

「うふふふふふ」

突然背後の方から愉快げに笑う声がして吃驚して振り向くと、そこには……城乃内さん？

嬉しそうににんまりと笑みを浮かべて、こちらを見つめている。

「ふふ、ざまあみなさいってね、酒井さん やっぱりアナタと早坂君じゃ神様も不釣合いだつて言ってるみたいねえ」

城乃内さんはふふんと得意げに笑って見せる。

その言葉にゆつくりと由里香は視線を城乃内さんへと向けた。

本気で休ませた方がいいのではないかと考えてしまつぐらい、ほとんど生気を失つた顔で由里香は顔を歪めて呟いた。

「うつさい。その口今すぐ切り裂いて欲しいの？」

「最初から望みを抱くこと自体、馬鹿なのよ。あゝあ、可哀想……」

「その首今すぐ絞めて欲しいの？」

由里香はにっこりと爽やかな笑顔で言い放つ。

うわわわわ……！

由里香サン、ちょっと……いえ、かなり物騒な発言をされてますが……！

「あつ、酒井さん。一緒のペアだよね、よろしくね」

こんな不気味な夜には相応しくない、満面の愛らしい笑顔で手を振りながらやって来たのは、（確か）原君だ。

ふと原君と目が合うと、これまた悶え死んでしまうのではないかと、いつぐらいキュートににっこり笑ってくれた。

わわっ……

癒されるなあ……

この時ばかりはあんなに嫌だった肝試しのことを忘れ、つい原君につられて微笑んでしまっていた。

由里香は胡散臭そうに原君を見つめた後、はぐっと重い溜息をつい

て言った。

「……………よろしく頼んだからね」

「もちろんっ、僕に任せてよ」

そう言ってどんと誇らしげに自分の胸を叩く原君は、男らしいと言
うよりやっぱりとっても可愛い。

そんな原君の様子を見て、由里香はもう一度がっくりと肩を落とす
た。

一方、城乃内さんはふふふと微笑みながら、自分の割り箸をじっと
熱く見つめていた。

「やっぱ3番よねえ…私と早坂君の赤い糸は」

「3番！城乃内・関口ペアっ！！」

あんぐりと口を開けたまま、数分前の由里香と同じように城乃内さ
んは固まってしまったかと思いきや、そのままふらふらとどこかへ
歩いていってしまった。

あ、あれ…？

そんな後姿を指差しながら「ざまあみるはお前だ！」と心底可笑し
そうに由里香は笑っている。

先程の様子からしてみれば、少し調子を取り戻したのか復活してい
る由里香の姿に安心して、気付かれないように私はほっと一息つい
た。

良かった…由里香ちょっと元気になったみたい。

そして順調に番号とペアが発表されていき、とうとう次は7番という数字の出番になってしまった。

ドキドキと自分の心臓が高鳴っていくのが分かる。

肝試しはやりたくないけど…

でも相手の人は誰なんだろう？なんて、やっぱりちょっと気になってしまう。

「ちょっとちょっと、まだ雪平君も早坂君も残ってるじゃん！葵衣、雪平君とのラブラブ肝試しのチャンスかもよ！！」

そう言っただけで由里香は楽しげに、片目を瞑ってみせた。

ら、らぶらぶ…？

「7番っ！…おっ、こりゃあまさにラッキーセブンって奴だな」

伊淵先輩は紙に目を通してから、ニヤリと笑って言った。

何だかとてもない予感がして一瞬身体が強張る。

それが間違いでないと気付かされたのは、次の瞬間だった。

「7番っ、白崎・早坂ペア！！」

さーっと色んなものが目の前の世界から失われていくような感覚……頭の中が真っ白になる。

お願いです、神様。

今すぐ…

今すぐこの場から消え去らせてください。

第39話「らっきーせぶん？」（後書き）

正直葵衣を誰とのペアにするかかなり悩みました。

けどここはやはり彼が来ましたね（笑）

はてはて、怖がり葵衣さんの肝試しの行方はいかに？

…という訳で次話に持越しです（笑）

第40話「自覚」

ちくちくちく。

ああ…もう。

何でこんなことに…

否応なしに降り注がれる視線に息が詰まりそうになる。

そつと辺りの様子を伺うと、嫌というほど怨念やら羨望やら入り雑じった眼差しを受けて、慌ててまた顔を俯けた。

だから私のせいじゃ…

心の中で必死に言い訳を試みるが、それが周りに届くことは勿論ある筈がなく。

知れずとため息が零れる。

当の本人は、何を考えているのか相変わらず分からない。

健人くんらしいといえば、らしいんだけど……

整った表情はまったく崩れる気配がなくて。

動揺している自分が悲しくて、気付かれないようについ恨みがましい視線を向けてしまう。

こんなに皆から痛いほど見られるのは、間違いなく健人君のせいなの…

「あ〜お〜い〜」

ガシッと両肩を掴まれたかと思いきや、由里香にいきなり前後に揺

すぶられる。

「なんで…何でアンタが早坂君とペアになってんのよ…!!」

「ゆ、由里香…ちょ…」

めが…メガネが落ちちゃっう!

身体を揺すられていた所為で、眼鏡が鼻までずり落ちてくるのが分かる。

朦朧としてくる意識の中必死に訴えるが、目が怖いぐらい真剣な由里香には聞こえてないようだ。

ひえええええ…

「私と交換しなさいよ!」

「え…ええ!?!」

マジだ…由里香目がマジだ。

ど、どうしたら…

返事が出来ないでいると、さらにグッと一步顔を近付けられる。

「ちょっと、葵衣聞いてんの!?!」

「へ」

「いらっら、ストップ…!!!!」

困っていたところに助け舟を出してくれたのは、庇う様に前に立ってくれた香帆先輩だった。

香帆先輩は呆れたように由里香を見て言う。

「駄目だって言ってるでしょ!クジの交換とかも一切禁止!!ル!

ル違反よ、それは。他の子達だつて貴女と同じように思っている子
いっぱいいるんだから」

「そんなあゝ…香帆姉…」

「そんな目で見たつて駄目よ！それに眼鏡ちゃんだつて好きでこの
番号を引いたわけじゃないんだから。大人しく我慢しなさい。相手
の子にだつて失礼でしょ」

「……」

納得したのか、極まり悪そうに由里香は俯くと、「ごめん」と呟い
た。

そんな由里香に香帆先輩は微笑むと、2回パンパンと手を叩く。

「はいはゝい！それじゃあ今から始めるわよ！1番のペアから順番
に5分後にスタート地点を出てね！！お化け役はもうスタンバつて
るから」

そう言つて、ニヤリと笑う香帆先輩は何だか凄く楽しそうだ。

ううゝ…

やっぱり嫌だな、肝試し…

私も今からでも頼み込んで「お化け役」をやらせて貰おうとも考え
ただ、それはそれで怖そうだし…はあ…

こうして、決心がつかず不安を抱えたまま、合宿最後の夜の
イベント「肝試し」が幕開けすることになってしまった。

チツチツチ…

秒針の音がやけに心に響いてくる。

すでに由里香達もスタート地点を発ってしまい、自分達の順番がすぐそこに差し迫っていた。

時計の長針がカチツと5分を指す。

「行くか」

それを合図に、健人君が歩き始めた。

わわっ…待っ…

慌てて健人君の後ろに付くようにして、おずおずと私も歩き始める。

ひ、ひええ…

先程の騒がしさは何だったのか。

そう思ってしまうぐらい、対照的な静けさ。

しんとした空気が漂う中、時々カサカサと風で木の葉が揺れる音がする。

その度にビクリと反応してしまう自分の臆病さが情けない。

子供じゃないんだから…

健人君の背中だけを見つめながら、そう必死に自分に言い聞かせる。

そういえば前にもこんな状況があったような…

そう、確か健人君の家にお邪魔した帰りに送って貰った時、だ。
あの時もこうやって健人君の半歩後ろを歩いてたっけ…

変わってないなあ、自分。

なんて変な感慨を覚えながら、健人君の背中を凝視する。

「ここを右みたいだな」

「うえっ!?!」

突然呟いた健人君に、驚いて思わず変な声が出てしまった。

穴があつたら入りたい心境というのはまさにこの事だと思う。

は、恥ずかしすぎる…

健人君が道を迷わずに進むことの出来るのは、手元にある一枚の紙
のおかげだ。

何だろうと思っていた紙は、祠の位置が記されている簡単な地図だ
ったようだ。

祠に辿り着くのに、どれぐらいかかるのかな…

持っていたお供え物が入っていると、袋をぎゅっと握り締める。
健人君なら分かるかも…き、聞いてみよう。

「あ、あの…」

その時だった。

ぴちゃっ。

頬にいきなり冷たい感触が走り、悪寒のようなものが背中を下から上まで勢い良く駆け抜けていく。

「ひゃあっ！！！！！！」

な、ななななな何！！！？

頭の中がパニックになり、訳も分からず咄嗟にしゃがみ込む。

何が起きたのか分からなかった。

頭の中が真っ白になっていく。

やだっ…怖いよお…

ガタガタと震える身体を抑えることが出来ず、目をギュツと瞑って自分の身体を抱き締める。

「
いつ」

だから辞めればよかつたんだ…肝試しなんて。無理だつて、正直に先輩に言えば良かつたんだ。

なのに…なのにこんな事になるなんて。

自業自得に決まってる。

こんなんじゃない健人君にだって呆れられちゃ…

「
おい！聞こえてないのか！葵衣っ！！」

何でこんな事になっちゃつたんだろう。

帰りたい…お母さんっ…

込み上げてくる涙を抑えることができず、嗚咽が口から漏れてる。

「くそっ……」

その呟きを耳にした瞬間、身体が強い力で上に引っ張られるようにして、立たせられたのが分かった。

途端に眼前に広がったのは、白い布地のようなもの。

肌越しに感じるのは…健人君のシャツ？

……え？

自分が抱き締められているという事実気付いたのは、数秒後のことだった。

「大丈夫だから…怖がるな」

安心させるようにそっと降ってくる低い声に、徐々に張り詰めていた自分の空気が緩んでいくのが分かる。

「お前…もしかして、こういうの苦手なのか？」

こんな反応ではバレたも同然だろう。

こくと正直に頷くと、健人君がため息を付くのが分かった。

落ち着いてよくよく見てみれば、さっきのが糸に吊るされた^{こんにやく}蒟蒻であることが分かり、一気に恥ずかしさが増す。

こんな古典的な仕掛けなのに…

あんなに騒ぎ立ててしまった自分がホントに情けない。

今の子供達だってこんなのに引っ掛からないかもしれないのだ。

やっぱり呆れられちゃったよね…

気まずさにこの場から今すぐ逃げたい衝動に駆られる。

「なんで…言わなかった？」

「……」

「今ならまだ間に合うけど…辞めておく、か？」

ふるふると、拒絶の意味をこめて首を振る。

だって…せっかく先輩達が用意してくれた企画なのだ。

自分の我が侂でその雰囲気を台無しにする訳にはいかない。

それに…ここで辞めてしまえば、「折角の健人君のペアなのに」と
周りからは**顰蹙**ものだろう。

「…たく…」

行くぞ、という声と共に手を引っ張られる。

視線を自分の手に向けると、大きな角ばった手がぎゅっと自分の手を握り締めてくれていた。

ドクン…

もう落ち着いたはずなのに…

何故かまた泣きそうになってしまう。

何でこんなに優しいんだろう…

意地悪で冷たい時もいっぱいあるけど、本当はたぶんすごく優しい人。

胸がぎゅっと締め付けられるような感覚…

ドキドキと鳴る心臓の理由も。

幾度となく健人君の姿を思い出したことも。

こんなの少女漫画の世界だけだと思ってた。

自分にとつたら程遠い世界…

夢のまた夢の話で、永遠に訪れることなんてないと思ってたのに…

多分、ずっと前からもう。

そっか…

もしかしてこれが「恋」、っていうのかな…

じんわりと感じる温もりに、私はそっと握り返した。

第41話「夢のような」

それからは本当に恐怖の連続だった。

道中で数々の巧妙に仕掛けられたお化けやらトラップに襲われることになり、一息つく暇もまったくなく、地図の道をただひたすら辿っていく。

蒞弱なんて仕掛けが序の口だったことに今更ながら気付き、自分の失態を思い出してまたひとり赤くなってしまった。

仕掛けにあうたびに、口から心臓が飛び出しちゃうんじゃないかと思っただけで、それでも何とか抜けてこれたのは間違いなく健人君のおかげだ。

私1人だったらきつと、その場で固まって動けなくなってしまうていただろう。

「怖いなら目閉じてる」

「う、うん…」

ぎゅっと強く手を握ってくれた健人君に、怖さを一瞬忘れて、また大きく心臓が高鳴った。

赤面してしまっているだろう顔を隠すようにして俯ける。

つい、差し出された手に甘えてしまったけれど…

これで本当に良かったんだろうか？

必死に健人君の後ろを付いていきながら、繋がれた手にそっと目を移す。

大きな手だなあ…

すっぱりと自分の手を覆うように握ってくれている少し骨ばった温かい手。

しばらくぼうつと見つめていたけれど、慌てて我に振り返る。

や、やだ。

何考えてるんだ、私ってば…

今はそんな事考えてる場合じゃないのに。

「…着いたみたいだな」

「え？」

足を止めて、健人君がそう呟く。

顔を上げてきよるきよると辺りを見回すと、暗闇の中、数メートル離れた先に祠のようなものがあつた。

香帆先輩が言っていた祠というのは、おそらくあれの事だろう。

周りに草木が生い茂っていて、なんだか一層不気味な雰囲気漂っている。

すると健人君がいきなり視線をこっちに向けたので、何事かと思つて驚いていると、健人君は「ほら」と促すように告げた。

「え？」

「持つてるだろ。巾着袋」

「あつ、うん」

そ、そうでした…

しっかりともう一方の手に握り締められている巾着袋の存在をすっ

かり忘れていた。

視線を落として確認してから、もう一度健人君を見つめる。

視線でくいつと合図されるのが分かって、身体が硬直するのが分かった。

ま、まさか、これを私に置けというのでしょうか…？

「えと、私が…ですか？」

「当たり前だろ」

無情にもきつぱり冷たく言い放たれてしまった。

健人君は繋がれていた手を解き、じつと私が動くのを待っている。

け、健人君、意地悪だ…

祠に置くぐらい、代わりにやってくれてもいいのに…

そこまで考えてから、ハッと気付く。

でもここまで誘導してきてくれたのは健人君なのだ。

思い返してみれば、私はただただ後をついていくだけ。

何の役にも立てていないし、言うなれば足手纏いでしかなかった。

これぐらい私がしなくてどうする！と自分を奮い立たせて、祠に向き直る。

だけどいざやるとなると、やっぱり足が竦んでしまって動かない。

私の馬鹿馬鹿…

小学生じゃないんだから…もういい年した高校生なんだよ！？

こんなの怖がっててどうするの。
置くだけ、置くだけなんだから…

そう自分に何度も言い聞かせてみるも、一向に足が動いてくれる気がなくて。

隣で健人君が小さくため息をつくのが分かった。

「もういい。貸せ」

「え？は、はい…」

ずい、と差し出された手に、言われるがまま大人しく巾着袋を渡す。健人君はそのままつかつかと早足で祠に歩み寄ると、巾着袋を台の上に静かに置いて、「行くぞ」と歩き始めた。

あまりにもあっけなく終わってしまった事に、私はぽかんと見つめている事しか出来なかった。

こ、こんなに簡単な事だったなんて…

情けなさのあまり泣きたくなる。

「い、ごめんなさい…」

絶対健人君呆れてるよね…

私なんかとペアを組まされたことに、申し訳なさで胸がいつぱいになる。

他にも健人君と組みたい女の子だって沢山いたのに…

顔を俯けていると、本当にぼろぼろと涙が零れ落ちてくる。

や、やだ…
こんな事で泣くなんで…

途端に、ぐいつと力強く腕が引かれるのが分かった。

驚いて顔を上げると、健人君はさっと腕時計を確認するような仕草を見せてから、帰り道とは逆の方向に歩き始める。

「け、健人君!？」

「いいから黙ってついて来い」

有無を言わさない口調に、私はそれ以上何も言う事ができずに口を噤む。

さあつと顔が青褪めていくのが分かった。

ど、どうしよう…

もしかしなくても健人君のこと怒らせちゃった…？

どうしよう、どうしよう、と同じ事だけが頭の中でぐるぐると渦巻いていく。

もしかしてお仕置きとか、されたりするんだらうか。

森の中に置いていかれるとか…？

そこまで考えて、ぞつとし身体を震わせる。けれど今の自分に抗えるわけがなかった。

そうこうしているうちに、辿り着いたのは川原のようだった。

視界が暗くて一瞬どこだか分からなかったけど、川の流れるせせら

ぎの音が微かに聞こえてくる。

そして私はある現象に気づき、この時ばかりは泣いていた事や怖がっていた事もすっかり忘れて、わあっと思わず感嘆の声を上げてしまった。

無数の淡い光がゆったりと踊るように舞っていた。

まるで天の川のように、川原がキラキラと幻想的に輝いている。

あまりに美しい景色に、私は呆然としてしまった。

す、すごい……！

「け、健人君、これって」

蛭だよね？と興奮しながら後ろを振り向く。

けれどそう尋ね終える前に、いきなり唇に何か熱いものが覆いかぶさってきた。

驚く暇もなく、私はそれを受け入れる。

「んっ……」

何度も何度もじつくりと確かめるように唇を合わせられて、ドキドキと苦しくなるぐらい心臓が鳴るのが分かったけれど、何も考えることができなかった。

荒々しく、けどどこか優しい唇に身体が溶かされていくような感覚……

ぎゅっと瞑っていた目をふと開くと、ばちつと健人君と目があった。熱っぽい真剣な瞳にドクンと大きく心臓が飛び跳ねる。

と同時に、強く身体を引き寄せられてきつく抱き締められた。

「
」

…え？

何か耳元で囁かれたけど、ぼうつとする思考で聞き取ることができなかつた。

耳元に熱い息がかかり、くすぐったさにぎゅっと身を竦める。

だめ…

頭に血が上って何も考えられそうにない。

されるがままじっと身を任せていると、しばらくして健人君が腕の力を緩めるのが分かった。

小さく息をついて私の手をとると、健人君は黙ったまま再び来た道を引き返し始める。

きつと今林檎みたいに顔が真っ赤になってる…

ドキドキとおさまりそうにない心臓を持って余しながら、私は健人君の後姿を見つめた。

健人君が何を考えているのか、まったく分からなかった。

ねえ、健人君。

なにを今、考えてるの…？

胸がぎゅっと驚掴みされたように苦しくなる。

どうして、私にキスしてくれるの…？

声にならない問いだけが、たちまち闇の中に紛れていった。

第41話「夢のような」(後書き)

こんにちは。もしくは初めまして。夕氷嘩と申します。

本当にお久しぶりです(滝汗)

更新が本当に遅くなってしまっでごめんなさい！たくさんの応援メッセージを下さった方々、本当にありがとうございます；；；すぐく励みになりました；！

こんなに長らく更新していないのに、ずっと待っていて下さる方達がいとても嬉しかったです。ありがとうございます。；；本当に一体この話はいつになったら終わるんだ(汗)何年かける気なんですよ自分…

ちなみに当初の予定の通り行くと、話の筋的に3分の1も終わっていないような…(苦笑)すみません、本当に頑張ります(T-T)

ちなみにこれにて一応合宿編は終了です(え)

次話の予告ですが、幕間です。

珍しいひとが視点になっております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481b/>

Miraculous Days

2010年10月10日11時41分発行